

---

# 孤独な魔法少女は英雄になれるか？

鳥口泣鳴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な魔法少女は英雄になれるか？

### 【NNコード】

N3687X

### 【作者名】

鳥口泣鳴

### 【あらすじ】

内氣で臆病で引っ込み思案で後向きな少女、法子はある日落ちていた日本刀の力で魔法少女となる。喜び勇んで魔物退治へ出かける法子だが……。

少女は人々に愛される事が出来るのか。

この小説はarcadiaにも掲載させていただいております。

## 魔法少女は物語る

朝は魔法の時間。爽やかな鳥の声と差し込む朝日が心も体も綺麗にしてくれる。見るもの全てが新鮮で、聞くもの全てが心地良い。朝起きたまでは愛しの彼にご挨拶。写真立ての中に居る彼に私は微笑んで、

その隣の置時計が目に入った。

「げ」

清々しさは一瞬で消え去りて、私は飛び起きて、慌てて着替え、用意もそこそこに部屋を飛び出して、階下へと走り下りる。

「きやー、遅刻遅刻」

リビングでは既に弟が朝食を摂つていて、駆け込んできた私を見ると呆れた様子で呟いた。

「本当に遅刻遅刻なんて言う奴初めて見た」

「つるさいなあ。て言うか、起きてたなら起こしてよー。」

弟は食パンを齧りゅつくりとした調子で口をむきむきとさせてから、ようやく口を開いた。

「だつて先に行つてたと思つてたし」

「何で？」

「いや、だつてさ、朝飯食いに出て来たら姉ちゃんも母さんも父さんも誰も居ないから、先に行つたと思つじやん」

「お父さんとお母さんも？」

その時、リビングの外から大きな音と共に叫び声が聞こえた。

「ああ！ もうこんな時間！ ちょっとあなた！」

どすんばたんという音が鳴りやみ、しばらくしてまた叫び。

「寝ぼけた事言つてないで早く起きてー、遅刻するからー。」

「何！ ああ、本当だ！」

そうしてどすんばたんという音が響いてくる。多分、慌てて用意をしているのだ。先程の私と同じ様に。弟は激しい用意の音を聞き

ながら、ゆつくりとココアを飲み干して言った。

「似た者同士。俺以外すばらすぎ」

反論したいが言い返せない。確かに余裕を持つて起きたのは弟だけなのだ。

と、そこでふと気が付く。

「そういうえば、在校生って今日一時間早いんじゃなかつた？ 準備するとかで」

「え？ あ！」

「なんかもう時間過ぎてない？」

「やべー！」

弟が慌てて立ち上ると、鞄を拾い上げた。

「やーー、結局あんたが一番すばらー」

「うつせえ！ 勘違いしただけだしー！」

「でも、もう遅刻だよねえ。私達はぎりぎり間に合いそuddi、遅刻するのはあんただけじゃん」

「まだ間に合つー！」

そう言つて、弟は飛び出していった。

「もう完全に遅刻だよー」

追い打ちを浴びせてみたが、聞こえているのかいないのか、玄関が猛烈な勢いで開いた音がして、窓の外から激しい靴音が聞こえてくる。

ちよつとすつきりしたのもつかの間、こちらも時間が迫っている事に気が付いて、私は早速朝の準備の続きを取り掛かつた。そこに両親も加わつて慌ただしい準備が繰り広げられた。

何とか準備を終えて、まだカメラをチェックしている両親を置いて、私は先に学校へと向かつた。道中、どうにも身だしなみが気になつて、思わずコンパクトミラーを覗いてしまう。なんたつて今日は卒業式。最後を飾るといづのに、無精な姿では挑めない。

何度も何度も鏡の中の自分を確認していると、いつのまにか学校に着いていた。まだ五分ある。間に合つた。

教室の中は卒業式だと言うのにいつもと変わらぬだらけた様子だった。たったそれだけ、いつも通りの光景を見ただけで、私の中に瞬く間に寂しい気持ちが満ちた。今日で終わり。そう思うと、何だから教室に入り辛い。入り口でためらっていると、頭を叩かれた。

「おい、こんな所で立ち止まつてないでさつさと入れ」

担任に促されて私は慌てて席に着く。もうクラスの皆は整然と席に坐つて、一時前の喧騒は消えていた。それもまた授業中に見慣れた光景で、いつもは何とも思わなかつたはずなのに、再び悲しみが湧いた。

面倒臭がりだつた担任らしい小さっぱりとした最後の言葉を経て、卒業式が行われた。卒業生、在校生、教師、家族、沢山の人人が居る。完全無欠の静けさではない。所々でざわつきが起こる。でもそのざわつきも遠慮に遠慮を重ねてこそそと隠れる様に交わされていて、耳に届く度にこの場所は静かなんだと再確認させられた。多分、本当に音が無い空間よりも余程静かなのだろうと思つ。

そんな空間の中で私達家族はばらばらに居た。でも時折意識を向けると、向こうもこちらを見ていたりして、繋がりが目に見える気がして、何だか恥ずかしかつた。両親と私の目が合つた。すると両親は大きく手を振つて、その行為が注目された事に気が付いて赤面し、以後は大人しくしていた。それでも時折目が合うと、恥ずかしそうに微笑み合つた。弟は在校生一同が唱和する所で何だか周りから小突かれていた。多分、言葉を間違えたのだろう。別に遅刻が直接の原因ではないだろうが、何となく朝に遅刻したのだろう事を思つて、ほら見た事かと呴いた。するとまるでその呴きが聞こえたみたいにこちらを睨んできて、何か豪い剣幕で口をパクつかせていた。私はと言つと始めの内こそ悲しくはあつたけれど、隣の子が泣き出した瞬間から徐々に覚めていき、終わる時にはほとんど何も感じなくなつていた。ああ、これで終わりかだとか、泣いている人は偉いなあだとか、そんな淡白な思いを微かに抱いただけだった。

卒業式が終わるとそのまま体育館の外に出て高校生という身分が

終わる。まだ大学生でも社会人でも無い亩づりの人々は高校生という地盤に縋ろうと、そのまま帰ろうとはせず、校庭に散らばって、最後の思い出づくりを始めた。

「へい！ 法子！」

「痛！」

お尻を叩かれた衝撃で前に飛びあがつた。振り返ると親友の摩子がにやにやとした笑顔を浮かべていた。

「何すんの！」

「そんな事より良いの？」

摩子が離れた場所を指差す。

「ボタン取られちゃうかもよ？」

見れば女子の人だかりが出来ていた。その光景の意味を悟った私は一瞬で寒気だつて、慌てて駆けた。人だかりに手を差しこみ、

「どいて！」

無理矢理その群れを押し退けて、中心に居る男子に手を伸ばす。

「将刀君！」

私が声を掛けると、

「お、法子」

将刀君はすぐにこちらを向いてくれた。

「ボタン頂戴！」

一斉に周りの女子に睨まれた。だがそんな事に構つてはいられない。むしろだからこそボタンを貰わなくてはならない。

将刀君はブレザーを摘まんでみせて、

「良いよ。第一ボタンだけ？」

周囲の眼がきらりと光る。ブレザーには二つボタンが付いている。残りのボタンを貰う算段をしているに違いない。事実、中学校の卒業式では学生服の第二ボタン以外の全てを他の女に持つて行かれた。かつての失敗を繰り返すつもりは無い。私は恥も外聞も捨てて周りに聞こえる様に大きく叫んだ。

「ううん、両方共」

驚愕と敵意と嫉妬と殺意が私に突き刺さつた。そんな中で私はじつと耐えて将刀君の反応を待つた。しばらくブレザーを見下ろしていた将刀君はやがてあつたりと頷いてブレザーのボタンを引きちぎつた。

「良いよ、どうせもう着ないし」

あつといつ間に、ボタンは一つ共取れて、私の手に手渡された。

私はそれをぎゅっと握りしめる。温かかった。

「高校も終わりだな」

「そうだね。離れ離れになっちゃうね」

ちょっととしんみりとした会話だ。周りを囲む睨みつけてくる女子達が居なければ。

「ま、遠くに行く訳でも無いし、すぐに会えるけどな」

「浮気しちゃ駄目だよ？」

信頼していない訳ではないけれど、私は半ば本氣で心配してそう言つた。

将刀君はこちらを力強く見つめて、

「安心しろよ。俺にはお前しか見えないから

そう言つてふつと笑つた。

思わずぶつ倒れそうになつたのを何とかこらえた。頭の中の叫びと周囲の悲鳴が奇妙に共鳴する。嬉しそうに。にやけていないかと心配になつた。周りから「私もあるな事言わせてみてえ」と言う声や「マジで、あの女殺す」という声が聞こえてくる。勝つた。周囲の雜音全てを無視して、私は将刀君に笑いかけた。

「ありがとう。私も将刀しか見られない」

ありつたけの思いを込めてそう言つた。

すると突然将刀君が笑い出した。何か変な事でも言つただろうか。

私としては渾身の言葉だったのに。不安が一気に広がつた。私がじつと将刀君を見つめると、すぐに笑いが止んで弁解する様な口調で

でもまだ言葉の端に笑いが覗いている

「悪い。ただなんか漫画みたいなやり取りだなつて思つたら面白く

て

確かにそうかもしねない。けれど幾らなんでもこの状況で笑うのは失礼だ。私が目と表情で思いつきり不快を告げると、将刀君は「悪い悪い」と半笑いの表情で、まるで反省した様子も無く、その上輪の外からの

「おーい、将刀！ 写真撮らうぜ！」

という言葉に、手を振つて

「分かつた、今行く！」

と言つてのけた。

私がますますしかめつ面を強くすると、将刀君はちょっと困つた顔をしてからもう一度悪いと咳いて、それから私の耳元に口を近付けた。

「結構嬉しかった」

そう言つて、将刀君は私に手を振つて、その場を離れていった。女子の群れもそれに釣られる様に付いていく。私は一人その場に取り残された。

言葉の内容には不満が残るもの、私は一瞬前のやり取りに顔を火照らせて、その場で硬直して立ち尽くした。嬉しさと恥ずかしさが絹い交ぜになつて、心の中は荒れ狂つていた。

「良かつたじやん。ボタン貰えて」

背後から声を掛けられて振り返ると、摩子が笑つていた。

私はしばらくそのなじみ深い顔を見つめた後、猛る心に任せてチヨップした。

「ぐへ、何で？」

「いや、何となく。居ても立つても居られなくなつて」

「相変わらず訳が分からない」

親友への攻撃で心を静めた私は気になつた事を尋ねた。

「摩子ももうボタン貰つたの？」

「私はそんな風習には興味ないから」

「風習つて……でも、他の人にとられるの嫌じゃない？」

「そつちと違つて、私の彼氏はそんなに人気じやないからね」

摩子は笑つてそう言つたが、その後ろでは見知らぬ女子に話しかけられている摩子の彼氏が居る。私はそれをそつと指差した。

「良いの？」

摩子が振り返る。

次に瞬間には彼氏へ向かつて駆け出して行つた。

それを笑つて見送つていると別の友達が何人かで固まつてやつて來た。

「卒業おめでとう」

「そつちこそおめでとう」

何となくずれた挨拶だ。それこそ今の時期は日本全国で執り行われている別れを惜しむ会話を交わしていると、次第にクラスのみんなが集まつて来て、摩子も戻つて来て、全員が集まつたところで集合写真を撮つた。後は校門を出たらクラスは離れ離れになる。みんなで何か食べに行こうという提案もあつたけれど、結局用事のある人が多くて立ち消えになつた。私も家族と食事に行く。もしもみんなで何処かへ行くのなら優先しようと思つたけれど、立ち消えになつたのならしようがない。もう会えないというのに、こんな事で良いのだろうかという思いも心の端にはあるけれど、でもこんなものかなという思いが強かつた。誰かが「うちのクラスらしいな」と言つた。みんな笑つて同意した。私もそうだと思つた。行き先の違うクラスメート達はぞろぞろと校門までの最後の旅路を楽しんだ。

摩子は他の友達と何処かへ食べに行くらしい。校門を出たら一人の道は違う。中学と高校を一緒に過ごしてきた親友ともお別れだ。隣に並ぶ摩子が何だか黄昏た様子で遠くを見ながらぼんやりと呟いた。

「ねえ、約束憶てるよね？」

「勿論」

私もぼんやりとそれに応えた。何だか心が“じりじり”としていて、しつかりと思いを抱けない。

「一緒にAランクに合格だからね

「分かつてるつて」

「修行さぼっちゃ駄目だよ」

「そつちこそ」

摩子が急に笑って拳を突き出してきた。

私はその拳に自分の拳をかち合わせた。一人だけの合図。

校門を抜けた。

「じゃあね、法子」

「うん。じゃあね、摩子」

私達は分かれる。約束だけを結び付けて。いずれ約束の糸を辿つて出会うのだろう。細い糸に引き合わされた未来の自分と親友を思い描きながら、私はそんな事を思つて、校門の外で待っていた家族と合流した。

卒業祝いの食事も終えて、高校生でなくなつた私は、布団に転がりながら明日からの日々を思い悩んだ。

携帯を無為にいじりながらしばらく考えて、ようやく私は決心する。

明日は摩子達と大学に着て行く為の服を買いに行こう。将刀君と遊びに行くのは明後日だ。

大学というのは不思議な所で、種々雑多な人々が過去と現在と未来を交差させて、驚く程多様な物語を織り成している。それらの物語は余りにもあつたりと余りにも無造作に、そこら中で語られ消えていく。

授業の無い教室でまた一つの物語が語り終えられた。

それに対しても聞き手はその余りにも重い内容にどう答えて良い物かと迷つて、

「大変だつたんだね」

それだけ言った。

語り手は笑う。

「そんな大した事じゃない。」これ位の経験、誰だつてしているだ  
ら「う？」

そんな訳が無い。家族を突然失うなんて、そんな事。そう聞き手  
は思つたが、語り手が笑顔を浮かべているので、率直な意見は言  
い辛かつた。

「まあ、私の話はもう良いだろ？」それじゃあ、次は法子君、君の  
番」

話辛かつた。今の話に比べたら自分の過去など無いに等しい。聞  
き手は躊躇するが、語り手はそれを許さない。

「君が話してくれないと不公平だる。まあ、聞かせておくれよ」

「うーん、アイナさんの過去に比べたら、ホントに下らない話なん  
だけど」

「そんな事無いさ。まあ、お願ひするよ」

「うん。じゃあ、私が魔法少女になつた話なんだけど」

聞き手になつた元語り手が手を叩く。語り手になつた元聞き手は  
恥ずかしそうに俯いてから、空き教室に集まつた出会つたばかりの  
知り合い達に向けて訥々と語り始めた。

変身願望は誰もが持っているありきたりな願いの一つだ。誰かになりたい。何かになりたい。何かをしたい。何かを変えたい。現実への不満は多少なりとも変身に繋がる。

変えたい。変わりたい。努力の伴わぬそれらの願いは時に現実逃避と蔑まれるが、その愚かさが時に世界を変える。断じて言おう。何かに変わりたいと願うあなたの変身願望は崇高な物である。

ここにもそんな変身願望を持つに至った者が居る。名を五月女摩子といつ。何処にでも居る中学生である。日常に不満は持つていなし。じくありきたりの世界に囲まれてじくありきたりの生活を送っている。名前が些か特殊だが、本人は余り気にしてない。名前によるいじめも無く、生活は順風満帆と言つて良い。

では何故変身願望を持つに至ったか。勿論事前に述べた通り、変身願望など誰でも持つている。だが彼女は実際に変身するに至る。そこに違いがある。では何故彼女は変身するに至ったか。一体どんな願いを持っていたのか。

幾人かの方は早とちりしてこう考えたであろう。ははあ、これは恐らく恋愛絡みだなど。思春期といえば恋愛の事に違いないと。恐らく片思いでもしているのだろうと。だがばずれである。現時点では彼女に恋愛願望は無い。加えて前述したとおり、彼女は甚だ順風満帆である。それは人間関係も例外ではない。そもそもそれは誰もが持つ悩みの一つであり、実際に変身する者との差が生まれる程の願いではない。

では何故か。

と、酷く仰々しい書き方をさせていただいた。ところがほとんどは外連味である。彼女が願望を持つに至った経緯に何か凄い期待をした方も居るかも知れない。だが繰り返しになるが、彼女は至つて

普通の中学生である。がつかりさせない様にあらかじめ言つておくが、彼女が変身動機は良くある心の動きであり、魔法少女を含む变身ヒーローの中にもこの動機で変身した者は少なくない。願望の動機はとても単純でそして少し不純だ。

町に魔物が出現した。そつ一ニュースで報じていた。

摩子は朝ごはんを食べながらそのよくあるニュースを聞き流していた。

魔物は魔女つ娘を名乗る変身ヒーローに倒されて事なきを得たといふ。

特に興味も無いので摩子はまるつきつ別の事を考えながら「飯を口に運んでいる。

「良いなあ」

一方、姉は目を輝かせて物欲しそうな顔でテレビに釘づけられていた。

「なりたいの?」「

聞くまでも無い。姉はいつも公言している。

「勿論なりたい」

「ふーん」

姉の言葉はそこまで珍しいものではない。変身ヒーローになりたいと言う者は多い。

「見てみなさい、あの楽しそうな表情」

特に小さい子供の憧れが強く、将来なりたい職業の上位に食い込んでいる。今、幼稚園や小学校では有名ヒーローの物まねが流行っていて、摩子が小学生だった時からそれは変わらない。姉が小学生だった頃からも変わっていない。

「ああ、いいなあ。なりたいなあ」

けれど、大人が変身ヒーローを願うのは子供っぽいという風潮が何故だかる。特に高い年齢層程、変身ヒーローは馬鹿げたものであるという考えが蔓延している。魔法が認知していなかつた頃の名

残なのか、あるいは衣装の所為なのか（一般に変身ヒーローの服装は普段着とかけ離れている）、あるいは生産性の少なさに起因しているのか。理由は現在でも様々に議論されているが、とにかく変身ヒーローを志す者は幼いという風潮が確かにある。

その言でいけば、姉は幼い。実際、中学生の摩子から見ても、大学生の姉は少し子供っぽいところがある。けれど一概に個人の成熟性にのみ原因を求める事は出来ない。何故なら高い年齢層と違つて、最近の若者の間では変身ヒーローを目指す事が容認され始めているからだ。

原因是単純で、ロンドンで開かれた第十五回技術革新の諸問題における世界的枠組み会議、通称第十五回魔術会議において、魔物の討伐に関する条約が見直され、民間の魔物討伐従事者の待遇が向上し、日本においても魔物討伐の国家資格、及び民間資格の所持者に対する特に金銭面の大幅な改善があつた為である。

魔物討伐は儲かる。第十五回魔術会議以降急速に広まつたその噂  
金銭だけで計るならそれは確かに正しかった によって、魔物討伐専門職の一つである変身ヒーローを目指そうとする者が増えた。

今迄は変身ヒーローなどテレビの向こうで活躍している有名人位に思つていただけに、急に舞い込んだ儲かるという実益の衝撃は凄まじく、儲かるから派生した噂、曰く楽そう、曰く楽しそう、曰く人気者になれる、曰く一生安泰、曰く自慢出来る、曰く自由である、曰く税金がかからない、これらの人間なイメージが広がり過ぎた。その為、就職を嫌惡する大学生や会社から逃避したい社会人がその絵に描いた餅に憧れを抱く様になつた。

「でもあたしには才能が無いからなあ」

そうして多くの者が挫折した。幾ら待遇が改善し多額の金銭が受け取れるようになつたとはいえ、その為には資格を取得しなければならない。少なくとも民間資格の3級（町内の防衛相当）を持たなければはした金すらもらえない。まともに生活するのであれば、民

間資格の一級（広範囲の防衛相当）、あるいは国家資格のE+ランク（レベル2以下の作戦従事）が最低条件である。

けれど未だに希望者は後を絶たない。まだ挫折を味わっていない者が後から後からやつてくるのもそうだし、特に変身ヒーローの場合突発的な才能の開花が良く話題に上げられている為に、自分も何かの偶然でなれるんじゃないかと期待してしまうからだ。

だから才能が無いと嘆いている姉もいつか何かの偶然でなれるのではないかという希望に身を焦がしている。

「ホント楽そうだよね、魔法少女」

テレビの向こうでは丈の短いドレスの様な衣装を着た女の子が皆の喝采に頭を下げている。乐そうかどうかは分からないが、パツと見れば楽しそうには見える。実際は分からぬが、その楽しそうな表面だけを見て志す者は殊の外多い。

「摩子はなりたくないの？」

「私はあんまり興味ないなあ」

「楽しそうじやん。姉妹で魔法少女とか絶対に人気出るよ」

「アイドルじゃないんだから。それにあの衣装、お姉ちゃん着るの？」

テレビの画面には大人が着るには恥ずかしい衣装を着た少女が喝采の中去つていく姿が映っている。

姉はしばらくテレビに目をやつてから摩子に笑いかけた。

「いける！」

「無理だよ」

摩子はあっさりと言い放つて、しょんぼりと頃垂れた姉を余所に、またご飯に集中し始めた。

学校へ行くと友達が盛り上がりっていた。

「どうしたの？」

鞄を置いて友達の輪に入つて行くと、目を輝かせた友達が一斉に摩子へと目を向けた。

「あのね、今度の日曜日にサッカー部の練習試合があるんだって。それでみんなで応援に行こうかなって」

「ホントに？ 私も行きたい！」

勿論、彼女達はサッカーを見たい訳じゃない。見たいのはサッカーに興じる部員達だ。サッカー部に気になる男子が居る。だから見に行く。応援に行く。摩子もその例に漏れず、サッカー部に居る気になる男子を見に行きたかった。

「何？ 応援に来てくれるの？」

女子だけの輪に闖入者がやつて來た。サッカー部に在籍している男子だった。

「いや、あなたの応援に行く訳じゃないから」

一人が辛辣な言葉を吐いた。それに合わせて他也同意する。

「ちょっとで良いから応援してくれよ」

その男子の眼が摩子に向いた。

「摩子は応援してくれるよな！ なんたつて幼馴染なんだし」話を振られた摩子は考え込む様に指を口に当てる、

「良いよ。ついでに応援してあげる！」

「ついでかよ！」

「そりやね」

男子が突っ込みに摩子は何を当たり前なという表情を返した。男子はぐつと言葉を詰まらせて何処かへと走り去つていった。

「応援してあげるって言つたのに」

摩子が不思議そうに首を傾げる。その様子を見て、周りの友達は氣の毒そうに男子の消えた先を見送つた。

「惚れた相手にああ言われたら心折れるわ」

「脈の一打ちも感じさせない切り捨て方だつたね」

ひつそりと話す友達に気が付いて、摩子は口を尖らせた。

「何々？ 何で内緒話してるの？」

「何でもない」

尚も詰め寄る摩子を上手にいなしながら、話題はまた週末のサッ

カーの話題へ、そこから昨日のテレビへと移つて、担任が来たところで中断された。

いつもの日常、いつもの友達。ともすれば飽きてしまいそうな程、満ち足りた生活こそが、摩子の日常だ。

時が過ぎるのは早く、授業は進み、お昼休みが終わり、下校の時刻を過ぎて、摩子は帰り道の途中で友達と別れた。さて、帰つたらどうしようかな、今からでも戻つて別れた友達を誘つて遊びに行きたいな、などと考えながら歩いていると、ふと道端に犬が集まつて吠えているのが映つた。

「犬だ！」

喜び勇んで駆け出して、すぐに犬の様子が荒れている事に気が付いた。何やら喧嘩をしているみたいだ。見れば真ん中に震える猫の様な生き物がいる。

囮む犬達は何だか獰猛そうで危険な様子が漂つてゐる。助けに行きたいが、危なそうだ。摩子は一瞬躊躇したが、すぐに使命感に燃えて駆け寄つた。

「駄目だよー」

摩子が犬の集団に突つ込もうとすると犬達は驚いて逃げていった。一匹、頭を押さえる猫の様なのが残つてゐる。

「大丈夫？」

それが頭を上げて摩子を見た。その顔に摩子は戸惑つた。それは猫とハムスターのあいのこの様な顔をしていて、猫の様で猫ではなかつた。摩子の知らない種類の生き物だ。何処かにいそうな動物ではあるけれど、まだ見た事が無い。摩子は誰かのペットなのかなと動物をまじまじと見つめた。その時、動物が口を開いて、摩子を更に驚かせた。

「ありがとう。助かつたわ」

頭を撫でてみようかと伸ばしていた摩子の手が止まる。摩子はしばらくの間、口を開けない程驚いて固まつた。

「ここらは治安が悪いのね。参つたわ」

「喋った！」

摩子の大声に今度はその生き物が驚く番だ。

「な、いきなり大声を出さないでよ」

「また喋った！」

「当たり前じゃない……あなた、もしかして魔術で生み出された生き物は初めて？」

「魔術の？」

そういうえばと摩子は今日の授業を思い出した。社会の時間に魔法によって生物が初めて生み出されたという話をしていた気がする。確か、1999年のアメリカの……そこから先は思い出せなかつた。テストに出そうだし帰つたら覚えようと心に決めた。

「ちょっと何黙り込んでるの？ まあいいわ。とにかくありがとうございます」お礼、をしたいんだけど

「わあ、凄いなあ。本当に喋つてる」

摩子が近付いて頭を撫でようとすると、その生き物はひらりと避けた。

「ちょっと幾らなんでもいきなり撫でようとするとなんて、無礼なんじゃない？」

「あ、ごめんなさい」

「まあ、今回は大目に見てあげるわ。で、お礼なんだけど」

その生き物は辺りを眺めまわして、それから耳をひくひくと震わせて、それから道の先に目をやつた。

「あ、来た来た」

道の先に影が見える。影は少しづつ大きくなつて、やがて黒いコートを着た男だと分かる。眼鏡を掛けた、理知的で、何だか冷たそうなその男は、摩子の前に立つといきなり頭を下げた。

「こいつを助けてくれたんだね。ありがとうございます」

「え、ええ。こちらこそありがとうございます」

いきなり現れた男に戸惑つて、訳も分からず摩子も頭を下げた。

男は口の端を釣り上げて笑つてから、厳しい表情を作つて生き物

を見た。

「マチエはもうと氣を付けなさい。君自身はそんなに強くないんだから」

「外に出歩くへらー良いじやない」

「それでこんな事になつたんだろう」

マチエと呼ばれた生き物はつんとそっぽを向いて、聞き流す体制に入る。男はしばらくそんなマチエを見つめてから、やがて摩子に向き直つた。

「助けてくれたお礼をしたいんだが」

摩子は何だか浦島太郎みたいだなと思つた。ついでいたらおばあさんにされてしまうかもしれない。

「私は骨董品を扱つているんだ。もしも気に入つた物があるなら一つあげよ。店に来るといい」

摩子は玉手箱を開けてよぼよぼになる自分を想像して首を振つた。マチエの馬鹿にした様な声が男に浴びせられる。

「きんげんやは何にも分かつてないね。女の子がそんな骨董なんて欲しがる訳ないでしょ」

「そういうものなのか？」

マチエが来馬鹿にした様に笑つ。まるで人間みたいな仕種だ。摩子の目がマチエに釘付けになつた。今自分は凄い物を見ているんじゃないかと、何となく嬉しくなつた。そんな摩子をちらりと見やつた男はにやりと笑つて、

「ああ、良い事を思いついた」

静かに言つた。

「さつきからマチエ君が気になつてゐるみたいだ。良かつたらマチエ君をあげよ」

「は？」

マチエが素つ頓狂な声を上げる。摩子も同じ心境だつた。

「何でいきなりそんな事になる訳？」

「何を言つ。マチエ君にだつて悪い話じやないだろ。見た所素養

は十分だ」

マチエの田が摩子を射抜いた。何だか品定めをする様な田付きである。しばらく摩子の全身を仔細に眺めてからアチエの首がゆつくりと縦に振られる。

「確かにそうみたいだけど。でも本人の意志も尊重しないと」

「なら聞いてみよう。君、えーっと名前は」

「摩子です」

言つてから、知らない人に名前を教えちゃまずかったかなと思った。出会つてからまだ少ししか経つていないのに摩子の中から警戒心が消え去つっていた。

「どうか、摩子君、君は魔女を、あー、今の言葉で言えば、魔法少女をどう思う?」

魔法少女? 摩子の頭に今朝のやり取りが浮かぶ。姉の言つていた言葉が思い出される。

「楽しそう」

「なり決まりだ。お礼としてマチエ君をあげよ!」

「どういう事ですか?」

摩子の質問を無視して男は背を向けた。

「それでは第二の人生を楽しみたまえ」

高笑いを上げながら何処かへと去つていいく。

後に残された摩子は訳が分からずに、同じく残されたマチエを見つめた。マチエも摩子の事を見上げていた。

「あなた本当に良いの?」

「何が? ですか?」

「別に敬語なんか使わなくていいわよ。それで、魔法少女、本当に

良いの?」

「え?」

「だからあたしを受け取るつて事は魔法少女になるつて事だけど本当に良いの?」

「え? えーっ!」

摩子の悲鳴が町の中に響き渡った。

彼女は驚きの声を上げたが、それもつかの間の事だ。不思議な生き物と話をし、実際に魔法少女になれると思ふと気が付いた時、彼女は魔法少女になつてもいいかなと思う様になる。流されるままに彼女は魔法少女となる。その場の雰囲気に呑まれて自身の願望を形作る。それはある一面を見れば不純で主体性の無い意志の現れだが、人間としては当たり前でとても単純で、そうして理由が無い分だけ壊れにくい。壊れても失うものが無い。この流されて作られる願望は復讐によって作られる願望と並んで説話、伝説に極めて多く見受けられ、悲劇につながりやすい復讐とは反対にとても楽観的で民衆の支持を受けやすい。英雄は時代の望む声によつて生まれる。つまり流逝れて大事業の願望を抱く者は英雄たりうる資質を持つている。はつきり言えば、彼女は主人公たりうる。もつと正確に言つならば、ヒーローの素養を持っている。彼女は明るく、快活で、人好きされ、才能に溢れ、善悪を知り、勇気を湧かせ、公正であり、固い意志を、愛すべき者を持ち、時に悩み、時に苛み、時に阻まれ、時に悲しみ、時に失い、最後には必ず勝ち、信念を全うし、世界を救う。まさしく説話の中の英雄である。

だがだからこそ、この物語の主人公たりえない。この物語は卑屈で信念を信じ切れず勝つか負けるか分からぬ、そんな普通の人間が英雄と肩を並べようとする物語だからだ。

彼女は英雄であつて主役ではない。よつて彼女の話はここで途絶する。次からが本物の主人公が現れる本当の物語の始まりとなる。

## 主人公参上

変身願望は誰もが持っているありきたりな願いの一つだ。誰かになりたい。何かになりたい。何かをしたい。何かを変えたい。現実への不満は多少なりとも変身に繋がる。

変えたい。変わりたい。努力の伴わぬそれらの願いは時に現実逃避と戻まれるが、その愚かさが時に世界を変える。断じて言おう。何かに変わりたいと願うあなたの変身願望は崇高な物である。

ここにもそんな変身願望を持った者が居る。名を十八娘法子といふ。何処にでも居る中学生である。『ぐくありきたりの世界に囮まれて』ぐくありきたりの生活を送っている。姓が些か特殊なのがコンプレックスの一つで、周囲の注目以上の注目を感じて小さくなり、いつも苗字を呼ばれる度に怯えている。名が地味なのも気にして常日頃からもっと良い名前にしたいと思っている。

彼女は常日頃から自分を変えたいと願っている。名前もそうであるし、性格ももとと明るくなりたいし、小学生に間違われる事の多いこの顔や体ももう少し大人びたつていいんじゃないかと思つてゐるし、もっと周囲と上手く付き合いたいと思つてゐるし、そして何より何だか満たされない。常日頃から何か変わつて欲しいと願つてゐる。珍しくもない一クラスに一人はいる内気な少女だ。

前述した変身願望をこれでもかという位に持つてゐる。それもまた珍しい事では無い。一つだけ違うのは、その変身願望を極端な形で叶える事になる、この一点に尽きる。

そう彼女は魔法少女となる。

町に魔物が出現した。そういうニュースで報じていた。

法子は朝ごはんそつちのけてそのよくあるニュースに聞き入つていた。

魔物は魔女つ娘を召乗る変身ヒーローに倒されて事なきを得たと  
いつ。

あまりにもテレビに集中しすぎて口に運ぼうとした「はんが箸か  
らこぼれて茶碗の中に落ちた。

「良いなあ」

一方、弟は目を輝かせて物欲しそうな顔でテレビに釘づけられて  
いる姉を見てうんざりと溜息を吐いた。

「そんなに魔法少女になりたい訳?」

聞くまでも無い。法子は常日頃から願っている。

「勿論なりたい」

「どうでも良いけどわあ。チャンネル変えない? 僕、野球の結果  
知りたいんだけど」

法子はそんな言葉を無視して画面の中で丈の短いドレスの様な衣  
装を着て皆の喝采に頭を下げている女の子から目を離せずにいた。

「私もなりたいなあ」

「止めてよマジで。ガキじゃないんだから」

「小学生のあなたに言われたくないんですけど」

「精神年齢の方。俺、来年から姉ちゃんと同じ中学校に行くんだか  
らさ、変な事して俺に恥かせないでよ」

「あなたはなりたくないの?」

「変身ヒーロー? もう卒業したよ」

「楽しそうじやん。姉弟で魔法少女とか絶対に入気出るよ」

「ちょっとやめろよ。何で俺が女の格好しなくちゃいけないんだよ  
テレビの画面には男性が着るには恥ずかしい衣装を着た少女が喝

采の中去っていくところ映つている。

法子はしばらくテレビと弟を交互に見てから真剣な表情で「はん  
を飲み込んだ。

「いける」

「絶対嫌だからな!」

憤慨する弟を余所に、法子は魔法少女を夢見たまま、学校へと向

かつた。

学校へ行くと、教室の一角で女子達が盛り上がりっていた。

法子はその様子に一瞥をくれてから、未練がましく耳だけは傍だたせて自分の席に坐つた。昨日から読み始めた小説を開いて文字に目を滑らせながら、聞こえてくる会話に集中する。

どうやら週末にサッカー部の練習試合があるという話らしい。何だそんな事かと、法子は聞き耳を打ち切つた。下らないなあと思う。もう少しましな話は出来ないのだろうかと思う。けれど少しだけ羨ましく思う。あんなに他愛の無い話で盛り上がりがれて良いなあと思う。

小説を読み、授業が始まり、授業を受けて、休み時間になつて、小説を呼んで、授業を受けて、それを繰り返して、お昼ご飯を一人で食べて、また小説と授業を繰り返して、そうして学校が終わる。部活も何も所属していないので家に帰る。

下校する時はなるべく沢山の人紛れて、一人で帰っている事に違和感を持たれない様にする。たまたま帰りの会が早く終わつたりして、人が少ない時には真っ先に帰つて誰にも見られない様にする。友達が居ないので、たつた一人で帰る帰り道。特にこれといった用事も無いので、毎日真っ直ぐ家に帰る。時たまそれが寂しくなる。でもすぐにこう思う。それでも私はいじめられていないと。他のクラスではいじめがあるらしい。世の中にはいじめの話で溢れている。法子は自分が一つ間違えれば容易にいじめの対象になる事を自覚していた。それでもいじめられていない自分は、いじめられている人々に比べてまともなんだと法子はそう思う。

そうして自分に自信を付けていたのに、今日読んだ小説の主人公が学校で友達と仲良くしている場面を思い出して、少し落ち込んだ。小説の主人公にはあんなに沢山の友達が居るのに、私の周りに友達が居ない。毎日毎日、家で本を読んで、漫画を読んで、テレビを見て、ゲームをして、学校に行けば早く終わつて欲しいと願つてじつと本を読んで授業を受けて、中学校に上がる際に何かと入り様だろ

うと買つてもらつた携帯は全く使う機会が無くて。そんな事をつらつらと考えて、最後にやつぱり自分は駄目人間なんだと結論付けた。嫌になつて思考を打ち切つて、顔を上げた。

道端に犬が輪を作つていた。何だか唸り声を上げている。良い雰囲気じやない。

犬同士の喧嘩か、あるいは他の生き物に群がつているのか。遠くで良く見えない。もしかしたら小さな子供が襲われているのかも。そう思うと急に寒気がした。見過ごして帰つた後に実は子供が襲われていたのだと分かつて、それで子供が死んだと分かつたら。そんな事を考えると怖かつた。

追い払わなくちゃ。そう思つて犬達を見て、どの犬も凶暴そうな顔をしている事に怖気づいて、結局法子は出来るだけ離れて遠巻きにして素通りする事に決めた。出来ればただの犬同士のけんかである事を祈りながら。

法子が目を閉じながら逃げ去ろうとしている時、犬が吠えた。法子は怯えて立ち止まる。ぎゅっと目を瞑つた暗闇の中で、犬達が自分に向かつてくる、そんな想像を抱いて怖くなつた。逃げたいが体が硬直して動かない。

その時、スカートを引っ張られた。引っ張られてよろめいて、襲われたと驚いて目を開けると、犬が走り去つていくところだつた。どうやらすれ違われただけらしい。犬達の居た場所を見ると、犬達は居なくなつていた。

そこに生き物が落ちていた。犬に隠れていた所為で見えなかつた生き物。きっと犬にいじめられたのだろう。蹲つて震えている。法子は一瞬戸惑つた。助けてあげたかったが、幾ら小さくとも野良の生き物だ。襲われて怪我でもして変な病気になつてしまふかもしない。

やつぱりこのまま通り過ぎよつかと歩き出して、しばらく歩いて、それからやつぱり見捨てる事が出来なくて駆け戻つた。  
蹲る生き物の傍で屈みこんで、その体に手を伸ばす。

ぐぐと地の底から響く様な低音がその生き物から発せられた。

「え？」

法子が思わず手を離すと、生き物はその小さな身を起こして法子を見上げた。

紫色の目をした犬の様な生き物。唸り声をあげ、歯を軋らせ、法子の事を睨みつけている。

魔物だ。

法子が慌てて立ち上がり身を引いた。魔物は人を襲う。そのほとんどは風の悪戯の様な些細な事しか出来ないけれど、偶に力を持つているのもいる。それこそ人を殺してしまえる様なのも現れると聞いていた。

魔物に出会つたらどうすれば良いのか。子供達は周囲の大人達に耳にタコが出来る程聞かされている。

逃げる。

逃げて大人の居る所へ行け。

法子は親から言われている通りに魔物から逃げる為に駆け出した。それが子供達に教えられる対処法。根本的な解決ではないけれど一定の効果を上げる教えたが、今はまるで役に立たなかつた。

魔物の足は法子よりも早く、疾風の様に法子へ襲いかかり、その身を倒した。地面に倒された法子ははいざりながら、後ろを振り向く。目の前に魔物の小さな体には酷く不似合いな、ゴムの様に伸びて大きくなつた口が迫つていた。

殺される。震えながら、しりもちをついたまま後ずさるが、当然逃げられない。魔物はまるでいたぶる様に少しづつその口を近付けてくる。

殺される。再度そう思った時に、力が湧いた。勢いよく立ちあがつて、魔物から少しでも離れる為に、駆け出そうとしてすぐさま魔物に飛び掛かられて、また倒れた。何とか逃げようとする法子の頭を足で押さえつけて、今度こそ魔物は牙を法子へと突き立てようとした。

法子は背面に違和感が走ったのを感じて死を覚悟した。更に背中に熱が行き渡る。噛まれたのだと思って、思わず振り返った。

そこには既に魔物が居なくなっていた。辺りを見回すと、離れた場所で魔物が横たわっていた。

法子は訳が分からずに呆然としていると、目の前にふわりと軽やかに着地する者があった。丈の短いドレスの様な真白い衣装を着て、頭に奇妙な髪飾りを付け、肩に見た事も無い生き物を乗せた女の子が法子に向かつて笑いかけてきた。

「怪我はない？」

法子が呆けていると、女の子は法子の体を見回して、

「ああ、ちょっと擦りむいてるね」

そう言って、手に持っていたステッキを振つた。たちまち法子は光に包まれて、一瞬後には傷全て消えていた。

「これで大丈夫」

女の子が魔物を見据えて、そうして親しげに笑う。

「君も怖かったんだよね。だからこんな事をしちゃったんだよね」

諭す様にそう言つてステッキを構えた。

「今帰してあげるから」

ステッキが振るわれると、魔物の足元に光の円が描かれた。もう一度ステッキを振ると円の周りから光の薦が伸びて、一瞬の内に複雑な模様を描き始め、それは中空へと伸びあがり、複雑な模様をそれは良く見れば異形の者達が行進する絵だつた。描きながら魔物を包みあげ、再び少女がステッキをふるうと、一瞬爆発的に輝いて、光が収まつた時には魔法円も魔物も消え去つていた。

「ふう、何とか出来た」

女の子が胸に手を当てて大きく息を吐いた。

「あなたは誰？」

瞬く間に魔物を消し去つた少女に、法子は思わずそう聞いていた。

「私？ 私は？」

一瞬言葉が途切れ、

「名乗る程のものじゃ『ごじや』いません！」

大きな声でそう言い切つて、少女は跳躍して民家の屋根の向こうに消えていった。

すぐに世界はしんと静まって一瞬前の事が嘘の様に辺りは平穏な日常に戻っている。空は暮れに向けて少しづつ熟れ始めていた。法子はしばらく消えた先をぼんやりと見てから呟いた。

「魔法少女に助けられちゃった」

法子はゆっくりと立ち上がり、危なつかしい足取りですぐそばの小さな公園に向かつた。そこは丁度生活圏の奥まった場所にあって、人の通らない道に囲まれた余程何か無いと誰も来ない公園である時偶然見つけてからお気に入りの場所になつていた。

今日もまた古びたブランコに腰かけて、ノートを開いた。心の中が興奮で荒れ狂っていた。魔物に襲われ命を失いそうだった事。初めて見た変身ヒーローなんと助けられた事。何だかファンタジーの世界が自分の身近に迫つた気がしていた。

ノートを開いてそこに拙いイラストを書き入れる。魔法少女を見たのは一瞬の事で姿はほとんど覚えていない。だからほとんど想像で補つて、先程の魔法少女を紙の上に起こしていく。

イラストを書き入れ、その横に思いついた設定を加えて、ほつと一心地付いた。こんなところは誰にも見せられない。ノートの中身なんてそれこそ親にも見せられない。でもこの誰も居ない世界で自分だけの世界を作るのがとても幸せだった。

頭の中に次々と妄想が湧いてくる。魔法少女。変身ヒーロー。喝采。人々の尊崇の眼差し。想像の中で自分が魔法少女になって先程の魔法少女と共に強大な敵を倒した時、風が吹いて砂が舞つた。舞つた砂が目に入つて、思わず目を閉じて瞬きをして、涙と共に流れ出したのを確認してから目を開くと、視線の先、公園の隅の生垣の下に何かが落ちている事に気が付いた。

刀 の様に見えた。

でもまさかと思って、近寄つてみると、それは紛う事無き日本刀

だつた。初めて見た刀は思つてはいたよりずっと大きかつた。

何でこんな所に刀が落ちているのか。疑問よりも先に期待と好奇心が湧いてきた。わくわくと心を浮き上がらせながら、法子はそれをじっくりと眺めて、辺りを見回して誰も居ない事を確認してから、そつとそれに触れてみた。

金属の冷たい感触が伝わつて來た。

「君が私の主か」

「ひえ」

頭の中に突然声が流れてきて、法子は思わずしりもちをついて、辺りを見回した。だが辺りには誰も居ない。普通の人であれば奇妙がり、声を発した人が何処かに居るのかと、辺りをもつとよく探すところだが、法子は違つた。今迄見てきたフィクションの知識からすぐさま声の正体は刀であると見当づけて、再び今度は勢いよく刀を掴んだ。

「どういつ経緯で私を手に入れたのか知らないが、まずは自己紹介から始めよう。君は私の名を知つてはいるかもしねないが、私は君の事をまるつきり知らないんだから」

再び頭の中に声が流れてくる。

「あなた刀なの？」

法子は試しにそう思い浮かべてみた。

「その通りだけれど、もしかして君は私の事を良く知らないのかな？」

「まるつきり」「

刀が笑つた　　そんな印象が法子の頭の中に流れ込んで來た。

「まるつきり知らないのに、そんなに慣れた様子で私と話しているのか。はは、時代は変わつたな。魔術が開陳されたとは聞いていたが、ここまで慣れ親しんでいるとは」

「多分、私が特殊なだけ。漫画とかであなたみたいな存在には慣れてるから」

「ほう。良く分からぬが、君は何か特殊な役職にでもついている

「どう事かな？」

「そういう訳じゃないんだけれど」

「そうなのか？とにかく説明の手間が省けるのは助かる。では早く速だ。誓いを交わそう」

先へ行こうとする刀に驚いて、法子は刀を強く握り、頭の中で必死に刀を押し止めた。

「待つて。私が知つてるのは、あなたみたいに無機物が頭の中に語りかけてくる可能性だけ。あなたがどんなものなののかは、さつき言つた通り何にも知らないよ」

「なら説明しなくてはならない訳か？」

「是非」

「そうか。私はどうにもこの最初の邂逅が苦手なんだが」

何やら愚痴りつつ、刀は面倒そうに聞いてきた。

「何から話せばいいかな？」

そう聞かれて、法子は考える。こういう時漫画とかだと過去の話とかが入つたりする。あるいは突然魔物に襲われて分からないま鬪つたりもする。

とりあえず辺りを見回してみて、不穏な気配も人の姿も見えない事を確認してから、法子は頭の中で言った。

「それじゃあ、あなたの目的とあなたが私に何を求めているのかとそれに對して私が何をすればいいのかを教えて」

一体どんな事を要求してくるんだろう。何か無茶な事を言われるかもしねれない。魂を差し出せと言わされたらどうだろう。でも今の底なし沼にゅっくりと沈んでいく様な生活よりも刀の無茶な要求に身を破滅させた方が幸せかもしれない。不安半分、期待半分、でもどちらも絶望的な想像を抱きながら刀の返答を待つが中々返つてこない。どうしたのだろうと訝しんでいると、刀が驚いた様子で賞賛をあげた。

「素晴らしいな。こういう時、大抵の人間は混乱して面倒な事になるんだが、君はとても冷静に事態を把握しようとしている

素直な賞賛に法子は何だか恥ずかしくなった。考えてみれば褒められたのは久しぶりだ。歯がゆかつた。それに多分同じ様なフィクションに傾倒している者なら誰だって同じ様な反応をするに違いない。刀の前の持ち主がどれ位前の人なのかは分からないが、その頃よりは格段に世の中の不思議に対する寛容さは増している。だから決して自分が特別な訳じゃない。そう心に言い聞かせつつもやつぱり嬉しい事には変わりなかつた。

法子はにやけながら、聞いた。

「そんな事より、私の質問に答えてよ」

「ああ、そうだったな」

刀の言葉が頭に流れてくる。

「目的は、何となくだな。君に求めているのは魔女になつて貰う事だ。君は魔女になつてくれればいい」

「魔女？」

「魔女だ。抵抗があるかね？まあ、そうだろう。迫害される身だ。だが本来魔女というのは人を救つ身であるという事だけは知つてほしい」

刀の言葉は法子の頭の中を素通りしていつた。法子はまさかとう期待で一杯になつっていた。まさか。まさか。だが早とちりはいけない。そう、まだ分からぬ。まだ魔法少女になれるとは限らない。ちなみに魔女という言葉には、現在三つの意味がある。一つが人を誑かし、陥れる悪役としての魔女、そこから派生して不気味さや妖艶さや超越性を持つた女性。もう一つが近世魔術の実践者として自ら名乗る魔女。だが、この二つの意味は実際に魔法が存在する様になつた現在では急速に衰退している。現在最も使われているのは三つ目の意味、魔術に依つて世界に多大な影響を与えた者に与えられる称号として魔女。未だ七名にしか授けられた事の無いその称号は、急速に発展を遂げる魔術界での一種のシンボルとなつて燐々と輝いている。

閑話休題。

「魔女って言うのは、魔女？」

「何を良いたのか分からないが、そうだ。強大な魔力を持つ女性くらいのイメージで良い」

「魔女になるって言うのは、もしかして悪魔と……そのHitchするの？」

「いや、そんな事はしない。どうも魔女はある暗黒時代に作られたイメージが強くていけない。魔女になるのはとても簡単さ。私を携えて、魔女になると願えばそれだけでなれる」

法子の心臓がはねた。これは。

「魔女になつて何をさせたいの？」

「それは君の勝手だけれど、そうだな、人助けでもしてくれれば言う事は無い」

まさか。

「魔女つて黒いローブを着た？」

「それは君のイメージに因る。もつと言えば、私の来歴と君の魔女に対する想像が混ざり合つた形になる」

「変身するつて言つた事？」

「まあ、そうだね。そんな劇的な変化はしないけど。精々髪型や服装が変わる位だな。絶世の美女にはなれないから期待はし過ぎないでくれ」

「何となく失礼な事を言われた氣もするけれど、法子にひとつはそんな事もうどうでも良かつた。

「やっぱりだ！ やっぱり変身ヒーロー、魔女つ娘、魔法少女になれるんだ！」

「変身ヒーローか言い得て妙だな」

法子の感情を読み取つて刀が答えた。確定だ。魔法少女になれる。

「その魔法少女というのは良く分からないな。今の時代は皆魔法が使えると聞いていたが」

「そういうんじゃないの。魔法少女は魔法少女なの。変身して人を助ける正義の味方なの！」

法子の興奮した思念に刀は当たられた様だった。しばらく黙り込んでから、ようやくと喋る声音は弱々しく辟易していた。

「まあ、良い。喜んでくれたのならね。どうだい？ その魔法少女とやうになる為にも、私と誓いを交わさないか？」

「交わす交わす！」

法子が大きく首を振ると、刀から笑う様な氣配が伝わって来た。  
「では誓つてもらおつ」

「誓います！」

「早いよ。良いかい？ 魔女とは迫害される存在だ。それでも君は魔女となり魔女として生きる事を誓えるかい？」

何だそんな事か。刀は今の世の中をあまり知らない様なので勘違ひしている。そう今の魔女は、魔法少女は皆から好かれ愛され望まれる人気者なのだ。全くもつて迷う必要が無い。

法子はそう考えてにんまりとして答えた。

「勿論誓います」

「そつか」

刀がぽんという炭酸を抜いた様な音を立てて法子の指先に乗る位に小さくなつた。

「私が大きいままだと何かと不便だつ。小さくなつたから常に肌身離さず持つて置く様に」

法子は刀を握りしめて口を尖らせる。

「それより、どうしたら変身できるの？ 早く変身したい」

「そう思念を伝えた時、

「なあ、そこで座り込んでる奴」

背後から声が掛かった。

慌てて振り向くと、そこに背の高い男子が居た。法子の見たところ、年頃は法子より少し上。整つた顔立ちで、少し冷笑的な表情を浮かべている。

刀が何か言つているみたいだが法子には聞こえない。

法子の目は釘付けになつていた。男子が手に持つノートから目を

離せなくなっていた。絶望的な表情を浮かべてじっとノートに視線を注ぐ。

「これ、あんたの？」

男子から差し出された鞄とノートを受け取つて、自分の体中から冷や汗が噴き出しているのを法子は感じた。

「もしかして中を見た？」

このノートの中には恥ずかしい設定やキャラや物語や絵や台詞や技名が詰めに詰め込まれている。それを置き忘れていたなんて。ちよつと気になつた物を見に行くだけだったから置いておいたのがあだになつた。それに入なんて来ないと思つていた。

まさか見ていないだろう。そうだ。きっと見つけてすぐに、近くに居た私を見つけて渡しに来てくれたに違ひない。  
そう願つて願つて願い続けた。

男子は問いには答えずに背を向けて公園の出口へと向かつて言った。

法子は安堵する。ああ、やっぱり見ていなかつたのだろうかと。それは次の瞬間に打ち碎かれた。

「ああ、一つ良いか？」

男子が振り返つた。

「技の名前とかキャラの名前とか、それから説明とかとにかく全体的に名前が長いし、意味もちばはぐなのが多いから、短く簡潔にした方が良いと思うわ」

そう言って笑つた。

法子は何も言えずに硬直して、再び男子が背を向けて公園の外へと出て行く様子を見送つた。男子が消えて、その足音も聞こえなくなつてから、しばらくして法子はいそいそとノートを鞄に入れると、

「こぎゃあ！」

夕闇の中に悲鳴を木靈させながら家へと猛ダッシュした。

## 魔法少女の相棒は苦労する

「そりゃから何を転がつていいんだ?」「ノート見られたからに決まってるでしょ!」

心中で怒鳴りながら法子はベッドの上を転がり続けた。その手には小さくなつた刀が握られている。幸いな事に刀に三半規管は無いので、田が回る事は無い。

「にぎやあ、ちくしょー」

「たかがノートを見られたくらいで、そんな車に轢かれたヒキガエルみたいな声を出さないでも」

「猫! ヒキガエルは嫌!」

まあ、猫でもヒキガエルでもどっちでも良いが。そんな事より君には多大な力が与えられたのだよ? 君の言でいくと、魔法少女だつたか? それに対する喜びや懲きはないのかな? ほら、変身できるぞ!」

「今は、魔法少女なんかよりもあのノート」

ノートを指差してから、また法子は転がり始めた。転がる事によつて思考は途絶し空白化し、まるで物事を忘れた様な気になつてくる。疲れてくると止まる。止まると途端に思考が回復して、また忘れたい記憶がよみがえつてくる。だからまた回る。それを繰り返している。

「なあ、一つ良いかな。そこまで恥ずかしがつているのを見ると、とてもノートの中が気になるんだが、どうだろう。私にも中を見せてくれないかな」

「嫌に決まってるでしょ! 大体田も無いのにビリヤツて見るつもり?」

「田も鼻も口も耳も皮膚も無いが、ちゃんと知覚は備わつていて。恥ずかしいなら、君が私に触れながら、見せてても良い部分だけを君が見てくれ。君に触れられている間、私は君が感じた事しか感じら

れないから、上手く隠しながら読み進めば君が見られたくない箇所を見てしまう事も無い」

「絶対嫌！ 一字一句どれもこれも見られたら嫌！」

「それならどうしようも無いだろ？」

「だから嫌だつて言つてるでしょ！」

法子は『ごろ』りし始めて、刀がまたこれが続くのかどうんざりしていると、突然法子の動きが止まつた。ぴたりと止まって、呼吸も止まる。刀は動かなくなつた法子を感じて、まさか恥ずかしさの所為か、転がり過ぎた所為で死んでしまつたのではないかと心配になつた。

「どうした？」

「今、私があなたに触れている間は私が感じる事を感じられるって言つたよね？」

生きていた事に刀は安堵する。いきなり主に死んでしまわれてはかなわない。

「ああ、言つたな」

「じゃあ、さつき私がトイレに入つた時も？」

「ああ、君の知覚は全て受け取つていた」

「にぎやあ！」

刀は投げ飛ばされて天井に当たり跳ね返つて床に着地した。フローリングにぶつかつて硬質な音が響いた。それを追つて法子はベッドから跳ね起きて、床に落ちた刀を拾い上げる。

「あ、あんた」

「何をするんだ一体。痛くはないが、良い気はしない」

「このエッチ！ 変態！ 馬鹿！ 死ね！」

矢継ぎ早に浴びせられた罵詈に刀は訳が分からずに混乱した。

「いきなり何を？ 酷く悪い意味に聞こえるが、もしかして最近はそれが謝罪の言葉になつたのか？」

「つるさい！ 馬鹿！ あんた、ホントに最低」

法子の怒りは收まらない。だが刀にはその怒りが何に端を発した

ものか分からぬ。

「ちょっと待つてくれ。どうしたんだ急に」「トイレ、覗いたでしょ？」

「は？」

「だからトイレ、私の体に乗り移つて覗いたでしょ！」

刀はますます意味が分からずにならぬ。

「待つてくれ。一つに私は体に乗り移るのではない。知覚が流れこんでくるといった表現が近い。二つに私は覗いたのではない。君の五感を借りて状況を感じていたのだ。恐らくではあるが、君は自分の体が私に乗つ取られてしまうのではないかと危惧したのだろう？」

なら大丈夫だ。主は君。従が私だ。だから

そこで刀の言葉が途切れた。正確には尚も思念を伝えようとしたのだが、投げ飛ばされて体を離れた事で法子へと思念が伝わらなくなつたのだ。床に落ちた刀を再び法子は拾い上げて問い合わせた。

「あんた、女？　男？」

「え？　いや、私は刀だし、子を為す必要も無いし、性別は無いが」「それでも精神的な性別があるでしょ？　どっち？」

目が据わっている。口調も出会つた当初と比べれば酷く乱雑になつてゐる。これは心して答えないと圧し折られるなど覚悟して、刀は慎重に言葉を選びながら答えた。

「私はさつきも言つた通り、性別は無いが」

ここで刀を持つ法子の指にぐつと力が込められた。

「ど、とにかく私は精神的な性別という概念が分からぬ。それは生物、いや人間の考へた概念であるう。だから、男か女かは君が決めてくれ

「私が？」

「そうだ。私には男と女を判断する基準が分からぬ。君は人間だから知つてゐるのだろう？　だから君が決めてくれ

沈黙が下りた。沈黙と言つても、外から見る限りさつきから一人は一言も発していないが、つまり思念のやり取りが一時的に途絶え

た訳である。

その時ドアの向こうから声が入つて來た。

「なあ、姉ちゃん、わたくから死ぬほどつるさいんだけど」

「ああ、ごめん」

「どうせまた何か落ち込んだんだろ？　いつも言つてゐるナビ氣にしそぎだつて」

「つるさい。あつち行つて」

法子がドアに向かつて冷ややかな声を浴びせると、ドアの向こうの氣配は何処かへと立ち去つていった。続いて隣の部屋のドアが音を立てた。

「で？」

弟が自室に戻つた事を確認してから、法子は刀に聞いた。

「で、とは？」

「だからあなたの性別に関する事を聞かせてもらわないと判断できないでしょ？」

思念は少し柔らかくなつてゐる。弟の横やりで一呼吸入つた事で幾分怒りが収まつたらしい。だが目は据わつたままだ、

「そつは言つても、先程も言つた様に、私に性別の事は分からぬ。性別に関する事と言つたつて何を話せばいいのか」

法子はしばらく考えてから言つた。

「じゃあ、あなたはどうやって生まれたの？」

「おお、私の素性か」

それはこんな事にならなければ、刀が話したい事であつた。ひいては何故法子が魔法少女となつたのかにも繋がつてゐる。

「では話させていただこう。だがそれにはまず私を作つた魔女の話から始めなければならない」

そうして刀は流れる様な思念を送り込んできた。

ある所に魔女が居た。場所をあまり詳しく言つてもしようがないのである所と言つておく。知りたい？　そうは言つても君はその地

名を知らないだろう。国だけでも？ 分かった。グレートブリテンに魔女が居た。グレートブリテンが分からぬ？ ちょっと世界地図持ってきて。日本は分かる？ よし、そこからずっと左に行つて、そこ、そこで上へ。そこだ。そこがグレートブリテン。違う。イギリスではなく、グレートブリテンだ。私もかつて魔女に向かつてグレートブリテンとはエガレスの事ですかと質問したが、近くの柳に向かつて思いつきり投げられた。

でだ、魔女とは別に他者からそう呼ばれていた訳ではなく、自分でそう名乗つっていた。魔女狩りが衰微していく時ではあつたが、まだ魔女への弾圧は根強かつた。それを承知の上で名乗つていたのだ。何らかの信念を持った名乗りであつたのだろうが、残念ながら私に教えてくれる事は無かつた。

魔女は人助けを生きがいとしていた。例えば日本に滞在中、畠仕事を手伝う際に人助けの為ならえんやこらと歌つていた事からもそれは十二分に推し量れる。他にも例えば魔女は良く「私は本当に人助けが好きなのです」と言つていた。この事からも 何を言う。本人がそう言つたのだからそうに決まつているだろう。

まあ、とにかくだ。かつて魔女は人助けをせんと日々グレートブリテンのとあるど田舎で一所懸命に尽くしていった訳だが、ある時近隣集落の態度が一変する。人々は魔女を白い眼で見る様になつた。教会が主導していた魔女狩りとは違うが、似た様な物だ。魔女に批判が集まつた。お前が魔物を呼び寄せているんだどうとね。確かに魔物は魔力が多ければ多い程生み出されやすくなる。だが今迄全くして来たのに、さつさと出て行けではあんまりだ。魔女は意地になつて梃子でも動かないと宣言した。

それが悲劇を生んだ。増大する魔物、それに抗して闘うも日々衰退していく集落。魔女がそろそろ出て行つた方が良いかしらと思い始めた時には何もかも手遅れになつていた。魔王が現れた。

魔王は分かるか？ 一応説明しておくと、魔物が生まれる事で場が汚染されていき、魔導師が生まれる。魔導師が生まれる事で場が

聖別されていき、魔王が顕現する。魔導師は魔物よりも強力で、魔王は魔導師よりも強力。魔王ともなれば弱くとも、当代一流の魔術師を片手間にひねりつぶす事が出来た。まあ、現代程魔術の発達していない時代の事だが、それでも強力な事は分かるだろう。

魔王に敵う等、ましてそれが田舎の村人達ともなれば敵としてすら認識されなかつただろう。辺りは一瞬の内に壊滅した。集落が殲滅されている時、魔女はその時夢まどろんで、集落の者から浴びていた過日の中を心地よく受けっていた。つまりは眠つて気付かなかつた訳だ。だから目を覚まして外に出て驚いた。夢から覚めたら喝采どころか、集落の者まできれいさっぱり無くなつていたのだ。遠くで巨大な魔物達が辺りを踏み締めているのですぐに何が起こつたのか分かつた。

だが罪悪感に悲しむ暇も無い。魔王を倒さんと教会から派遣された戦士達が既にやつて来ていた。勿論魔女などと公言している身だ。出来れば教会の連中には見つかりたくない。なので魔女はこつそりと抜け出して、國すらも抜け出して世界を巡る旅に出た。

目的はただ一つ。人々を助ける事。選んだ手段は変身。誰かが困つている人を救うんじゃない、困つている人が自分を救える世界が魔女の目標だ。

知つてゐるとは思つうが、変身というのは酷く難しい。存在の変質だからな。魔力を帶びていらない無生物にすら難しいのに、魔力を帶びてゐる生き物を変質させるなんてとても纖細で強力な魔術が必要だ。常人にはまず出来ない。

誰もが变身ヒーローになれる世界を作る為にはその強力な魔術を誰もが使える様にする必要がある。どうすれば良いか？

その強力な魔術を生み出して世界中の全ての人々に広めるというのは、理論上は可能だらうが出来る訳がない。社会が混乱する事は必ずし、何より魔術は個人の資質に多大な影響を受けるので、万人が使える魔術を作り出すという事が難しい。

その為に魔女は外部装置を造る事にした。それさえ持てば誰でも

変身できる様な、魔力の供給と魔術の実践を行つ外部装置を造りつとした。

後は話さなくとも分かるだろ?。試行錯誤の中で生み出された外部装置の一つが私だ。どうだ分かつてくれたかな?

「え? えつと、あ、うん。良く分からな、あ、いや、ちょっとは分かつたかな?」

法子が呼んでいた漫画を開じて慌てて答えた。

「つていうか、話が長いよ。もしも漫画だつたら、今の回想まるまる流し読みだよ?」

「ぐ、聞いておいて、何を無礼な。そもそも漫画というのは何だ。前にもそんな事を言つていた気がするが」

「あなたつていつの時代の人? いつまでの知識なら持つてるの?」

「生まれは寛政だな。知識は今の知識もいくらかあるが、はつきりした知識は太平洋戦争の途中までだ」

「思つたよりも最近だね。じゃあ、漫画つて言葉知つてるんじやないの?」

「知らん」

「何で? まあ、いいや。漫画つていうのは、これ」

そう言つて、読んでいた漫画を開いて見せた。

「絵と文章で作られた物語」

「成程。読み物の一種という訳だな。……ちょっと待て。じゃあ、せつきの私の話を聞いている間中これを見ていたのは、私の話を聞き流していたという事か?」

「あ、うん」

「おい!」

「だつて、長いし難しいんだもん」

刀が怒りの念を伝えてくるので、法子は矢継ぎ早に弁解した。

「それにせつきの話は魔女さんの話で、あなたの話じゃないでしょ? 私は刀の話が聞きたかったのに」

一応、最後まで聞いていたらしい。すると刀から理解の思念が送られてきた。

「成程な。一理ある。では、続いて私の話を」

「手短にね」

「幾らなんでも失礼だろ！」

みしりと刀から軋む音が鳴った。法子が持つ指に力を加えた為だ。

「覗いた事、まだ怒ってるんだけど」

「ぐう。わ、分かった。手短に話すから」

法子の手が緩む。

「今までの持ち主はみんな大事にしてくれたのに」

「一つ落ち込んでから、刀は気を取り直して朗々と過去を語り始めた。

魔女は日本に来て、剣士からこんな話を聞いた。

刀には魂が宿る。刀に己を乗り移らせて初めて剣を扱う事が出来る。

それを聞いて魔女は外部装置に刀を使う事を思いついた。魔女は幾多の試作の中で、外部装置に人格を宿らせる事で魔術を行わせる方法が最も簡単で強力だと実感していたからだ。

そうして私が作られた。魔女は製鉄から研磨まで全てを自分の手で行つて、私を作つて下さつた。その為、言つては何だが不恰好だ。だがそのお蔭で魔術的な素地は他の刀剣とは比べ物にならないと自信している。

さて魔女は私を作り、貴重な意見をくれた剣士に渡そうとした。だが剣士が理由あつて断つた為に、たまたま差し入れを持つてきました村の子供に渡される事になつた。

清次郎と言つてな。それは美しい少年であつた。

「あ、そこから先は良いです」

「な！」

「良し！ 決めた！」

法子が勢いよくベッドを転がって、そのままベッドの外へと跳ね出て立ち上がった。

「何をだい？」

「タマちゃんは女！」

「誰？」

「なに言つてんの。あなたの事だよ、タマちゃん！」

「いや、は？ もしかして私の名前とか抜かす気じやないだろ？ な？」

「あなたの名前だよ、タマちゃん！」

「やめろ、連呼するな」

「だつて忘れそうで。タマちゃん」

「私は今迄無銘で通して來たんだ。名前だつて要らん！」

「駄目！ 呼びにくいし、タマちゃんで決定」

刀は一步も引く氣が無い法子に憮然として、しばらく黙り込んだ。そうして考えに考えあぐねた末、とりあえずこれから主従の関係を築いていく相手なのだから多少の譲歩は必要だろうと一步位は譲つてやる事にした。

「分かつた。良いだろ？ 受けて入れてやる。だが何でタマちゃんなんだ？」

「可愛いでしょ？ 魔女さんが製鉄から作つたつて言つから、玉鋼のタマ」

「訳が分からない。嫌な予感がするんだが、ちゃんはまさか敬称のちゃんだとたまつ気じゃないだろ？ な？」

「その通りですよ？」

「嫌だあ！」

「何で可愛いのに

「嫌だ、嫌だ。私はこれでも」

ぐつと法子の指に力が入り、再び刀、改めタマはみじりと鳴った。「はい、すみません。タマちゃんで結構です

「そつこなくつちや」

法子が笑顔を浮かべた。タマはかつての持ち主たちの顔を思い出しながら、その幸せだった日々に思いを馳せて現実逃避し始めた。

「おーい、聞いてる？ ねえねえ

「すまない。少し呆けていた」

「だから、これで問題も解決したし、変身させてよ」「問題？」とタマは今迄の経緯に思いを巡らせた。そもそも何でこんな話になつたんだつたか。しばらく考えて思い出す。

「ああ、私の性別がどうとかという話か

「そうそう。それも女だつたし」

「そつなのか？ 何を基準にそう判断した？」

「うん、考えてみたらね、私覗かれた訳だし、それが男だつたら嫌でしょ？ 女でもやだけど。だからタマちゃんは女」

呆れすぎたタマの思考に霞がかかった。人間であれば脱力のしきで崩れ落ちていただろう。そんな理由なら、最初から昔話などする必要が無い。何もかも無駄だつたという事だ。

「ねえねえ、早く変身させてよ

甘える様な法子の思念にタマは苛々としながら答えた。

「駄目だ。私の魔術は君の生命エネルギーを使うんだ。使いすぎれば寿命が縮む。無駄な時には使わない様にしなければならない

「えー」

法子が不満げに呻いた。

「君は魔女になる事の意義が分かつているのか？」

「全く。そもそもさつきの話だと変身は魔女に限らないみたいだつたけど、魔女に変身するの？ その魔女さんになるの？」

「違う。それは、まあ、私の願望だな。私を作ってくれた魔女の様に人々を救う存在であつてほしいという願望だ」

「成程ね。大丈夫！ 私、悪用なんてしないから。明日から魔物をバンバン倒して人助けをするよ！」

タマは大げさな溜息を法子へ伝える。この少女は分かつていな

敵を打ち倒す事と人助けの違いすらも分かっていない。だがそういうものかも知れない。初代である清次郎も最初は敵を倒す事に執心していた。子供というのはそういうものなのかもしれない。ならばそれを良い方向へ進めるのが私の役目だ。そう自分を納得させて、とりあえず甘い考えを矯正してやる事にした。

「君は分かつていい。人々を救う為には強くなければならない。体も心もだ。それなのに、君の先程の醜態は何だ。たかだかノート位で」

「ぎにゃああ！」

法子がタマを頬り投げて、耳を塞いで唸りながら、またベッドの上を転がり始めた。隣からドアの開く音が聞こえて、法子の部屋にノックの音が響き、その向こうから

「ちょっと姉ちゃん、何時だと思つてるんだよ。好い加減にしろよ」弟の怒りを含んだ声が聞こえてくる。

「つるわー！」

法子はそれに一喝してまた耳を塞いで唸りながらベッドの上を転がる。ドアの向こうで弟がつるわーのはそつちだと言ひ返して隣の部屋へと戻つていった。

唸り声だけが聞こえる部屋で、いよいよベッドの上を転がる法子。それを見て、今更ながらつやべタマは氣が付いた。

今回の主はかなり厄介だ。

## 「主人様は一人ぼっち

魔法少女はその正体を隠す。魔術は隠秘を旨とするから とう訳ではなく、多くは恥ずかしいからだと、生活に支障をきたすからだとかの理由でその正体は隠されている。中には公言して憚らない者も居るが、その数は少ない。変身ヒーローのほとんどは正体不明である。

魔法少女は系譜を魔女に辿る為か、使い魔、あるいはそれに類するお供を連れている事が少くない。一般人が使い魔を連れる事が技術上可能になつたとはいえ、一般人で連れている者はほとんど居ない。未だに使い魔というのは、魔女の、あるいは魔法少女の連れるものだというイメージが強い。当然普段から使い魔を引き連れていれば正体はばれる。始めから常人に見えなければ良いが、そうでない使い魔も多い。その為、使い魔が居る事を隠す為に、ある者は使い魔を家に留め、ある者は使い魔をアクセサリーに変じさせ、ある者は人形の様な外観を活かして人形として押し通す。

使い魔は魔法少女に出会うまで長年封じられていた者も少なくない。その為、会話に飢えている者が多く、お喋りな事がある。その為、魔法少女が使い魔を大衆の居る場所へ連れて行く時には、喋つてはならないと厳命する事が多々ある。その約束が破られ一騒動起ころる事もある。とかく魔法少女という者は自己の正体を秘密にする為に細心の注意を払う事が多い。

「分かつた？」

「ああ、分かつたよ。学校では」

「うん、私に喋りかけてきてね」

紐を通され簡易なブレスレットになつたタマは、法子の髪を梳かす手の動きに合わせて揺れながら、疑惑の念を送つている。

「でもどうしてだい？ 普通正体を知られない為にも人前でのやり取りは禁じるものだろ？」「

「だつてタマちゃんと話すのに出したりしないでしょ？ ばれる訳無いもん」

「まあ、 そなだが、 何があるか分からないだろ？ 学校と言えば四六時中人と関わる場所だ。 うつかりという事もある」

「大丈夫だから安心して」

妙に断定的な法子の言葉をタマはどうしても信じられなかつたが、それでも、今迄会話を食えていたので、話をして良いというのは嬉しかつた。

法子が黒い髪を二つ縛りにする手の動きに合わせて、タマは揺れ動く。法子の目を通してセーラー服を眺めながら、先代の通つていた学校を思い出して、タマは何だかわくわくとした。

「無い！ 絶対に無い」

「ちょっと生々しいですね」

「えーそんな事無いって。 やっぱり古来から伝わる伝統的な」

「おはよー、 どうしたの？」

「あ、 摩子さん、 おはよーいります。 何だか嬉しそうですね」

「うん、 昨日ちょっとね」

「その猫みたいなのストラップと関係が？」

「んー、 まあね。 でも秘密」

「摩子、 そんな事より聞いてよ。 ここつき、 キスの事を接吻とか言うんだよ」

「だから、 キスなんていう外来語を使わないで、 もっと美しい日本語を」

「だから、 接吻は美しくないってんだろ」

「じゃあ、 口吸いで」

「止める」

「摩子はどう思つ？..」

「日本語でつて言つなら口づけで良いんじゃないの？」

「それだ！」

「ええ！ そんな単純で良いの？」

「いやあ、でも私はキスが良いと懸つ」

「そんな事無いって、絶対口づけ」

「どっちでも良いんじゃないかな？ 人それそれだと懸つよ。」

「違うんだよ、摩子。やつらの事じゃなくて、どれが一番男受けが

良いかつて話な訳だ」

「やつぱりキスが無難だと思つんだよね」

「だから男は大和撫子が良いの。だから日本語で話しひべ」

「そんな訳で一人はやつらからずつと喧嘩してくるのです。面倒なので早く結論付けてもらいたいのですが」

「うーん、しょうがないなあ。じゃあ ちゅうヒー、武ちゃん、

武ちゃん！」

「あ？ 何だよ。武ちゃんて呼ぶな

「良いじやん、幼馴染なんだし。でれ、ちゅうヒー野子の意見を聞きたいんだけど」

「何の？」

「キスと口づけ、どちらかどもかね？」

「ぶつ」

「ねえ、どっち？」

「お前、何をいきなり」

「どっちが良い？」

「……口づけ」

「だつてさ、みんな。あ、武ちゃん、もう行って良つけ

「は？ 意味が」

「報われないね。武ちゃん」

「可哀そうだね、武ちゃん」

「お前等は武ちゃんて言つくな！」

そんな騒がしい会話の近くの席で、法子は本を読んでいる。昨日は半分まで呼んだので、今日はその続きをだ。黙々と読書をする

法子にタマはおずおずと思念を掛けた。

「向こうで賑やかに話しているけど、君は会話に入らないのかい？」

「うん、だつてあの人達友達じゃないし」

法子の顔はほとんど表情が抜け落ちている。昨夜タマを押し折ろうとした顔よりも余程恐ろしい。朝の喧騒に包まれた教室は温かいのに、法子の周りだけは空気が違った様に冷え切っていて、何だか寂しかった。

「そりが……なら友達の所へ行つたらどうだね？ 本なんていつでも読める。今は交友を厚くすべきだろ？」

「私、友達居ないから」

「友達が居ない？ そんな事は無いだろ？」

学校と言えば同年代の子供達が沢山集まる場所だ。法子位の年齢であれば、学びの場としてだけでなく、仲間を見つける場所でもあるはず。少なくともタマが今迄見てきた学び舎は全てそうであったし、タマの主人やその周りで友達が居ないという者は居なかつた。

「普通居るものだ」

言つてからタマは氣付いた。あくまでそれは普通の場合で合つたの話だ。普通でなかつた場合にはその限りではない。長年魔女といつ概念に振れていながら何故そんな事も思いつかなかつたのか。友達が居ない。孤独である。それはとりもなおれず、法子が出生や身分等の理由で迫害を受けているという事だ。

「タマちゃん」

「な、なんだね、御主人」

タマが思わず改まつた口調の思念を送ると、法子は冷徹に言つた。

「私とあなたは繋がつてゐるんだからね」

「分かっているさ。安心してくれ、私は君を見捨」

「だからあなたが伝えようとしなくとも、はつきりとした言葉としてじゃなくても、なんとなくあなたの考えは伝わって来るんだからね」

「ん？ ああ、そうだよ。今更言われなくても

「ね」

「あのね、多分あなた、私が何か特殊な生まれで、その所為で無視されていると思っているでしょ？ そう同情しているでしょ？」

「う……ああ、そうだ。確かに同情されるのは心外だろうが」

「全然見当外れだから」

「何？」

「あのね、私はふつつの生まれで、別に何にもおかしい所は無くて、周りの人達もわざと私の事を無視してるんじゃないから」

「どういう事だ？ なら何故君は周りと話そうとしない」

タマは本気で困惑していた。そんな事在り得るはずが無いと信じ込んでいる。人はすべからく他者と交流をするべきだと信仰している。話をするものだと信じ切っている。法子はちくしおうと思った。怒りや悲しみを始め、恥ずかしさや笑い等様々な感情が湧いたが、突き詰めればそれはただ一つの言葉、ちくしおうに収斂された。

「私が話せないから」

「何故？」

「何故も何も私が人と話すのが苦手だから」

その言葉は益々タマを困惑させる。

「私とはこうして話しているじゃないか。思念のやり取りだが」

「そうだね。自分で何でこんなに普通に話せているのか良く分からぬ。あなたが人じゃないからなのかもね」

「しかし、話すのが苦手とは、分からない。見た所、礼儀は欠けていい。礼を失さなければ人と話すなど特段技術が要るものでもないだろう」

そんな言葉を言われたら、法子は自嘲するしかなかつた。そんな普通の事さえ出来ないのが自分なのだと。

「何話していいのか分からない。話しても嫌われそうで怖い。上手く話せるかどうか分からない。だから話せないの！」

段々と法子の思念が荒くなつてくる。

「そつは言つてもだな、友達との会話なんて話す内容はそれこそ話す内に作つていく物だろう。嫌われるなんてよつぽどの事だ。話の

得手不得手なんて人それぞれ、別に下手だからって恐れる事は無い。気にする人なんて居ないよ。案ずるより産むが易しだよ。話してみれば良いのさ」

「無理だよ！ だつてもうみんなグループ作つて固まつてるもん。今更私が話しかけたつて何こいつつてなるに決まつてるし」

「そんな事は無いだろう」

「なる！ 絶対なる！ タマちゃんは学校を知らないからそんな事が言えるんだよ！」

「確かに今の学校は知らないかもしねないが」

法子の息が荒くなる。それを近くで談笑している内の一人が気にして、法子へ視線を送つて来た。それに気が付いて、法子は俯く。見られた。一人でぜえぜえ息を荒くしている所を見られた。気持ち悪い奴だと思われた。法子は途端に恥ずかしくなつて、興奮していた自分を戒めて、思念を沈ませる。

「それにさ、私、話が下手なだけじゃなくて、得意な事も無いし、皆が知つてる事も知らないし、流行なんて特に分からないし、むしろそういうのつまらないって感じるし、人と一緒に居るのが嫌だし、気持ち悪くなるし、むしろ私が気持ち悪いし、変な匂いがするし、肌も汚いし、油っぽい氣がするし、体も曲がってるし、顔も体も貧相だし、運動とか出来ないし、卑屈だし、すぐ落ち込むし、心が汚くて人の悪い所ばかり見ちゃうし、本当に良いところないし」

どんどんと法子の自虐が重なつっていく。その自虐の大部分が法子の頭の中で形作られ発酵した妄想に過ぎなかつた。だが法子はそれを本気で信じている。タマはそんな自虐が出る度に、そんな事無いさと否定していくのだが、法子は聞いていいかのように自虐を続け、タマは聞いていて気が滅入つってきたので、それを止めた。

「分かつた。分かつたから止まってくれ」

「あ、ごめん。本当にさ、私話してもこんななんだし、いつもこんな事考えてるし」

「分かつた。君が自分をどう思つているのかは十分に分かつた」

「本当に『めんね。嫌だよね、こんなのと四六時中に一緒にや。そもそも何で私が選ばれたの?』

法子の質問にタマは答えあぐねた。法子はどんどんと沈み込んでいた。恐らく学校でいつも感じている苦しみがタマと会話した事で爆発したのだろう。それを止める為に、何とか法子が駄目ではないと伝えたいのだが、今の質問の答えでは励ます事が出来ない。とはいえ嘘を吐いたところで思念が繋がっている以上ばれてしまうので論外だ。仕方なしに、タマは正直に答えた。

「理由は無いよ。君が僕を見つけた。運命が噛み合ったからだ」

「多分私よりももっとふさわしい人、居るよ。だから」

法子が続けようとした思念の上に、タマが思念を覆い被せる。

「私は君が気に入った。私は君を魔法少女にする。だから君から離れるつもりは無い」

「え、な……べ、別に勝手にすれば。でもきっと直ぐ嫌になるよ」

法子の思念は言葉上、未だに頑なな自己卑下であったが、ほんのりと嬉しそうな思念も伝わって来た。よしよしとタマも嬉しくなる。とりあえず沈み込むのは止まつたし、これで良しとしよう。これ以上、言葉を重ねると逆に心を開ざしてしまう可能性もある。でもその前にどうしても言つておきたい事があった。

「君は自分の事を駄目だ駄目だと言つていたがな、私からすれば決してそんな事は無い。この世の何処にもいない完全な人間でも田指しているのかい？ 君は可愛いし、優しい。変な匂いだつてしまいし、体も曲がっていないし、肌も荒れていないし、油っぽくも無い。君は何処からどう見ても可憐な女の子だ」

「嘘ばかり」

言葉ではそう言つているが、やはり喜びの感情が流れてくる。タマはとりあえず言いたい事は言つたので思念を伝える事を止めた。法子から混乱した思念が流れ込んでくる。多分、褒め言葉をどう受け取つて良いものか迷つてているのだろう。やがて法子がおずおずと思念を伝えてきた。

「ありがと」

「いや、事実を伝えたまでだ」

「タマちゃんが男の子だったら良いのに」

「性別は君が下らない理由で決めたんだ。今からでも男に換えたらどうかね？」

「ううん、無理。もう私の中でタマちゃんは完全に女の子だから」「ううかい。まあいいけど」

「タマちゃんが沢山居たらな。百本位居たら賑やかで楽しいのにならやめてくれよ。自分が沢山居るなんて悪夢だろ」

タマがぼやいていると、教師が入って来た。皆が一斉に自分の席へと戻り始める。やはりいつの時代も学び舎は統率がとれているなあとタマは感心した。一方、法子は初めて楽しい朝の時間を過ごせたので満足していた。

その日は法子にとつていつになく早く時間が過ぎた。いつもであれば休み時間の間は早く時間が過ぎると祈り続けていたが、今日は違った。タマとの他愛の無い会話が楽しかった。いつもなら授業の時間が終わらない様に祈っていたが、今日は違った。早くタマと話したくて　授業中に話しかけるとちゃんと勉強しようと取り合ってくれないから　授業が終わるのを待ち遠しく思った。会話の話題は主に本の内容で、それはタマが気を使って法子の生活の話題を意図的に避けた為であった。法子もその気遣いは気になつたが、それ以上に初めて自分の趣味に耳を傾けてくれる友人を持った為に、家族に話すよりも饒舌に語つた。今日とてはあつといつ間に過ぎた。

帰り道、法子は相も変わらず本の内容を語っていたが、それをタマが遮つた。

「ちょっとといいかな」

というのも、流石に今の状況を続ける訳にはいかないとタマは思つたからだ。段々でも良いから、少しずつ法子と周囲を関わらせていきたい。やはり友達が一人も居ないと叫うのは至んでいる。

タマの見た所、今の法子は外から拒絶されているというよりは、外を拒絶している。それは外への恐れと外への無関心の一いつに起因している。だから少しずつでも外に目を向けさせて、興味を持つてもらえば治つていくはずだ。昨夜の話し合いで、法子が魔法少女の目標として人助けをする事に同意してくれたのだから、いざれ外への興味は増していくだろう。ただそれだと人助けの使命感が伴つてしまふ。出来れば、普段の生活から外への興味を引き出していきたかった。

だからタマは今日、別の学生の話を聞き耳して得た情報を開示してみた。

「最近、この近くに大きな店の集まりが出来たそうだよ。アトランと言ったかな？ 何でもそこに国内最大の魔術専門店があるそうだ。出来れば後学の為に行つてみたいのだが」

何でもそこには人が沢山集まるらしいし、学校が終わつた後は学生が多いそうだ。まずは人に慣れる所から始めた方が良いだろう。そんな意図での提案だった。店に行くぐらいならきっと。そんな思いがあった。だが、

「嫌」

「何？ どうしてだい？」

「目的が透けて見える。その気持ちは嬉しいけどね。でも嫌。人ごみは苦手だし」

「そうか」

思念から迷いが読み取れた。脈無しという訳ではなさそうだ。ならばここで無理を言って拒否感を持たせてはいけない。そう思つてタマはあっさりと退いた。

「なら一先ず帰つて魔法少女の訓練とするか

「え？ ホントに！ 変身できる

「ああ、勿論だ」

「うん！ じゃあ、早く帰ろう！」

法子が元気に走り出した。そんな姿を感じてタマは現金な主だな

と苦笑する。

「それじゃあ、家まで駆け足だ。魔法少女は体力が無ければならない」

「う、もう無理。吐きそう」

少し走って法子は立ち止まり、息も絶え絶えにそう言つた。ほとんど進んでいなかつた。苦しそうな姿を感じてタマは、今回の主は本当に難儀しそうだなと嘆息した。

## 変身！ 魔法少女！

「それじゃあ、変身をしてもらおう」

「はい！」

鞄を投げ出してベッドの上に勢いよく座り込んだ法子はタマを田の前に捧げ持つて嬉しそうに笑った。

「それで、どうすれば良いの？」

「簡単に言えば、変身したいと願うだけだ。それが基本で奥儀でもある」

「でも、前に学校で習つたけど、頭の中だけで魔術をするのってとっても難しいんでしょう？」

「その通り。出来れば一流じこりか稀代の魔術師だ。でも安心して欲しい。私が補助するからそこまで難しい事は無いはずだ」

「うんうん、じゃあ早速」

法子が勢いよく立ち上がり、気合を入れた。だがそれをタマは押し止める。

「焦らない焦らない。良いかい。それは言つても、君にはまだ出来そうにない。今日学校で拝聴した授業のレベルを考えるとね。君が学校で習つ事よりも遙かに先を学んでいるのなら別だけど」

法子が口を尖らせる。

「じゃあ、どうすれば良いの？」

「普通の魔術の様に精神統一の為の補助行為を重ねれば良い。魔法円や詠唱、踊り等々、道具を使っても良いし、とにかく変身しやすい状況を作るんだ」

「例えば掛け声とか？」

「ああ、そういうのだ。そんなに難しくしなくて良いし、難しく考える必要も無い。君が変身できそうって思える様な事を何か」

「分かった」

法子は立ち上がって放り投げた鞄を拾い上げて中からノートを取

り出した。見知らぬ男子に見られて悶えたあのノートだ。

「えーっとね」

ページをめくらながらその中を改め吟味していく。

「ふむふむ、これが件のノートの中身か」

「ああ！ ちょっと」

「ふむ、別段おかしくは無いと思うが」

「そ、そう？」

法子が恐る恐る疑わしげに尋ねてくる。タマはそれが不思議でおかしかつた。

「当たり前じゃないか。うん、やっぱり出合には正しかつた」

「何が？」

「君は英雄になりたかったんだろう？ そのノートに書かれた武器や人物を見れば分かる」

「う、うん、まあ、そんな感じ」

「だろう？ 力とはすなわち願望也。君がそれだけ英雄になりたいと思つてくれたなら、それだけ才能があるという事さ」

「そうなの……かな？」

「そうさ！ うん、先行きは明るいぞ」

タマが明るく言うので法子も釣られて笑つた。

「それで変身はどうする？」

「え、えっとね、じゃあ、この、

闇は沈み、光は昇り、世界を落とし、私は浮かぶ。大逆の徒は浅はかに流れを鎖し、私は剣を持って循環を創る。肉体を聖別し、心を開錠し、敵を殲滅し、勝利を獲得する。私は神域の生成者。今一度の覚悟を得て、私は害意を滅す太刀となる。

で、どう？」

「で、どうって言つのは、もしかしてこれを」

「うん、変身の呪文に。和風ティーストで刀の入ったの選んでみたんだけど、どう」

承服しかねた。まず呪文が何かに裏打ちされた技術的なものでは

なく本当に霧囲気だけの何の効果も持たないものであつたし、あくまで霧囲気作りの為と田を瞑つても、その呪文は幾らなんでも、

「ちよつと長いんじゃないかな」

「そうかな?」「

「ああ、咄嗟に変身する機会もあるだろしね。出来れば一一動作、長くとも四五動作で終えてくれないと対応が出来ない」

「成程」

「とはいっても、あんまり簡単すぎると暴発する可能性もある。やの意味で、先程の君の呪文は日常生活で絶対に口に出さないから危かつたけれど」

「んー……もしかして馬鹿にしてる?..」

「いや、そんな事は」

法子は怒った様子で田を瞑り、布団に勢いよく腰を下ろした。

「私はあなたと契約する」

「確かに契約と言えなくも無いね。そんな堅苦しい物には考えて欲しくないけど」

「そうじゃなくて、呪文。私はあなたと契約する!..」

「え?」

「悪い?」

「いや、悪くは無いけれど」

渋るタマに苛立つて法子は勢いよくドアを開じた。

「とにかく、変身させて!..」

「本当に後悔しないかい?..」

「しない!..」

タマはしばし悩み、

「まあ良いか。いつでも変えられるんだし」

吹っ切った。

「分かった。じゃあ、立ち上がる」

言われた通り法子は立ち上がる。

「深呼吸をしてみて」

法子が何度も息を吸つて吐く。

「それじゃあ、呪文を唱えて」

「えーっと、私は」

途端に法子は何か不思議な体の中が渦を巻く様な感覚に襲われた。悲鳴を上げようとする法子をタマは叱責する。

「声を上げない！ 集中！ 続きを！」

「あなたと」

その後と共に法子は自分の体が溶け崩れた様な錯覚に陥った。自分の肌がどろどろに溶けていく。そんな気がした。でも後には引けない。

「契約する」

その瞬間、法子の髪が解かれ、色が根元から次第に金色へと変わつていった。制服の色が黒く変じて、その形も少しずつ変わっていく。法子の手に握られていたタマは元の刀へと戻る。黒い衣装の上に黒いローブを羽織つて、法子は魔法少女になった。

「はい、終了」

「え？ 終わり？」

「ああ、無事に変身できたよ」

「ホントに何だか実感がわかないけど」

そう言いながら、法子は自分の体を見回して息を呑んだ。

「服が変わってる」

「服だけじゃないよ。鏡を覗いて見な」

言われるままに鏡を覗くと、二つ縛りの黒髪だった自分が金色のストレートな自分に変わっていた。

「おわー！」

奇妙な叫びを上げて後ずさり、また足を踏み出して今度はしげしげと自分の姿を眺めはじめた。

「本当に変身してる」

「そりゃ あね」

「でも、顔とか体は変わっていないんだね」

その言の通り、鏡に映った法子は服や髪の色は変わっているものの、その幼い顔立ちと体つきは全く変わっていなかつた。

「だから絶世の美女になる訳じやないと言つただろう」

「そりだけど……でも他の人に見られて私が魔法少女って知られるのが恥ずかしいんだけど」

「安心しなよ。正体はばれない様になつているから」

「そりなんだ」

法子は変身した自分をしばらく眺めて、顔を赤らめた。

「どう? 変身した感想は」

「うん、実際に着てみるとこうこう衣装つて恥ずかしいね」

「この期に及んでそんな感想?」

「だつて」

恥ずかしそうに体を小さくする法子に、タマは呆れた溜息を送る。

「まあ、良いけどさ。じゃあ、行こうか

その言葉に法子が慌ててタマを見た。

「何処に?」

「何処について魔物の気配を察知したからそこだ。君は変身したら魔物を倒して人々を救うと言つただろ?」

「そ、そりだけど

「今更怖氣づいたのかい?」

「そうじゃなくて、恥ずかしいんだよ! ほら今田はもう変身できただし、魔物退治は明日からって事で」

「アホか! わっわと行く!」

「えー」

「文句言わない!」

タマに促されて法子は渋々と部屋から出よつとして、廊下から弟の足音の如き音が聞こえたので、回れ右をして窓を開けて、夜の闇に躍り出た。

魔法少女となつた法子が民家の屋根屋根を踏み締めながら飛び越

えていく。月明かりに照らされて仄かに見えるその表情はいつなく明るい。

「すつごいなあ。ノリで飛び出したのに、本当にこんな事出来るなんて」

「そりゃあ、身体強化されているからね。でもされていなくて生身だったら君、部屋の窓から落っこちていたよ?」

「うん、飛びだしてから気付いた」

法子はけだけたと笑って、屋根を飛び次いで行く。風切りの音がびょうびょうと耳に木霊する。夜の冷たい空気が気持ちいい。視野は何処までも遠くを見渡せた。何百メートルも先に猫みたいな生き物を肩に乗せた女の子の後姿が見える。

「それで、何処に行くの?」

「体の赴くままに進めば大丈夫」

「了解です! それで何が居るの?」

「魔物だよ。伝わる魔力からすると大した事無い。練習にぴったりのはずだ」

「楽しみー!」

一際大きく跳ぶと、そんな気はまるで無いのに、そのまま法子は公園へ着地した。タマと出会ったあの公園だ。法子はどうやらここに魔物が居る様だと当たりを付けて、辺りを見回した。

少し離れたブランコの上に、綿毛の様なものが居た。猫の様な目がついている。可愛いんだか、気持ち悪いのだから分からない。途端に頭の中に情報が流れ込んで来た。

『ミスト

実体を持たない霧状の魔物。一時間周期にその外見を変える。出来る悪事は目の前に現れて人を驚かせる事。

魔力：微弱

生命力：E

可愛らしさ：特殊

突如として浮かんだデータに法子は驚いた。

「な、何これ！」

「ふむ、どうやら君の能力の一つは解析らしいね」

「能力？」

「そう。私の力で変身するとその者に合わせて幾つか特殊な能力が付与されるんだ。多分、変身とは別に元々の才能を引き出しているんだと思うけれど、正確な所は私にも分からない。それで君の能力の一つかが解析な訳だ」

「へえ。何だかカッコ良い」

法子はうつとりと虚空を見つめた。

「他の能力は？」

「それは発言してみないと分からない」

「早く知りたいなあ」

「まあ、とにかく相手が弱い事は分かつただろう？ 練習にもってこいだ」

「オッケー。それでどうすれば良いの？」

法子は刀を構えた。何だか舞い上がっているのが自分でも分かる。はしゃぎたくてたまらない。

「基本は私を使って相手を斬れば良い。刀の使い方は分かるかい？」

「持つた事も無い」

「大丈夫。触れれば斬れる。私を舐めないで貰いたい」

「おお！ 心強いよ、タマちゃん！」

嬉しそうに叫んだ法子は、刀を握る手に力を込めて、駆けた。一步で距離を合わせ、一歩でミストの目前に迫り、右手を柄に添えて、ふわふわと浮いているミストに向けて見よう見まねで抜刀した。刃先はミストへ吸い込まれ、その身を切り裂く。

斬った。確信を持った法子は笑みを浮かべて、ミストの居た場所を見つめ、

「え？」

そこで相も変わらず何て事も無い様子で浮いてくるミストを見て呆然と呟いた。

そんなはずは無い。そう思つて、法子は刀を振り上げ、ミストへと振り下ろす。刃は過たずミストを通り、確かに斬つたと確信するが、刃の通り抜けた後には変わりのないミストが浮いていた。

「何で？」

「いや、何でつて霧状だからだろ」

言われてみればその通りで、霧を斬れるはずが無い。

「でもさつき触れれば斬れるって」

「斬れるよ。ただ魔力を込めなくちゃ」

「魔力を込める？」

「そう。刃先まで力を行き回らせないと、魔力で出来た物は斬れないよ

「そう言われても」

魔力を込める方法何て分からない。

「もしかして出来ない？」

「……だつて習つた事無いし」

「ま、まあ、大丈夫だよ。教えるから。難しい事じやない」

タマは励ます様にそう伝えてきた。

「まずは目を瞑ろう」

言われた通りに法子は目を瞑つた。

「次に自分の手の先に私が居る事を感じて」

柄をぎゅっと握る。

「君の延長に私が居る」

私の延長。

法子は自分の体の中にまた渦の様な感覚が立ち込めて来るのに気が付いた。

「それが君の魔力。それを私のところまで届かせて

渦の先は意のままに動いた。腕を通り、手の先、刀へと流れ込んでいく。

「よし、目を開けて。それを維持

目を開けると刀は鈍く光っていた。

「そのまま刀を魔物に！」

法子は刀を正眼に構えて、振り上げ、勢いよく振り下ろした。

「あ、駄目だ」

タマの声が響いたが、気にせず刀をミストへと振り下ろす。だがやはりミストは斬れなかつた。刀の光は消えていた。

「むー。斬れない」

「力を込めた時に気を散らしたね」

「難しいんだけど」

「練習あるのみ」

その時、風切り音が鳴つた。続いて土を噛む音がする。地面に映るミストの影に一本の矢が突き立つていた。何事かと思う間もなく、風切り音は数を重ね、ミストの影の周りに新たな矢が四本突き立つた。矢は甲高い音を発して光り輝き、ミストの影は光りの中に消え、光が収まつた後も、影は消えたままだつた。慌ててミストの居た場所を見ると、ミストは消えていた。

「帰したか。法子、後ろ！ 上！」

「分かつてる」

ひしひしと背中に圧を感じていた。振り返ると、遙か頭上、公園の隣にあるマンションの屋上に黒い人影があつた。ひたすら黒い。黒い鎧に黒いマント、口元だけが晒されて真一文字に引き結ばれていた。

「あれは

「同業者、かな？」

黒い影は背を向けて飛び退り、マンションの向こうに消えた。

残された法子は街灯の薄暗い光に照らされた公園の真ん中で呆然と立ち尽くし、やがてぽつりと漏らした。

「何だか助けられたみたい」

「向こうはそのつもりだったんじゃないかな。苦戦しているみたいだから助けてくれたのかもね」

苦戦なんていなかつた。次の一太刀で倒せたはずだ。

失敗した。折角魔法少女になつたのに。早速失敗してしまつた。  
その上、赤の他人に助けられた。これじゃあ、いつもの自分と変わ  
らない。

法子は悔しくなつて大きく叫んだ。

「何なのよ！ もー！」

呼応して辺りの犬達も雄たけびを上げた。

## 謎の転校生、来襲

民家の屋根に飛び移る。金色の髪を丹明かりに晒し、闇に夜色のローブをはためかせながら。その顔は行きの明るい笑顔とはまるで違った沈んだものだつた。

「まあ、そう落ち込むな。まだ始まつたばかりじゃないか。これからだよ、これから」

「うん」

法子は黙り込んで屋根から屋根へと飛び移っていく。タマもそれ以上何も言わなかつた。繋がる今、法子がその胸に様々な感情を抱いて折り合いを付けようとしているのが分かつたから。自分から立ち上がるのとするのなら、タマが何かを言う必要は無い。

やがて法子は沈んだ調子ながらも力の籠つた意識でこう言つた。

「ねえ、私はどうすれば強くなれるの？」

強さ。法子は今日ミストに勝てなかつた事を、他の誰かに獲物をとられた事を、無力さゆえだと考えている。更にひいて日常生活の孤独にもその無力さは伴つて、自分がもつとしつかりと/orしていればと考えている。

それは確かに力があれば解決するかもしれない。勝てない事も取られた事も馴染めない事も力があれば確かに何とか出来るだろう。けれどそれは一つの方法でしか無くて、力が無ければいけない訳じゃない。問題を解決する方法は様々で何も力には限らない。タマに言わせれば法子に必要な者は意志だ。

強い意志。例えば何かに敗れた時にその者に追い縋り、今すぐにでも強くなりたいと願う事。勿論、タマは法子にさつきの場面で黒衣の騎士を追いかけ欲しかつた訳ではないけれど。

何にせよ、法子が悔しさを感じているらしい事はタマにとって良い兆候だ。法子の日常に対する接し方を見ると、悔しさを感じても押し殺してしまってそうな気がしたけれど、悔しいと感じてそれを打

破したいと思う、そんな気持ちがあるのならそれは良い事だ。出来れば打破をする手段を人に聞く前に自分で探すまでになつて欲しいが、それはおいおいで良いだろ？

「そうだな。とにかく鍛える事だな」

「具体的には？ 魔術の授業をちゃんと受けるとか？」

「魔術もそうだが、体もだ。明日からは毎日走り込みだな」

「そつか。ちゃんと私自身が強くならないといけないんだ」

「当たり前だよ。私の変身は持っている力を引き出すものだからね」

「分かつた」

丁度家に着いた。器用に窓枠へ着地した法子は、そっと窓を開いて自室へと戻る。部屋の中に入った法子は一度鏡を見てその中の普段の自分とはかけ離れた自分を見て、タマに尋ねた。

「ねえ、元に戻るにはどうすれば良いの？」

「戻りたいと思えば良い。また呪文を設定しても良いけど、変身する事に比べれば大分簡単だから、戻りたって思うだけでも戻れるんじゃないかな？」

法子が戻りたいと思うと、ローブは消え、服は制服に戻り、髪は黒く戻つて一つ縛りになった。タマも掌に乗る大きさに戻る。

突然、法子の体が沈む。急激に身体に疲労が来て、体が思う様に動かせずに倒れ込んだ。

「何これ」

「そりやあ、私の変身は君の魔力を使うからね。要は生命エネルギーの消耗だ。変身してるだけでも疲れるし、力を使えばもっと疲れ。特に今回は初めてだつたし」

「あれ？ でも授業で自分に宿る魔力は使いすぎると危ないから使っちゃいけないって」

「まあ、使いすぎれば死ぬからね」

「な！」

法子が驚きに身をすくませた。逃げようとするが体は動かない。

倒れたままで怯えながら手の中のタマを見つめた

タマが笑う。

「安心しなよ。普通は使つたつて寝れば戻るから。それに命に関わる程の魔力は使おうとしても私が使わせないよ。そもそも寿命が縮む位使つたらこの星を滅ぼせるよ。そんなに使わないだろ?」「心臓が凍り付いた法子はしばらく頭の中を空白に呑まれていた。

やがて気を取り戻した法子は、とりあえず自分の取り越し苦労だつた事を知り、その上でタマが幾分からかってきた事とそれに引っかかった事が悔しくて、一発タマにデコピンをしてから、何とか体を起き上がらせた。

「訓練を……」

「止めときなよ。今日はもう無理だ。訓練は明日から

「そう? でも……」

「無理したつて良い事無いよ。ゆっくり寝る事も訓練の一つ。それにもう今日は十分に鍛えられたよ

「本当?」

「本当。だから寝な。さあ、ベッドはすぐそこだ」

「うん、分かった」

法子は箪笥を開けて、タオルとパジャマを取り出して、部屋のドアへと近付いた。

「ちょっと、何処へ行くんだい? まさか外へ? 本氣でこれ以上自分を鍛えるなんて」

法子は左手で制服の首元を引っ張つて、自分の鎖骨を反対の掌に乗つたタマに見せつける様にした。

「この汗まみれの体でお風呂にも入らずに寝る位なら、死んだ方がマシ」

その意味を計りかねてタマが考え込んでいる間に、法子は部屋を出て風呂場へと向かった。

翌朝、地響きの様な唸り声が部屋に満ちた。布団がゆっくりと動く。枕に掛かっていた黒い髪の毛がゆっくりと掛布団の中に引きこ

まれていぐ。そうしてしばらくもぞりもぞりと布団が波打つて、布団の横から腕が現れ、頭が現れ、体が現れて、そのままベッドの端から落つこむた。床にへばり付いた法子が唸るよつて叫つた。

「体が重い」

法子は這つたまま枕元のタマを掴み揚げる。

「軽い筋肉痛だよ」

「全然軽くない」

頭の中にくすくすとこう笑いが響いてくる。それに苛立つて法子は思いつき立ち上がつた。

「だつしゃー！」

気合一閃。だが閃いた気合はすぐに立ち消え、法子はベッドの上に倒れ込んだ。

「無理。今日学校休む」

「ほら、さつさと用意する

無慈悲なタマの言葉を法子は渋い顔で受け止めて、もどもどと動き始めた。

「ねえ、転校生来るつて！」

「マジで？ いつ？」

「今日… やつを困るの見た！」

「それは来たつて言つたのですよ

「男？ 女？」

「男子！」

「そんな嬉しそうな顔をしているつて事は」

「そう、ものっそいカツコ良いのー！」

「マジでー！」

「転校生が来るつてホントか？」

「あ、武志君。残念だつたね」

「何だよ、残念で」

「転校生が女子じゃなかつた事と、転校生がカツコ良かつた事。き

つと摩子取られちゃうよ

「取られるつて何だよ、別に俺の物じゃねえし  
でも好きなんでしょう？」

「は？ 別に好きじゃねえし」

「あ、噂をすれば登校してきた。摩子！」

「聞いてください。何でも転校性が来たとか

「へえ」

「どうしたの？ 辛そうだけど」

「うん、ちょっと全身筋肉痛で」

「どんな運動したんだよ」

「ちょっとってレベルじゃないでしょ」

「突つつかないで」

「大丈夫か、摩子」

「ああ、武ちゃん。全くもつて大丈夫じゃない」

仲が良さそうに話しているグループから摩子と呼ばれていた少女が抜けて自分の席、法子の丁度真ん前に座つて、ぐつたりといつた様子で机にへばり付いた。同じ様にぐつたりとした法子は目の前で同じ格好をしているクラスメイトを見つめながら、でも私の方が疲れてるしという無意味な対抗心を抱いた。

転校生か。法子は机に頬を付けながら、聞き耳を立てていた話に思いを馳せる。

季節外れの転校生は何か秘密を持つていると相場が決まっている。何かの組織の一員だつたり、特殊な能力を持つていたり、あるいは前の学校で暴力沙汰を起こしたとか。一体どんな秘密を持っているんだろう。そんな風に楽しい空想にふける。けれどふと自分の方が余程秘密めいていると気が付いてにんまりと笑う。そう法子は人々がうらやむ魔法少女なのだ。

転校生か。話してみたい。法子はにやつきながらそう考えたが、すぐにその笑顔が引つ込んだ。話してみたいけれど、でもカツコ良

いと言つていた。そんな人が私と話す訳が無い。いやどんな人であつても私は話す事が出来ないか。

私が話せる人はどんな人だらう。そんな益体も無い事を考える。どんな人でも話しかける気が無ければ話す事は出来ないので。そしてどんな人を前にして、法子は積極的に話そうとしないのに。

話せる人。そう例えれば同じ魔法少女だつたら。他の人と違つた秘密を抱える者同士話が合うんじゃないだろうか。あるいは私と同じ様にあんなノートを書いている人だと。いや、そんな人居る訳無いか。

法子は時々体の痛みに眉を顰めながら、ぼんやりと様々な空想に耽つた。顎を支える腕の先ではブレスレットになつたタマが黙りこくつていた。

教室の一角に人だかりが出来ていた。転校生に群がる人々だ。法子は振り返つてそれをちらりと見て、餌に群がる犬の様だと思った。転校生は盛大な歓迎と若干の妬みでもつて迎えられた。鋭い目つき、高い背丈、最初に入つて来た時はクラスの十中八九がとつつきにくそうな威圧感を覚えた。だがその表情には薄い笑みが漂つていて、自己紹介で朗らかに元気よく挨拶を行つた瞬間、ほぼ全ての後ろ向きな評価は覆され、後は好意と妬みだけが残つた。

法子はと言うと、秘密を持つている（持つていなければならぬ）転校生よりも一等高い秘密を持つた自分に酔いしれる心と人と話せない自分を情けなく思う気持ちと重い痛みに捻り潰されそうな思い、詰まる所、外の異変よりも内に対する心に惑つっていた為に、外界の転校生などにはまるで興味を持てなかつた。それどころか顔すら上げずに俯きながら、内に渦巻く三つの障り、中でも強烈な疲労感に苛まれ怠惰な脱力感を覚えて、顔を上げずに一切転校生を見ないどころか、耳すらもまともに働かせず、何とか得た転校生に関する情報は下の名前が将刀という事と、季節外れの転校の理由がありきたりな親の仕事の都という事だけだつた。

今も人垣に囲まれてその向こうに居る転校生の姿は見えない。一瞬、人だかりに僅かの空隙が生まれ、法子はその向こうに転校生が見えた上に、目が合った気がしたが確証は無かつた。見間違いだつた様にも思つ。人垣が重なつて出来た斑な色合いに偶然人の顔の様な形を見出しだけかもしれない。顔を戻して机に突つ伏し、どうでもいいやと眠りに入る。だがどうしても耳は後方の人だかりに向いてしまう。

その時ふと嫌な言葉が耳に入った。

「あそこで寝ているのは？」

え？

途端に嫌な汗が全身ににじみ出た。まさか私の事かと法子は焦りつつ、必死で心を落ち着けようとする。

そうだ、目の前の何とかつていう子も寝ているんだ。だからそつちかもしれない。そりやそうだ、私になんて注目するはずが無い。

高鳴る心臓が嫌な予感を告げ続けている。

また声が聞こえてくる。

「ああ、摩子の事？」

誰かの言葉に転校生らしき声が答える。

「あのおさげの子」

法子の前に座る子の髪型は、ミディアムショートのストレートだ。つまりその子じゃない。法子は自分の髪型を改めて考えて、数秒思考を巡らせて、ようやくおさげだという事に気が付いた。

私おさげだ。

でも分からぬ。まだ私と決まつた訳じゃない。他の子かも知れない。

他の子であります様にと法子は祈りながら耳を澄ませ続けた。

「ああ、あれは、えーっと名前なんだっけ？」

私じゃありません様に。私じゃありません様に。

「なんだっけ？ エーっとね、ちょっと待つて、あー、えーっと、あ、法子だ。何とか法子」

私だー！

「十八娘とかいつ変わった苗字の」「いつも本読んで誰とも話さない」

やめてー。

「何かいつもこそこそしてると」「ね」

「休み時間本読んでばっか」

「たまにやにや笑ってるし」

やめて。

「そういう話してると見えた事無いな」

「前に話した時ずっと俯いて感じ悪かった」

本当に止めて。

法子はタマが自分の心を読める事を思い出して、出来るだけ後ろの人達に気付かれない様に、そつとブレスレットを取って、ポケットの中に仕舞った。

転校生の周りに集まっていた内の半数はクラスメイトに対するあからさまな悪口に眉を顰めてその場を離れていった。陰口を止めはしない。止めれば次に何かを言われるのは自分だ。

俯いて背を向けている法子にはその光景が見えなくて、あたかもクラス中が自分の事を馬鹿にして居る様な気がしていた。

「あの子、前に風呂敷持ってきた時あつたじやん」

「あつたあつた。何かおばあちゃんが持つてきそうな古い感じの」と

お弁当包みだけ？」

「ううう。しかもそのお弁当の中身が煮物と梅干と」はんと焼き魚だったの。婆じやねえんだから」

「あれは笑ったね」

だって、丁度お母さんが入院してて、おばあちゃんに来てもらひて、いつも通りじゃなかつたんだもん。それにあのお弁当はおじいちゃん用のお弁当を私が間違つて持つてきちゃつたからだし。そのお弁当だって忙しくて夕飯の残りをそのままお弁当にしたものだし。おばあちゃんは上手だから料理はどうしても美味しいし、あの日の私

と弟の為のお弁当はフレンチ風の豪華なので。

そんな言い訳を心に思い浮かべながら、法子は必死にじつとしていた。何か反応すれば、更に陰口を言われる事は目に見えていた。「うちらのクラス、みんな結構仲良いけど、あの子だけ何か浮いてるんだよね」

「ね。壁作ってるよね」

「しい。それ以上大きな声出すと聞こえるよ」

もう聞こえてる。

法子は俯きながら心の中で力の無いつっこみを入れた。  
やつぱり私、みんなに嫌われてたんだ。

クラスに溶け込めていない事は法子自身分かつていたし、多分良い思いをされていないだろうとも覚悟していたけれど、実際に周囲の心を聞かされると覚悟なんて易々と貫いて、酷い悲しみが法子の中に突き抜けてきた。

鼻の奥が痛くなつて思わず鼻根に指先を持つていく。当然、そんな事をしても痛みが取れる訳が無い。鼻根に添えた指の先に目から流れてきた液体が触れて、法子はいたたまれなくなつて更に顔を俯かせた。

「そういえばいつもノートに何か書いてるよね」

「前見たらへたつくそな絵が」

「なあ、そんな事は良いからさ」

転校生が話を遮った。

法子はようやく自分に対する陰口が終わつた事に安堵しつつ、同時に転校生が自分に対して何の興味も持つていない事が分かつて、嬉しい様な悲しい様な気持ちになつた。悪目立ちするのは嫌だけど、見られないのは寂しい。普通の人は簡単に両立して自分を主張しているのに、自分にはそれが出来ないとと思うとやはり悲しみの方が大きくなつた。

転校生が次の言葉を接こうとした時に、丁度教師が入つて来て、同時に予冷が鳴る。授業の始まりに当たつて、クラスメイト達は各

々の席に戻り、法子は自分の席についたまま俯いて震え続けた。

その日一日、法子はずっと顔を俯かせて過ごした。顔を上げればまた泣いてしまう。そんな気がして顔を上げる事が出来なかつた。時間はいつもの通り、時に遅く、時に早く進み、やがては下校時刻となつて、真っ先に教室を出た法子は俯いたまま、あの公園へと足を向けた。

誰も居ない公園。四方を囲むマンションが影を作りだして、その影によつて辺りが閉ざされる気がして、法子はほつと安堵した。こにならば誰も来ない。ゆっくりと、昨日ミストが浮いていたブランコに歩み寄つて、勢いよく坐り、思いつきり漕ぎ始めた。筋肉痛の痛みすら、嫌な事を忘れる為の清涼剤に換えて、法子は漕ぎに漕ぐ。「なあ、パンツ見えるぞ」「ひぎや」

思いつきり地面に靴を突き立てて、何とか急停止し、恐る恐る後ろを振り向くと、そこには一昨日ノートの中身を見て失礼な事を言つた男子が居た。

「ああ！」

法子が叫びながらその男子を指した。指された男子は溜息を吐いた。

「なあ、あんた、十八娘法子だつけ？ もうちょっと周りを見て行動した方が良いよ」

余計な御世話だと沸騰しかけたのは一瞬で、すぐに相手が自分の名前を知つてゐる事に引っかかつて何も言えなくなつた。

何処で名前を知られたか思いを巡らせても一向に分からぬ。何処かで会つただろうか。美形、背が高い、プラス失礼。会つたら忘れそうにない相手だ。けれど一昨日会つた以外に覚えがない。まさか小さい頃遊んだとか？ それで結婚の約束をしていたり？ と段々脱線し始めた思考は、またも記憶の引っかかりが現れた事で躊躇止まつた。

「この男子の声、何だか聞いた事のある声だ。一昨日じゃなく、もつと最近。法子の行動範囲は限られている。すぐに自分の関わった人々が頭の中に網羅され、そうしてすぐに思い当たった。

「あ、転校生」

「ああ、そうだけど」

変な事言っちゃった。法子は自分の口走った言葉を反省した。今日一日、ずっと俯いていた為に、転校生の顔すら見ていなかつた。しかし転校生からすれば、あの時クラスに居た全員が自分の事を見知つたと思っているに違いない。その期待を裏切ればどんな逆恨みをされるか分からぬ。

とりあえず、ここは何とか和やかなムードにして退散しなければならない。法子は必死に会話の方法論を頭の中に思い浮かべて言った。

「えーっと、将刀君」

相手の名前を呼ぶ事が仲良くなる第一歩。いきなり名前も失礼かと思ったので、苗字で呼ばうと思つたが、残念ながら苗字を知らないので仕方が無い。

「ああ、野上将刀っていう。よろしく」

「よろしく」

とりあえずの挨拶を済ませ、法子は次の会話を考える。  
だが既に万策は尽きていた。

話題も何も持たない法子に会話を接ぐ力はない。興味のほとんどをフィクションの世界に向ける法子にとつては、天気の話すらも困難だ。今日が雨だろうが何だろうがどうでも良い。だからそれに対する感想も言う事が出来ない。

会話が出来ずに、法子が心の中で右往左往していると、先に将刀が口を開いてくれた。

「学校、嫌いなの？」

「え？」

「楽しそうにしてなかつたから

何で急にそんな話題を？ 今日来た転校生に言われる程、楽しそうではなかつたのか。まあ、その通りではあるけれど。

法子は恥ずかしい気持ちで一杯になつて、口すら満足に開けない。黙つている法子を見て将刀はふつと笑つた。

「まあ、分からなくていいよ。俺もあんな陰口を言つクラスは嫌だ」「ち、違うよ！」

思わず法子は叫んでいた。

「あれは私が悪いだけだから」

そう、誰もがしている当たり前の事をまともに出来ない自分が悪いのだ。言われるだけの理由がある。自分がもっとちゃんとしていればあんな事は言われない。それなのにこの転校生はクラスの人達を悪く言つなんて。転校してきたばかりで何も知らないくせに。

そう考えるうちに、本当に自分は駄目な奴だと嫌な気持ちになつた。

きつとこの転校生は孤立した私に同情して氣を使つてくれたのだ。それなのに、その優しさを不快に感じてしまった。もう私は他人の優しさすらまともに受ける事が出来ない。

どんどんと思考の泥沼にはまつて、法子はいたたまれなくなつて、その場を後にする事に決めた。

「とにかく違うから。悪いのは私だから」

ぼそぼそとそれだけ言つて、法子は背向け、公園の出口へと向かう。

その背後に向けて転校生が言い放つ。

「だったら笑つて話せば良いだろ。そうすればあんな事は言われないし、あんただつてそっちの方が幸せなはずだ」

それを聞いて、法子はもうその場に居られなくなつて、走り出した。

そんな事は分かつていて。そんな事は分かつているけれど、それが出来ないから苦しいんだ。それが出来れば苦労しない。それなのにあの転校生は無神経にもあんなことを言つた。

走つて走つて。

ああ、分かっている。あの転校生にとつてそれは当たり前の事で、至極簡単な事なんだ。だからそれが出来ない私がやつぱりおかしいんだ。

家の前まで来て、玄関を開けて、自室に飛び込んで、ベッドの上に転がって、ポケットからタマを取り出して、そうして強く握りしめた。

「今日は災難だつたね。まあ、あまり思い詰めるなよ

「良いから変身させて」

「は？ どうしたんだい？ 随分と焦つているね。今日の事なら

「良いから変身させて。私はあなたと契約する」

タマはしばし沈黙していたが、やがて法子の服装が変わり、髪の色が変わり、法子は魔法少女になる。魔法少女になつた法子は煮えたぎる様な薄氣味の悪い悲しみの猛るままに、窓の外へと飛び出した。

## ライバルを打ち倒せ！

「魔物は？ 居る？」

ひときわ高く飛び上がり、夜の風に吹かれながら、法子は辺りを一望した。住宅地には人かな温かみを持った光が灯っている。それがむかつく。太陽の様な輝きがあるでもなく、常世の様に暗い訳でも無い。もつと輝けるのに、人の為という名目でその力を抑えている。その実に中途半端な様が気に食わない。

遠く行く先には、爛々と照る輝きがある。ビルや繁華街の強烈な明かりが灯り、昼とまでは行かないが、文明を持つ身として精一杯に輝いている。その光に誘われる様に法子は跳んでいく。

「ああ、微弱だけれど感じる。行く先そのまま」

法子は頷いて見知らぬ屋根の上に着地して、また跳んだ。

「嫌な気分になつてているのは分かるけれどね、八つ当たりは感心しない」

「うるさい」

法子は民家の屋根を飛び次ぎ飛び次ぎ、やがて駅を中心とした繁華街に辿り着いた。一際高く跳んでビルの屋上へと上り、縁に立て駅前の広場を見下ろす。

人々はあちらへこちらへ勝手氣ままに歩き回つている。遊び歩く姿、駅へと向かう姿、待ち合わせをしている姿、誰も彼もが我が物顔でのし歩いている。だが屋上に立つ法子には気が付いていない。自分が立っている事を誰も知らないのだと思うと、法子には目の前の光景がどうにも愚かな気がして、とても嬉しくなった。

「それで魔物は？」

「視界の右端、五階建ての建物の五階」

言われるままに視線を右に滑らすと、五階建ての駐輪場があつた。窓や隙間から見るに、一階から四階までは人の往来があるのに、五階にだけは人が居ない。

「何かあつたのかな？」

五階に人が居ないと魔物の存在はあるのか。襲われて皆が下に非難したのか。あるいは五階に居た人々を丸々消し去ったか。だとしたら相当凶悪な魔物だ。

法子は屋上の縁を蹴り、そのまま駐輪場へと飛び降りた。一度、駐輪場の屋上へと降り立ち、無駄に後方宙返りをしながら再び宙に躍り出て、壁に沿つて頭から落下し、大きく開かれた五階の窓枠に手を掛けて、五階へと滑り込んだ。

誰も居ない駐輪場、ずらりと並んだ自転車の合間に一匹の犬が見える。

犬、では無い。魔物だ。

『犬もどき

犬っぽいけど犬じやない。どちらかと言えば、いるかに近い。

マーキングした縄張りに、人は近づけなくなる。

魔力：微弱

耐水性：MAX

息継ぎ：ちょっと苦手

犬らしさ：秀

法子が見つめている前で、犬もどきは突然法子に吠えたてて、かと思うとお尻を向けて、その後唐突に振り返り、俄かにぐるると喉を鳴らし、いきなり飛びあがつて自転車の影に隠れた。法子にはその行為の意味がまるで分からなかつたが、歓迎されていない様だと思った。何て生意気なんだろう。

「さてと、憂さ晴らしに付き合つてもらいましょう」

法子は酷薄な笑みを浮かべて刀を抜き放つた。殺す。そんな凶暴な思いが湧いた。殺す。学校での会話を思い出す。笑われ、馬鹿にされ、嫌われ。殺す。頭の中に浮かんだ嫌な映像を切り裂き、暴れだしたくなる気持ちを手に持つた白刃に込めて、横一文字に構えた。辺りに気を配る。隠れた犬もどきはすぐに見つかつた。いつの間にか背後に回つている。

即座に振り返る。犬もどきは自分の尾を追つて回っている。法子は刀を両手で振り上げて、明確な殺意を持つて切り下した。犬もどきの腹に切れ目が入る。悲痛な声を出して、犬もどきは自転車の影へと逃げ込んだ。

追う。追つている法子の胸に、後味の悪い後悔がわだかまり始めた。犬もどきが何をしたというのだろう。ただ人を遠ざけただけ。確かに迷惑をこうむつた者も居るだろう。だがそれが追われ、切られ、殺される程の罪だろうか。

そんな当たり前の疑問が法子の胸に湧いてしまった。だがもう戻りは出来ない。全てへの反感が強く強くしこりとなつて容易には取り除きようがない程膨らんでしまった。これをどうにかしなくては生きる事すらま办らない。そう犬もどきを殺さなくちゃいけないんだ。心の中でそう叫ぶと、ふつふつと怒りが湧いた。犬もどきを殺そうとする自分は間違つている。そんな当たり前の感情に流れ、後悔し、投げ出そうとする自分すら憎らしく、目の前が暗く赤く染まっていく。自分を含めた全てが気に食わない。

今日の学校での陰口、いつも一人で居る自分、暗澹として生きづけている自分、そんな見たくも無い光景が頭に浮かぶ。これをどうにかするには斬るしかない。斬つて殺すしか、私は生きられない。法子は犬もどきを見失つて、飛びあがつた。体を上下反転させて、天井に着地して、隅の方で震えている犬もどきを見つけて、足に力を込める。刀を鞘に納め、殺氣を漲らせる。そして天井を蹴りだし、犬もどきへと跳んだ。

震えている犬もどきに迫る。法子は刀の柄に手を掛けて、刀身にありつたけの魔力を込めて、目前の犬もどきへと抜き放つた。しかし止められた。

必殺の意志を込めた刀は、横合いから出された杖に当たつて弾き飛ばしただけで終わり、犬もどきには届かなかつた。

何が起こつたのか。咄嗟に法子は判断できなかつた。だが犬もどきを殺す。その凶暴な意志に支配された法子は、突發的な事象にま

るで関心を払わずに、杖に当たつて軌道の逸れた刀を、上段に構え直して犬もどきへと振り下ろそうとした。

再びそれは失敗に終わる。

突然横合いから衝撃を受けて、法子はふとばされて転がった。その体には少女が一人抱きついている。

攻撃を受けたと思った法子は、全身総毛だつて、必死になつて体に巻き付いた何かを引き剥がす。引き剥がした何かと目が合つて、良く見ればそれは先日助けてくれた魔法少女だつた。丈の短いドレスの様な白い衣装を着たその魔法少女は、悲しげな顔をして法子の事を見つめていた。

「駄目だよ」

魔法少女が、そう諭す様に呟いた。法子にはどういう意味だか分からぬ。だが言葉に込められた切実な響きに何かしらを感じ取つて、法子は引き剥がす手を止めて魔法少女の話を聞く事にした。

「どういう事？ 私はあの魔物をやっつけようとしたのに、どうして邪魔したの？」

それは本心からの言葉だつたが、一方で既に法子の中にはその疑問に対する漠然とした答えも持ち合っていた。何故かつては自分の事を助けてくれた魔法少女が今は自分の事を邪魔しようとするのか。そうであつて欲しくないとは思いつつも、法子には次に相手が吐き出す言葉が何となく分かつてしまつた。

「駄目！ あの子は悪い子じゃないんだよ！ それを殺そうとしゃ駄目！」

ああ、やつぱり。頭はとても冷静で、酷く乾燥した言葉が木霊した。だが体は相手の言葉を直に受けて、力が入らない。視線を逸らすと、犬もどきが震えている。

「でも、あれは魔物で」

「そんなの関係ないよ。あの子だつて生きてるんだから。痛みも感じる普通の生き物なんだから」

あの魔物が何をした。殺されるだけの謂れがあつたのか。

そう問う魔法少女に法子は心の中で必死に反論した。

ある。魔物は悪だ。人を害する事しかしない。放つておけばさりに強力な魔物を呼んで、放つておけば世界が滅びる。魔物は悪だ。だから、だから殺さなくっちゃいけないんだ。

法子は何度も何度も心の中でそう繰り返す。だが声には出さない。結局ハツ当たりでしか無い事など自分でも分かっている事だったから。だが反論は出来ないものの、止めろと言われておいそれと従える程、法子のやるせない感情は軽くない。魔法少女を引き剥がして起き上がり、自分を見つめる悲しげな眼を睨み返した。

法子が魔法少女へ抱いた感情を読んだのだろう。タマが慌てた様子を伝えてきた。

「法子、君は一体何をする気だ」

「決まってるでしょ」

法子の親指が刀の鐔を押し上げる。魔法少女を敵と見定める。

『白焰の魔法少女

純白の衣装を着た可憐な魔法少女。

その正体は、ある、ある、な。

生き物、心、は、理解、示す。

魔力：程々

美う：にほ』

目録：？』

「何これ？」

「妨害されたね。実力が同等かそれ以上なんだろ。ここは退こう。これ以上衝突すると戦いになる」

「戦いは望む所だよ」

「目的を忘れたのかい？　君の目的は魔物を倒して人を救う事だらう？」

「その魔物を庇うなら、排除して目的を遂げるだけ」

「このままじや本当に殺す事に」

「だから何？」

完全に頭に血が上った法子には、タマの言葉も届かない。ただ魔物を殺す、邪魔者を排除する、二つの事にしか意識が向かない。

法子が唸る様に言った。

「魔物は悪だよ。痛みを感じようと、生きてしようと、悪さをするなら排除するだけ」

そうして刀を構える。

魔法少女は驚いた様子で、一度振り返り、背後の震える犬もどきを見てから、再び法子を見て懇願する様に言った。

「それなら帰してあげれば良いでしょ？ 何も殺す事は」

その必死な姿に向けて法子は思いつきり刀を抜き放つた。だが刃が届く前に魔法少女はまるでバネに弾かれた様に後ろへと跳びあがり、犬もどきの前に着地した。

「どうしてもこの子を殺そうとするの？」

魔法少女が幾分冷めた口調でそう尋ねてきた。それに対しても法子が怒鳴る。

「当たり前でしょ！ そいつは悪い奴なんだから！」

言い終えると同時に、法子は地面を蹴った。眼にもとまらぬ速さで、一気に距離を詰める。と、魔法少女は杖を掲げて応戦する気配を見せた。

もしも立ち向かってくるなら相手よりも早く斬る。もしも避ける様なら、そのまま素通りしてあの犬もどきを斬る。そんな単純な作戦を立てて法子は魔法少女へと突っ込んだ。

突然、目の前が爆発した。強烈な熱気に晒され、思わず立ち止まる。今度は辺りを覆う煙が襲ってきて、法子は咳き込んだ。

とにかく煙で辺りが見えない。何処からいつ攻撃されるか分からぬ。恐怖を感じながら、とにかく煙から脱出しようと、法子は焦って横に跳んだ。幸い煙の量は少なく、すぐに煙から抜け出せた。そして辺りを見回すと、フロアの反対側に魔法少女が立っているのが見えた。その頭上に光で出来た人の頭大の魔法円が四つ並んでいた。

「魔法陣……あれは」

「とても基本的な魔術だね。確かに100年位前に国際規格化していった。そういえば今日の授業でもやっていたな。ただ魔力を飛ばすだけのお手軽魔術。でも込められた魔力が強大だね」

「どうしよう」

「もう一度言うよ。退きな。これ以上続けても何も良い事が無い。魔物はある同業者に任せて、君はこの場から離れるんだ」

「嫌！ それだけは絶対に嫌！ それじゃあ、私の負けじゃない！」

絶叫して再び駆ける。折角魔法少女になれたのに、魔法少女の世界でも自分は駄目なのか。そんな思いを振り払いたくて、法子は必死に駆けた。

遙か先の魔法少女の頭上には今や四つの光球が現れて、ぎちぎちと辺りに嫌な音をまき散らしている。

「避けなきやまずいよ」

もうタマの言葉には答えずに、法子は刀に手を添えてじつと光球を見つめ続けた。

光球が一つ飛んでくる。拍子抜けする程ゆっくりとした速度。法子はそれを横に跳んで回避した。そこに一つ目の光球が飛んでくる。今度は物凄い速さ。横に跳んだ瞬間の法子へと狙いを済ませた一撃だった。

迫つて来る光球に驚いた法子は、宙に浮いた状態で無理矢理地面を蹴つて何とか上へと逃げる。その際に避けきれず右の足に光球が当たった。激痛が走つたが、不思議な程動搖が無かつた。痛みに顔を顰めつつ、体を反転させて、傷ついた右足で天井を蹴り、更に距離を詰める。

三つ目の光球が跳んでくる。避けねばまた同じ事になる。そう判断して法子は刀を抜いて、光球を切つた。魔力を込めた一撃で光球は霧散する。そこに四つ目が襲つてくる。無理な体勢から何とか刀を返して光球を切る。力はまるで入っていないが、魔力だけは込めの一撃で、触れた瞬間に光球は砕け散つた。安堵して、着地し、更

に床を蹴る。

魔法少女はがら空きだ。今度こそ切る。法子がそう思つた瞬間、目の前にいきなり壁が出現した。止まり切れずに壁にぶつかり、全身に衝撃が走る。壁は砕け、突き破った法子は残骸と共に床に転がり、何とか立ち上がつた時には既に魔法少女は遠くに退き、再びその頭上に四つの光球を作つていた。

忌々しい思いで胸が一杯になる。法子は歯ぎしりしながら再び魔法少女へ向かつた。ゆっくりと一つ目の光球が。法子はそれを刀で切つた。そこに二つ目の速い光球が。法子は何とか刀の先をその光球へ触れさせた。光球は砕けた。触れさえすれば防げる事に気が付いた法子は刀を前に構えて、そのまま駆けた。そこに三つ目の光球がやつて来る。触れて壊れる。四つ目がやつて来る。触れて壊れる。今だとばかりに力強く踏み出そうとして、足をもつれさせて転んだ。床に擦れて皮膚がそぎ取られるが、すぐに治つていく。気が付けば先程光球が当たつた足から痛みが無くなつていた。体の傷が治つしていく。そのくせ体は動かない。

「限界だね」

タマの声が伝わる。法子がそれを無視して弱々しく立ち上がると、魔法少女の頭上には既に四つの光球が用意されていた。

「初めての本格的な戦闘にしては良く動けていたよ」

一つ目が飛んでくる。法子は何とか刀を掲げて光球に触らせ打ち破る。

「でも疲労が極まった」

二つ目が飛んでくる。法子は刀を触れさせて、だが光球に変化はなく、そのまま突っ込んできて、法子は衝撃を食らつて後ろに飛んだ。

「残念ながら君の負けだ」

三つ目は飛んで来ない。代わりに魔法少女が近付いてきて、腹這いになつて何とか顔を上げる法子の鼻先に杖を突き付けた。魔法少女の目は驚く程冷たい。

殺される。咄嗟にそう思つて、法子は後ずさうとした。だが動けない。手足を微かに動かしただけの惨めな姿をさらしただけだ。

魔法少女の杖に光が灯る。魔力が込められていく。それが放たれれば、死ぬ。

殺される。再びそう思つて、法子は目と鼻から液体を流して、手足を少しずつ動かし逃げようとする。だがそれすらも次第に出来なくなつて、体は完全に床へ這いつくばり、顔も上げる事が出来ず、顔面をくしゃくしゃに歪めながら法子は助けてと心で願い続けた。

## 落ち込んだ日の帰り道

法子が心の中で必死に助けてと繰り返していくと、やがて頭上から優しげな声がかけられた。

「どう？ 殺されそうになるのがどれだけ嫌な事か分かった」  
その声音に、自分の命が救われる可能性を見出して、法子は顔を上げようとした。だが上げられない。体が言う事を聞かない。口から涎が垂れるだけ。

「ね？ もう一度と酷い事はしようとして、約束して」  
最後の言葉だけ妙に底冷えしていた。動かないはずの法子の体が動いて、何度も頷いた。

「分かってくれてありがとう。それじゃあ、ばいばい。あ、そうそう、あの子は大丈夫。私がちゃんと帰しておくから」  
足音が離れていく。それから何か音が聞こえて、しばらくなじて止んだ。後には外からの喧騒が聞こえてくるだけだ。

魔法少女は居なくなつた。命の危機が去つて安堵した法子は、急に悔しくなつた。流れていた涙が更に多くなる。何かにすがりたく、否定して欲しくて、法子はタマに尋ねた。

「ねえ、タマちゃん。私間違つてたの？」

「押し通せない正しさなんて存在しないよ。でも、私はあの同業者の言葉も間違つていると思うね」

「どういう事？」

「理由は一つ。

一つ目は授業で習つたかもしれないけれど、魔物は向こうの世界の概念に守られているからそう簡単に死ない。首を切りうが真つ二つにしようが時間をかけて元の状態に戻る。だから君がさつき何をしようがあの犬もどきを殺す事は出来なかつた訳だ。だからあの同業者が魔物を殺す罪で君を糾弾したのは間違つている。起こりえなかつたんだからね

一つ目に、あらゆる魔力を有するものは魔術に対する抵抗が備わっている。だから魔物を向こうの世界に帰す送還の魔術にだつて魔物の抵抗力が働いて上手くいかない。だから抵抗力を少なくしないといけない訳だけど、その一番簡単な方法が肉体を痛めつける事だ。あの同業者の力量を見るに君と同程度。それ位の力じや暴力以外の選択肢はほとんど無いと言つて良い。つまりあの同業者だって抵抗力を落とすには結局暴力に頼る必要がある。君がやろうとした事と、意識の差はあれ同じだ。

あの同業者が君の心を読んで、その上で送還の為に傷付ける自分と、憂さ晴らしの為に傷付ける君との、意識の差を説いたなら分かるけど、そうで無いなら、結局あの同業者は目の前で行われる残虐性のみに着目して、それを批判しようと言えやすい別の理屈を付けただけだ。だから間違つている、と私は思う

「そつか」

タマの長々しい説明は法子の頭にほとんど入つて来なかつた。けれどその言葉が間違いなく法子を励ますためのものである事は分かつた。だからこそ、それに法子は感謝して、同時に悔しい思いが強くなつた。

魔法少女になれば変わると信じていた。魔法少女になれば自分は何か豪い人間になれて、学校生活にだつて変化があるつて信じていた。でも現実はこれだ。学校では前にもまして居心地が悪くなり、外では自分勝手なハつ当たりで魔物を殺そうとして同じ魔法少女にそれを諫められ、更にその魔法少女に楯突いて完膚無きにまで叩きのめされた。

魔法少女になつたから酷い目に遭つたんじやなくて、魔法少女になつても変われなかつた。それが悔しくて悲しかつた。テレビでは日夜魔法少女の活躍が採り上げられその華々しい戦果を誇つてゐる。一方で自分は地面にへばり付いて惨めに泣いてゐる。その差が悔しかつた。魔法少女になつて変われる人間が居る一方で魔法少女になつても変われない自分が居る事が悔しかつた。

惨めな自分の中に縷々として残っていた最後の希望、魔法少女になれば自分も変われるという幻想が取り払われ、後にはいつも通りの無力に対する悔しさだけが滲んでいる。それが虚しかつた。

法子はうつ伏せになつたまま唇を噛んで、涙を袖で拭つた。だが涙は後から後から流れてくる。

「法子、君が悔しいと感じるのは分かるよ

タマの優しい思念が法子の心に響いた。

「でもね、前にも言つたけれど、まだ始まつたばかりだ。これから幾らだつて強くなれるし、これから幾らだつて豪くなれる。勿論、魔法少女だけじゃないさ。君はまだ子供だよ？ これから幾らだつて良い方向へ向かえるんだ」

優しい言葉が胸に沁みた。鼻の奥が痛くなつて、とうとう法子は泣き声を上げ始めた。

それに対してタマが更に励まそうとした時、遠くで人の声が聞こえた。犬もどきが帰つた事で人払いが解かれたのだ。

「人が来るみたいだ。もう体は回復している。辛いだらうけれど、立ち上がつて。すぐにここから立ち去ろ」

法子は言われるままに立ち上がり、人目を忍ぶようにこそそと窓枠に足を掛けて、跳んだ。

屋根の上を伝いながらの帰り道。出来るだけ人に見られない様に帰る自分の姿がまたも惨めに思えて、法子は嫌になつた。

「星が綺麗だよ」

唐突にタマがそんな事を言つてきた。

星空なんてどれも同じ、ただ暗い背景に白い点が散らばつているだけ。常々そんな事を思つて取りたてて感動をした事が無かつた法子は、今回もだからどうしたのだろうと投げ遣りな事を考えながらぼんやりと上を見上げて、そこにある星空の美しさに打ちのめされた。それは本当に初めての事で、法子はあまりの衝撃に飛び移る屋根を踏み外しそうになつた。

法子はしばらく夜空の美しさに見惚れていたが、それも長くは続

かず、これは今日の惨めさの所為で心境が変化したからだろうと分かつて、また涙が出てきた。けれどそれは悲しいばかりの涙では無かつた。

「もう泣くのはお止しよ

「うん」

法子は涙を拭う。

そして、でも、と思う。確かに魔法少女になつても私は何も変わらず惨めな思いをしただけだつた。でも一つだけ変わつた事がある。それはタマの存在だ。初めての友達。いつも一緒に居て落ち込んだら励ましてくれる友達。タマの方は私の事を友達だなんて思つていないのかもしれないけれど

「友達だと思つているよ」

モノローグに横やりが入つて少し興が削がれたけれど、とにかくタマという友達が出来た。それだけは今日の惨めさを全部覆して余りある収穫だ。

法子はそう考えて、そこでふと気が付いた事があつて、不安げにタマへと尋ねた。

「タマの目的は何なの？」

「だから何となくだよ。誰かを魔女にして世界を救つていう使命が与えられているといえば、与えられているけれど強制ではないし。結局私が何となく人を変身させたいから……かな？」

「なんだ。それで、その」

「ずっと一緒に居るよ」

タマが法子の言いたい事を読み取つて先に答えた。

「本当に？」

「ああ」

「見捨てたりしない？」

「君がどんな状況にあっても見捨てたりしない。ずっと一緒に居る約束するよ」

その言葉で今日の苦労は全部消え去つた。十分だ。私は幸せだ。

そう考へて法子は方向転換をして、一際大きく跳ねた。

あの公園へとやつて來た法子にタマが尋ねた。

「どうしたんだい？ 帰るんじゃなかつたのか？」

「ううん、ちょっと修行をしていこうかと思つて」

「動ける位に回復したとはいえ、まだ疲労は強いだろ。帰つた方

が良いと思うけれどね」

「もう今日みたいな思いはしたくないから」

「そりゃ。なら何も言わないよ」

法子は空を見上げた。先程美しいと感じた星空はいつもの無機質な夜空に変わつていた。

さて修行をしようと気合を入れた時、背後に気配を感じた。続けて声が投げられる。

「何だ。魔物かと思つたら同業者か」

振り返ると、昨日の騎士が居た。全身を黒い鎧で覆い、黒い兜で顔を隠し、黒いマントをはためかせている。その口元には皮肉気な笑みが浮かんでいた。

「あなたは」

「あなたの同業者だよ。魔物が居ないなら」

そこで騎士の言葉が一瞬途切れる。

「あんたやけに傷ついているな。まさか魔物との戦いで消耗したのか？」

法子は自分の体を見回した。だが何処にも傷は見当たらない。もう治つたはずだけれど。

不思議そうにする法子にタマが言った。

「きつと魔力が減つているのを見てそう言つているんだよ」

成程、そういう事かと思つて、騎士の問い合わせようとして、それが敗北という自分の恥部に当たる事だと気が付いて口を噤んだ。

「どうした？ まさかまだ辺りに居るのか？」

騎士の声音が段々と真剣身を帯びたものになつていいく。法子は慌

てて首を振った。

「違います。もう魔物は居ません」

「どうか、やっぱり魔物が居たんだな。それであなたが追い払ってくれたのか」

「いえ、別の人気が」

騎士はしばらく黙つて法子を見つめながら、やや声を落とした。

「あんた負けたのか」

痛いところを突かれて法子の顔が歪む。それが答えとなる。

騎士は少し申し訳ない気持ちになつて（自分では）優しい（つもりの）言葉を掛けた。  
「みたところ、まだ変身出来る様になつてから日が浅いんだろう？　一つの負け位で気にする必要は無い。闘つていれば嫌でも敗北は付きまとつ」

そう言われても悔しいものは悔しいのだ。先程までの法子なら反発を抱いていたかもしれないが、タマとの絆を感じて穏やかな気持ちになつていた法子は、その言葉を素直に受け取る事にした。相手は親切で言つてくれているのだろう。田くじらを立ててもしようがない。

とはいえるやはり続けたい話題ではないので話を変えようと、法子は昨日自分を助けてくれた事について尋ねようとして、止めた。相手は法子の事を憶えている様子は無い。昨日の事は本当にただ魔物を退治しようとしただけなんだろう。そう考えて、何故だか法子は残念な気持ちになつた。

「敗因は？」

「え？」

唐突な騎士の言葉に法子は聞き返した。

「負けた理由」

何だか遠慮のない人だなと思ったが、不思議と不快感は湧かなかつた。相手の方が同じ変身ヒーローとして遙かに格上の様子だからかもしれない。

「負けた理由と言われても、相手の方が強かったから?」「それじゃあ、何にもならないだろ?自分がどうして負けたのかを冷静に分析しなくちゃ」

法子は駐輪場での戦いを思い出す。思い出しても圧倒された思い出しかない。力の差がありすぎたからとしか言ひようがない。

そこにタマのつっこみが入った。

「いや違うだろ?」

そう言われてもどうしてだか分からない。考えあぐねる法子に騎士は助け船を出した。

「なら、どんな戦いだったか教えてくれ。第三者の目から見れば分かる事もあるだろ?」

そう言われても、負けた事を話すのは恥ずかしい。まして同じ魔法少女に負けた等とは言いたくなかった。でも負けた原因というのは確かに気になる。

どうしよう。

「話してみれば?」

何故だかちよつと怒っているタマの言葉に促されて、法子は迷つた末に駐輪場での戦いを騎士に話した。ただし戦つた相手は魔法少女ではなく、あくまで魔物という事にして。

法子が話し終えると騎士が一つ頷いた。

「成程な。どうやら相当強力な魔物だったみたいだな。あるいは魔法導師か。聞けば初めての戦闘だったんだろう? それにしても良く戦つたと俺は思う」

「えっと、ありがと」「わいります」

ちよつと上から目線ではあるけれど、褒められたのは確かで、何だか法子は氣恥ずかしくなった。

「でだ。肝心の敗因だけど、それは接近戦にこだわった事だろ?と思つ」

「接近戦……」

「そう、不用意に近付いた結果、相手の魔術にしてやられた。遠く

から攻撃する手段があればもっと慎重に闘えていたはずだ

騎士の発言にタマが法子の心の中で噛み付いた。

「そんな風に慎重に闘つたらすぐに魔力が尽きただろうけれどね」

勿論騎士には聞こえない。法子にはどちらが正しいのか分からない

ので、おろおろとしながら成り行きを待つた。

「どうやら遠方に届く攻撃は持っていない様だな」

騎士がそう言つて、離れた場所にある砂場を指差した。

「見ててくれ」

すると砂場から柱がせり上がってきた。それに対し騎士は剣を抜き、体を半身にして、剣を持った腕を巻き付かせるようにして一呼吸置く。構えた剣に魔力が蓄えられていく。そしてその貯めた力を、剣を振ると共に解放した。風切り音が鳴つて、再び静寂が訪れる。一拍遅れて、柱の中心が横一文字に砕け散り、弾けて、柱は真つ一つになつた。

「おお」

法子の口から思わず感嘆の吐息が漏れる。

騎士は法子に向き直つて、口元を微笑させた。

「魔力を剣に込めて放つ。単純だけれど、その分使い勝手が良い。遠くにあるとはいえ、斬る事に違いは無いから意味づけもし易い。だから簡単に出来る」

法子はしきりに頷いた。その様子に騎士は笑みを強くした。

「そんな大した助言じゃない。ま、役に立つと良いな」

法子はまた頷いて、ふと首を傾げた。

「あの、教えてくれるのはありがたいんですけど、どうしてこんなに優しくしてくれるんですか？」

法子が疑問をぶつけると、騎士は背を向けて歩き始めた。

「ヒーローだからさ」

そう呟いて、騎士は剣を納める。

「それじゃあ、君に世界の祝福があらん事を」

騎士は何故か無駄にマントを翻して高く跳んだ。そしてすぐに夜

の闇にまぎれて消えた。

「何だかきざつたらしい変な奴だつたね」

注意を騎士の消えた闇夜に向けながら、タマは法子へそつ思念を送つた。

「カツコ良かつたね」

法子がそれに対してもう一つとした様子で答えた。

「は？」

「ヒーローか。私もあんな風になりたいなあ」

「いやいやいや。あんな氣取つたのが良いの？」

タマの判定に耳を貸さずに法子はしばらく騎士の消えた方角をうつとりと眺めてから、やがて砂場に立つ柱に田を開けた。

「それでさ、タマちゃん」

「どうしたの？」

「さつき教えてもらつた技、どう思う？」

法子としては直ぐにでも覚えて使いたかつたが、タマが騎士に対して良い感情を抱いていなさそうだったので、遠慮してそう聞いた。それに対してタマはちょっと不機嫌そうに答えた。

「まああの騎士の言つ事はほとんど尤もだと思つよ。戦術の幅が広がるし、覚えて損はない」

「そつか！」

法子は早速刀を構える。

「それでどうすればいいの？」

「それぞれの感覚によるから何とも。とにかく対象を切りたいと思えば良い。あの騎士も言つていたけれど、とっても簡単だから、やつてみればすぐに出来るんじゃないかな？」

「分かった

法子は刀に魔力を込めた。そして砂場の柱を見定め、体をゆっくりとねじって、思いっきり解放して刀を振り回した。勢い回つて一回転して倒れ込み、しりもちをつく。

田を回しながら砂場を見ると、柱に切り込みが入つていた。

「やつた！ 出来た！」

「お見事。でも、あそこを狙つたの？」

切り込みが入っているのは端の方である。法子が狙つたのは柱の中央だ。

「ちょっと違うかも」

「百発百中で当たる様にしないとね」

「むつ」

法子は立ち上がりて刀を構え、それから何度も刀を振つた。柱の傷がどんどんと増え、時に切れて柱がどんどんと短くなつていく。しばらく経つて、ようやく狙いが真ん中に集まり始めた頃に、タマが言つた。

「はい、そろそろ止め」

「ええ！ ちょっと待つて。ようやく真ん中に当たる様になつてきただから」「気付いてないのかな？ また倒れるよ？」間違いなく、明日は今日よりも体が重くなるからね

「うつ」

「帰る為の力も残しておかなくちゃいけないし、今日せむつ切り上げ

「はーい」

法子は渋々刀を納め、公園の時計を見上げた。

「あ、もうこんな時間！」

「どうしたの？」

「夕飯の時間だよ！ 早く帰らないと」

法子は急いで飛びあがり、屋根の上を渡りながら、家を目指した。その途中で法子が嬉しそうに言つた。

「何とかあの技をちゃんと使える様にしたいなあ

少し前の落ち込み様など無かつたかの様な嬉しそうな声にタマは少し不思議に思う。どうしてこんなに元気になつたのだろう。あの騎士の影響か、あるいは新しい技を身に付けたからか。良く分から

ない。何故だかもやもやとするが、とにかく主が元気になつたのだから良しとしようと無理矢理自分を納得させた。

「やる氣を出してくれたのは嬉しいけれどね。自分の体は大事にしてよ」

「分かつてゐるよ。でもね」

「でも?」

「私はヒーローだから多少苦しいのは我慢するよ

「そういうもの?」

「そういうもの。今はまだ未熟かもしれないけど、これから沢山の人を救つて、みんなの笑顔を守る立派なヒーローになるから」

タマには法子の語る言葉が何処となく子供っぽく思える。実際中学生と言えば大人から見れば子供なのだし、当然と言えば当然かもしない。

とはいへ、子供っぽいかもしれないが、法子の明るい言葉がタマには嬉しかった。傍に居る者が明るくなれば自然と嬉しくなるものだ。

## 休日だけ毎外出る

「か、体が……動かな」

法子は立ち上がりつてから体を硬直させて今さつきまで寝ていた布団へと倒れ込んだ。

布団が浮き沈み、跳ね上げられて、それから仰向けになつて大の字になる。

「だから今日はもう起き上がるな」「

そう厳かに宣言した法子に對して、タマが呆れて呟いた。

「昨日もそんな事を言つて、一日中寝ていたよね」

「うん、でも今日も無理」

「はあ、若いのが何て様」

「タマちゃん、おばさん臭いー」

法子は体を丸めて掛布団に絡みつくと、一度田の睡眠に入りつとする。

そこへ外から声が掛かった。

「法子ー、起きてー。昨日も一日寝っぱなしだったんだから、今日はもう起きなさいー！」

「う

「法子、ちょっと頼みたい事があるんだけど」

母親の声が聞こえてくる。それは亡者を駆り出す狩人の声。聞けば抗う事は出来ない。

そうして面倒なお使いを頼まれる。

「おや、母君からだよ?」

「もうー!」

法子は不満を込めて起き上がった。

「おや、今日は起き上がらないんじゃないのかい?」「行くしかないでしょ

法子が痛みに耐えるまいちない動きで用意をしてこる姿で、タマ

は笑つた。

「大変そうだね」

「本当に動きたくないのに。お母さんの馬鹿」

「私としては中に籠られるよりは外に出てもらつた方が嬉しいけど、苛立つ法子と笑うタマ。そこにまた母親の声が届いた。

「ねえ！ 法子ー！ 起きてるー？」

「今行く！」

法子は大きな声で答えてから、部屋の扉を開けて、体を引きずりながら下へと降りていった。

「全く、何で私があいつのお弁当を届けなきやなんないの？」

「まあまあ。可愛い弟君の為だろ？」

「全然可愛くない！」

「そうかねえ。良い弟君だと思うけれど」

休日の河川敷、法子は土手の上を歩きながら愚痴りつつ、下で行かれているサッカーに目を向けた。

今日は河川敷でサッカー大会をやっている。幾つかある「ポート」に小学生、中学生、高校生、社会人と分かれて、大声を張り上げながらボールを追っている。法子の弟も小学生の部に参加しているはずだ。法子はサッカーにまるで興味が無かつたので、どうでも良さそうにしばらくわらわらと動く選手やわやわやと野次つている観客を眺めてから、視線を逸らし、そして凄い勢いで視線を戻した。

見れば土手の下、座つて観戦している人々の中に見知った顔があった。同じクラスの生徒だった。何人かで固まって時折はしゃぎながら、中学生のコートを眺めている。名前も分からぬが確かにその顔を毎日のように見ている。

見つかりたくなかつた。元より学校の人と喋るのは怖い。もし取り囲まれたらどうしていいか分からぬ。一対一で話す事も無理なのに、複数人に話し掛けられたら、それこそ地獄を見る事になる。例え、相手にいじめの意志が無く、端から見てもただ単に話しかけ

ているだけでも、それは法子にとつてこの上ない苦痛になる。

まして昨日の事がある。いじめられる事は必然だ。そう考えて法子は出来るだけ見つかる事の無いようにこそとした滑稽な足取りで、コートに熱い視線を送るクラスの他人達の後ろを通り過ぎた。何とか声を掛けられる事も無くやり過ごしてほっと安堵していると、小学生達のトーナメントが行われている場所へとやつて来た。法子よりも幼い子供達が掛け声を上げ、ボールを追っている。ボールが高く飛んだ。選手も観客もその行方を追うが、法子だけはコートを見回して弟の姿を探す。辺りから喚声が上がる。点が入ったのか。法子にはコートを見ても良く分からぬ。俄かに色めきたった観客達の間に視線を這わせていると、ようやく弟の姿を見つけた。ようやく面倒なお使いから解放されると安堵して、法子は重たい体に鞭打つて弟の所に向かおうとして、足が止まった。

弟が何だか楽しそうにはしゃいでいる。その隣にあの転校生が居た。サッカーボールを器用に操り、体の至る所でボールを跳ね上げ受け止めている。弟はそれを尊敬の眼差しで眺めている。

何での転校生がこんな所に？ 疑問よりも先に、嫌だなと思つた。会いたくない。喋る事になつたらどうしよう。不安がどんどん膨らんで、その不安に押しつぶされそうになつたから、法子は踵を返した。ここまで来た事は来た。渡せなかつたけれど目的地までは来れたんだから上出来だ。そんな自分勝手な事を考えてその場を去ろうとして、けれどそれは許されなかつた。

「あ！ 姉ちゃん！」

法子の体が大きく震えた。続いて、湿っぽい汗が体中から吹き出し始めた。

「お姉さん？」

転校生の尋ねる声が聞こえる。益々汗が強まつた。

「良かつた、弁当持つてきてくれたんだ」

背を向けたまま固まる法子に、一人は近付いていく。

「悪い、姉ちゃん！」

そう言って、弟が法子の前に回って、お弁当を引っ手繩つた。

「そういうや、将刀さんって知ってる？ 姉ちゃんと同じ中学校に転校してきたみたいなんだけれど」

全力で首を横に振りたかつたが、後ろに本人が要るのでは出来ない。肯定も否定も出来ずに法子はただ固まつた。

「さつき偶然知り合つたんだけどさ。凄いんだぜ。部活とかクラブとかに入つてる訳じやないのに、滅茶苦茶上手いの」

だからどうしたと法子は心中で思った。弟の言葉なんて聞いていられない。今、法子の中はどうしたら当たり障りなくこの場を去れるかという方策を練るのに一杯だ。

「どうした？」

「いや、その、じゃあ、私帰るね」

「いや、姉ちゃん、ちょっと待つてって」

一刻も早くこの場を去りたいという法子の願いは一向にかなえられない。むしろ弟の所為で更に深い泥沼にはまつていく。

「将刀さん、これ、うちの姉ちゃん」

「ああ、さつき聞いた」

「まあ、弟の俺が言うのもなんだけど、結構美人だと思つよ」

途中で吹き出しつつ弟が言った。

ハードルを上げるなと叫びそうになる。それをぐつと堪えてこの場を立ち去る方法を探す。だが思いつかない。法子は恥ずかしさと怒りと、ついでに情けなさに苛まれながら、弟を殺して自分も死のうと少しだけ真剣に考える。

「多分、将刀さんと同じ学年だと思つんですけど」

「一緒だな。それに同じクラスだ。話もした」

「え？」

法子は振り向ぎざまに、弟と同時に間の抜けた声を出した。

弟の驚きは、将刀が姉を知っていた事に対する驚きが半分に、根暗な姉が他人と、しかもまだ出会つて間もないはずの転校生と、その上弟が持つ他人に対する評価基準、容姿とサッカーの技術に秀で

た将刀と話した事への驚きが半分。

法子は他人が自分に言及した事に対する驚きが半分に、将刀の言葉が法子に対する棘を含んでいなかつた事への驚きが半分。驚き呆けている二人の視線に晒されて、将刀は少しばつの悪そうな顔をした。

「えつと、法子さん」

将刀の口調が唐突に真面目くさつたものに改まる。

「昨日は悪かつた」

そう言って、頭を下げる。

頭を下がられて法子は混乱に混乱を極めた。謝られる所以なんてまるで無い。昨日というと公園でのやりとりだろうが、あれは完全に自分が悪かった。何か悪い事があつた場合、その原因はまず間違いない自分なのだから。そもそも法子の中で昨日の出来事は既に消えかけている。覚えているのは、学校で嫌な思いをした事と公園で転校生と話して恥ずかしい思いをした事と魔法少女と闘つて悔しい思いをした事とタマの励ましで嬉しい思いをした事だけ。詳しい事はほとんど思い出せない。日々の鬱屈とした思いを忘れる事に因つて自己防衛してきた法子はいつもの通り昨日の事もほとんど忘れてしまっていた。それなのに謝られてはこちらの方が申し訳ない。法子はどう返したものか分からなくて、つられて頭を下げた。

「ううなるともう訳が分からぬ。」

将刀としては部外者のくせに下手に踏み込んだ事を言つて不快にさせてしまつた事に対する謝罪した訳で、将刀は全面的に昨日の事は自分が悪いと信じている。しかも昨日のやり取りの中で法子からは能動的な言動は受けていない。つまり謝られる様な事どころか、法子から何もされていない。だから何について謝られたのか分からない。将刀は少し考えて、世の中には反射的に謝ってしまう人種がいて、法子はその類なのだろうと、すぐさま見当付けたが、ではそれに対してどう返答したものかというのがあるで分らない。

一方、法子は法子で、謝った後になつて、さつきのタイミングで謝つたのは変だつたし、謝罪した理由も理解してもらえなかつただろ?と反省するものの、もう一度、今度は謝る理由も添えて謝ると「うのは、どうにも気恥ずかしく、滑稽にしかならないだろ?」の足を踏んで、押し黙る。

弟は「う」と、これこそ完全に蚊帳の外で、ただでさえ姉が他人と交流を持つた事に驚きを隠せなかつたのに、それが突然謝られ、その上謝り返すという訳の分からぬ状況に、とにかく呆然として、やがて世の中つて不思議だなと良く分からぬ感銘を持つに至る。三人ともが黙りこくり、端からは歓声。法子は形容しがたい和やかな居心地の悪さを感じて、何とか話題を継ごうとあれこれと頭を働かせるが話題は欠片も上つて来ない。代わりに将刀が話頭を転じた。

「お弁当持つてきたんだつたよな

「は、はい」

「料理出来るんだ」

「え?」

出来ないとは言わないので、得意と断言する程の腕でも無い。ついでに持つてきたお弁当は全て母親が作った物だ。そんな意味の事をオブラーートに包んで言おうと法子が頭を捻つていると、横から弟が口を出してきた。

「出来るよー 無茶苦茶上手い

「ちょっと!」

「今日の弁当も全部姉ちゃんが作つたしね

当然嘘だ。これ以上下手な事を言つるのは止めると焦る反面、何で弟はこんなに馬鹿な事を言つのだろ?と疑問に思つた。からかうにしてもいつもはもう少し違つた角度でからかつてくるの。端的に言えばあからさまに馬鹿にしてくるのに。

「へえ、凄いな

弟が開いた弁当箱を覗き込んで、将刀が感じ入つて呟いた。その

感嘆は法子に向いているが、当の法子は幾ら褒められても罪悪と羞恥しか感じない。

その時、危ないという声が聞こえた。良く分からぬまま見上げると、ボールが見えた。法子達に向かって近付いていた。

ぶつかりそうだなあと法子はぼんやりと考える。当たらないと思つていい訳じゃない。ただ法子は危機に鈍いところがあつて、咄嗟の出来事を真剣に捉える事が出来ないだけだ。

どんどんとボールは向かってきて、それにつれて法子の視界に映るサッカーボールの影も大きくなり、そろそろ当たると法子が思つた時、突然視界一杯に影が射した。

将刀が法子の前に立ち塞がつて、ボールを胸で受け止め、落ちるボールを器用に足で操つて静かに地面へと下ろす。

試合に向いていた視線の内のいくつかが、将刀に驚嘆の視線を向けた。

将刀はボールのやつて来た方向へボールを蹴りながら向かつていった。

去つていく将刀を見送つて、法子が息を吐いた。

「凄いんだね」

「何が？」

「ボール受け止めるの」

「あれくらいは普通だよ」

「あんた、出来るの？」

「守るのが姉ちゃんじゃなかつたらね」

弟が憎まれ口を叩いて笑つた。だが法子は反応せずに上の空。

「どうした？」

「今、守つてもらつたから」

その法子の呴きは問い合わせられたから答えただけの、何の感慨も籠つていらない言葉であつたが、弟はその言葉の中に拙い恋心を読み取つた。

「へえ、成程ねえ」

「何よ

「いや～、別に～？」

弟は一頃り笑つてから、尚も笑顔で、

「まあ、安心してよ。ちゃんと応援するからさ」

「応援つて？」

「姉ちゃんの恋に決まつてるじやん」

「恋つて誰との？」

「将刀さんとの」

「はあ？」

法子は思わず、遠く、サッカーボールを少年達に手渡していく将刀を見て、すぐに視線を逸らした。

「なんで私があいつと」

「だつて、気になつてるだろ？」

「そんな事無い」

そこで法子はまた将刀を微かに眺め、そしてまた視線を逸らした。法子の中に恋心と呼べる様な感情は無い。それは法子自身自覚していた。だが弟がはつきりと断言していくので、まさかどいつも思ひが頭をかすめる。

「それに将刀さんも姉ちゃんの事、気に入つてるみたいだし」「どこが？」

法子の目が三度将刀へと向ぐ。将刀はこちらに戻つてくるといふで、目が合ひそうになつて法子は目を逸らした。

「こひこひのは理屈じゃないんだよ」

「はあ？」

「あのわー、姉ちゃんと喋る男なんて稀少だよ？　他に面のの？」

「居ない……けど」

「でしょ？　そんな姉ちゃんに話しかけるって事はそれはもう惚れてるんだよ」

「訳分かんない」

「だから理屈じゃないんだって。見た目も良いし、性格もよれやう

だし、運動も得意。悪いところないじゃん

「だから？ こっちが幾ら思つたって所詮片思いでしょ？」

「だーかーらー、少なくとも無関心でも嫌つてる説でも無いじゃん。つーことは、これから幾らでも好きになつてもらえるつて事でしょ？」

？

「意味分かんない」

「つまりやつて見なくちゃ分からないつて事だよ」

「私にはそういうの無理だよ」

「それで自分が好きで、その上自分を好きになつてくれる人を待つてる説？」

図星なので、一瞬法子の言葉が詰まる。それを弟は嘲笑つて、そしてふと真面目な顔になる。

「ま、そんな説でさ、将刀さん、良いと思つよ、俺。マジで、姉ちゃんが頑張るつて言つなら、俺も応援するし」

「何か心細いけど」

「おい」

「でも、何で？ 別に関係ないのに」

「将刀さん気に入った。将来、俺の兄になる男に申し分ない」

「いやいやいや。何にせよ、私はそんな気ないから」

「えー」

何故か弟と一緒にタマまで不満の声を上げる。

なんだか腹が立つて、さてどう叱つてやうつかと考えあぐねていると、将刀が帰ってきた。

法子は意識してしまつて喋れない。顔が火照るのを感じてまさか本当に好きなのかと、自分の心にじぎまぎしてしまつ。弟はそんな姉を見てほくそ笑みながら、どうやって一人をくつつけようかと思案する。将刀は戻ってきたばかりで、どう話をしようかと考える。三者とも考え方をして誰一人喋らない。

しばらくして、三人が同時に口を開いた時、遠吠えが木靈した。

会場中の視線が发声源へと向く。人よりも一回り大きい獅子の様

な獣が一つ足で立ち上がり、大きく凶暴な顔で辺りを睨みつけていた。

「あれ？ 法子さんじゅん」

「法子さん？」

「あなたの後ろの席の」

「ああ、法子さん」

「どうしたんだね、こんな所に」

「私達と一緒にじゃないの？ サッカー部に好きな人でも居るんじゃない？」

「そんなキャラじゃないと思つてたけど」

「小学生の方に行かれますね。『家族でもいるんでしょうか？』

「きつとやうだよ」

「しかし一昨日のは胸糞悪かったな」

「一昨日の？」

「ほり転校生の……ああ、そういうえば摩子はあの時、寝てたつけ」

「野上君だけ？ それがどうかしたの？」

「いや、あの転校生は別に何も。ただその周りを囮んでた、江木さんとかがさ」

「どうしたの？」

「いや、なんつーか、急に法子さんの悪口言こ始めて」

「マジで冷めた」

「ね」

「へえ、そんな事があつたんだ」

「まあ、そんだけ。関係ないっちゃ無いけどさ」

「あんまり気にしてもしようがないです。今は「うちの事を……あ、

抜きましたね」

「あー ああー」

「ちょっと落ち着いて」

「攻めてるねえ」

「行け！ 行けえ！」

「あ、外した」

「あああー」

「つねせこです」

「もうちょっと落ち着いて観戦しりょ」

「落ち着いてられないでしょ？ 三木君が！ 三木君のー。」

「知らないよ。あたしの田淵でじやないし」

「摩子さんのお皿当てさんばどひなんですか？」

「えー？ 私の？ 特にいないけど」

「ん？ だつて、最近ずっと高橋君、高橋君で」

「そりなんだけじやー」

「ああー、また外した！」

「つねせこ。さつき見かけて近寄つて見たら、すんごく馬鹿っぽくてさ」

「ああ」

「やつぱり外だけ良くてもねえ」

「そりやそりだ」

「いい加減決めてよー！」

「いい加減座れよ。何にせよ、じゃあ、ついでの武志君を応援して上げなよ

「んー、そり思つたんだけじ、さつきから全然活躍してないんだよね」

「武志君はティーフェンスで、チームがずっと攻めているのですから  
しそうがないのです」「でも折角応援しようと思つたのに……あれ？」  
「どうしました？」

「なんだか向こうが騒がしこ」

「ホントだ。どうしたんだわ？」

「あ、摩子、何処行くのぉ？」

### 三と四をつきあわせて考えよう

「へえ、あれが魔物かあ」

弟が背伸びをして遠くの魔物を眺めながら、酷く気楽な様子で呟いた。

獅子の頭に、人よりも一回り大きい筋肉質な肉体、両手両足には鋭く長い爪が生え、如何にも危険な様子を漂わせている。唸り声を張り上げながら、敵意を漲らせて、辺りを睨みまわしている。

魔物の周りには囮む様にして沢山の人が集っている。遠巻きにして眺めている。何処か不安そうに、されど楽しそうに、猛る魔物を囮み、ある者は語らい、ある者は感嘆し、ある者は写真を撮り、ある者はある者は笑っている。余裕に満ちた顔で不安げに楽しそうに魔物を眺めている。

彼等が魔物よりも強いなんて事はない。魔物が爪を掛ければ、それだけで命は搔き消されるだろつ。それなのに彼等が逃げ惑う事はない。

それは偏に魔物の非現実性に起因している。魔法が世界の常識となり、魔術が単なる技術に成り下がり、溢れる魔力に因つて魔物の出現頻度が以前とは比べ物にならない程上昇した現在でも、実際に魔物を見た者は少ない。あくまで一般の人々にとつて魔物は物珍しげなニュースでしかなく、しかもその大半はヒーローに倒されて終わる痛快な劇である。

彼等が魔物の危険を知らない訳ではない。実際に彼等は思考の片隅で、人を殺す魔物の恐怖を思い、胸を弾ませている。ただ彼等は出来ないだけなのだ。被害者が自分になる可能性をひたすら想像出来ないだけなのだ。

そんな群衆を見ながら法子は呟いた。

「あいつ等、馬鹿じやない。危ないのに」

それは孤独な法子が良くやる、何の気兼ねも無い、誰に聞かれる

ともない咳きだつたが、悲しい事に今日は久しぶりに家族以外の人間が近くにいた。

言つてから数瞬経つて、初めて自分が暴言を吐いた事に気が付いて法子は身を固くする。法子の目が恐る恐る将刀に向くと、それを待つていたかのように将刀が笑つた。

「じゃあ、弟を連れてあんたも逃げれば良いんじゃないか？」

その皮肉気な言葉に苛立つて苛立つて法子は顔を背けた。先程ちよつと良いなと思ったらこれだ。侮蔑の籠つた言葉は法子にとって馴染みの言葉である。けれど今まで経つても慣れる事は無い。恥ずかしさと悔しさの混じり合つたひたすら不快な思いが胸に湧く。やつぱり私は人と関わるのは嫌いだ。そう思つて不満げな顔で俯いた。

一方、将刀はほんの軽い気持ちの言葉が何だか法子を氣落ちさせてしまつた事に気が付いて当惑した。

二人が押し黙る。傍から見ていた弟は、空気の悪くなつた二人の間を取り持とうとして、明るい声を掛けた。

「なあ、もつと近くであの魔物を見ようよ」

その途端に一人は顔を険しくさせて諫めの言葉を吐く。

「駄目！ 危ないって言つたでしょ」

「駄目だ。危険すぎる」

息の合う二人を前に、弟は微笑して、尚も明るい調子で言つた。「そんな事言つてもここだつて十分危ないよ。そんな事言つながら早く逃げようぜ」

弟としては一人を連れだして、後は自分がはぐれるなり何なりして、二人つきりにしてしまおうという作戦だつたのだが、

「え？ ……つと」

法子は気乗りがしない様で言い淀む。弟は残りたそうにしている法子を不思議に思った。

法子が残りたいと思うのは当然で、出現した魔物と闘いたくて仕方が無かつたからだ。逃げてしまつては闘う事が出来ない。

「ねえ、タマちゃんどうしよう」

タマに頼つて尋ねると、タマは少し考へる気配を見せてから、答えた。

「はぐれれば良いんじゃない？」

「はぐれる？」

「だから一緒に逃げるふりをして途中で抜け出せば良いんじゃないかな？」

「そつか。それもそうだね。流石タマちゃん！」

「ちょっとは自分で考えなさいな」

頭の中で会議を終えた法子は、途端に笑顔を一人に向ける。

「分かった。じゃあ逃げよう」

気乗りのしない様子だった法子が突然笑顔になつた事で、二人は不審がり、特に弟の方は久方ぶりに見た姉のあまりにも晴れやかな表情に気持ち悪さを感じた。硬直している二人を置いて、法子は早速土手の上へと上がる。遅れる二人は一瞬顔を見合わせてから、不思議そうな表情で見つめ合い、それから法子の後を追つた。

土手の上にも沢山の観客が居た。こちらの観客達は、魔物から離れているし、暴れ出してもまず殺されるのは土手の下で魔物を遠巻いている人々だから安全だと信じて、あからさまに余裕の表情を浮かべている。

法子は何となくそれらの顔が鼻についたが、それよりもはぐれる事の方が大事だと、機を見計らう為に集中し始めた。

一方で弟の方は法子と将刀のちょっと後ろを歩きながら、自分がはぐれる事で法子と将刀を一人つきりにする機会を窺っていた。それは直ぐにやつて来て、人口密度の高い場所に差し掛かった拍子に、弟は勢いよく別方向へと駆け出した。人にぶつかるのも構わずに駆け抜けて、しばらく経つてから振り返る。一人が一緒に歩いている所を見たかったのだが、視線の先には乱雑に立ち並ぶ人ばかりだけで、姉と兄予定の姿は見えなかつた。

「ま、いつか。上手くやつてくれよ、姉ちゃん」

弟がそう呟いた時、全く別の場所で法子もまたぼぐれていた。

「もう無理。もう走れない」

「うん、もう止まつて大丈夫」

タマの言葉を合図に立ち止まつた法子は、肩で荒く息をしながら、上手くいつた事にほくそ笑む。丁度、人だかりの多い場所に差し掛けたのは運が良かつた。弟の事が少し気になるが、将刀がきっと家まで送り届けてくれるだろう。そんな事を考えて、安堵すると、まだ息も整わぬうちに、タマへと尋ねかけた。

「それじゃあ、早速変身しよう」

「それは良いけど。良いのかい？」

タマが尋ね返してきた。法子にはその意味が分からぬ。

「何が？」

「辺りに結構な数の人人が居るけど、魔法少女だつてばれて良いのかい？」

「あ」

法子が辺りを見回すと、確かに多くの群衆が居る。そのほとんどが魔物を見つめて、眼を逸らす様子は無いが、中には別の場所を向いている者も居るし、いつなんどき注目されるか分からない。

「どうしよう」

「自分で考えなつて」

「でも」

法子はまた辺りを見たが、人目を阻めそうな、変身に適した場所は無い。

「どうしよう。人に見られない場所なんて無いよ」

「いやいや、あそこに丁度良い建物があるだろ？」

タマの意志に促されてそちらを見ると、確かに小さな建物がある。だが法子はその建物をあえて無視していた。

「やだよ、あれトイレだもん」

「ああ、そなのか。でも別に良いじやないか」

「こーやー。汚い！」

「そんなに汚く見えないよ。うん、大丈夫」

「トイレで変身する魔法少女なんて嫌！」

「そんな事を言つたつて他に無いだろう。減るものでもないし大丈夫」

夫

「プライドが減る！」

「文句があるなら代案を出してくれ」

「うう。で、でもさ、例えば私がトイレに入つて、その後に変身した私が出てきたら、それを見ていた人にばれちゃうかもよ？」

「その点は安心してくれよ。前にも言つたけれど、変身さえすればれる事は無い。もつと言えば、変身する所さえ見られなければ、例えどんなに怪しい状況だつと変身前と変身後が結び付けられる事は無い」

「むつ」

遂に退路は極まつて、法子は渋々と言つた様子でトイレへと歩み始めた。

「魔法少女がトイレ……か」

「嫌なら魔法少女を止めるかい？」

「やだ。続ける」

法子がトイレに入つて十数秒、トイレの中から魔法少女が現れた。突然の魔法少女の出現に人々は好奇と期待の視線をその魔法少女へと注ぐ。沢山の視線に晒された魔法少女の表情は晴れやかな笑顔だったが、少しだけ悲しげだった。

法子が恰好を付けて飛び上がり、人々の頭を越えて再び魔物の居るコートへ戻ると、事態は全く変化していなかつた。

相変わらず魔物は唸り声を上げるだけ。観客達は楽しそうにそれを取り巻き、写真を撮つている。凄惨な様子はまるで無い。

「何だかほのぼのしているんだけど」「何だかほのぼのしているんだけど」「そうだね」

「襲つたりとかしないの？ あの魔物」

「まあ、魔物の考えは一つじゃないからね。あいつは別に人を襲おうと考えている訳じゃないんじゃないかな？」

法子の表情に微かに困惑が浮かぶ。

「じゃあ、良い奴なの？」

「良いも悪いも無いけれど。何にせよ、魔物は追い返さなくちゃいけない。前にも言つただろ？ 魔物って言うのは居るだけで場を汚染する。それが魔導師を呼び出して、魔導師が場を聖別して、最後に魔王が出現する。とにかく居るだけで悪い影響を及ぼすんだ」

「そういえば言つてたね」

「これ位、魔術に携わる者なら知つて当然だと思うんだがね」「だつて学校で習つてないもん」

溜息を吐いたタマを無視して、法子は剣を抜いた。周囲からおおという歓声が上がる。

ちょっと気分を良くした法子をタマがたしなめる。

「氣を付けるよ法子。あれは魔導師だ。どうやらこの辺りは大分汚染が進んでいたらしい」

「魔導師って強いの？」

「少なくとも普通の魔物よりは。周囲の汚染された魔力を吸い上げるから、魔力の量は桁違い。それにほとんどが固有の力を持つている」

「成程ね。一筋縄じゃないんだ」

「とりあえず君の力で解析してみたらどうかな？ それで大体分かるだろ？」「

促されて法子は魔物を見た。敵として認識する事で、解析が始まること。

『ウオーカキヤット

魔界のキューートな子猫。今流行のレトロなガーリースタイルは女子必見。

ちょっと長いこの爪で遠くの彼を引き裂いています。

Style : ガーリー & キューート

性格：おちやめ

彼氏：遠距離恋愛中

基本：正統派女の子』

解析が終わった法子は呆然とした。

「何これ？」

「いや、そう言われても」

「意味は分かるけど、意味わかんないよ。つていうか、女の子なの？ あれ」

「それはそうだろ。どう見ても。法子は異種族の性別はあまり分からぬのか？」

「分かんないけど。それより今のは何？ また妨害されたの？」

「とりあえず意味は分かるんだろ？」

「分かる事は分かるけど。でも今のは絶対に変だつた」

「なら中途半端に妨害されたんだろ？ 前の魔法少女みたいに滅茶苦茶な情報にならなかつたつて事は、恐らく君よりやや格下位の実力なんだろうな」

その言葉で法子の顔が輝いた。

「じゃあ、あいつ私より弱いの？」

「ああ」

「よつしー。そつと決まれば」

法子は剣を腰に据えてウォーキャットへと向かう。

「あ、おい、ちょっと待て」

諫めようとするタマの言葉も聞かずに法子は走る。

ウォーキャットは腕をだらりと下げて、尚も雄叫びを上げている。法子を見る様子すら無い。

行ける。と確信した法子は剣を力強く握り、ウォーキャットの目前で力強く大地を踏み締め、その刃に魔力を通し、

「防げ！」

タマの思念に反応して法子は咄嗟に刀を止めた。刹那、巨大な衝撃を受けて法子は跳ね飛ばされた。宙を飛ばされながら、法子がウォ

ークキャットへ視線を走らせると、腕を高々と掲げていた。着地した法子はようやく理解する。以前に迫った瞬間に、ウォーキャットが垂れ下げていた腕を振り上げて法子を跳ね飛ばしたのだ。刀が先に当たつたお蔭で飛ばされるだけで済んだが、そうで無ければ爪によつて切り裂かれていた。

「大丈夫か？」

タマの言葉に法子は頷いた。

周囲から喝采が湧いた。どうやら法子とウォークキャットの戦いを面白がっているらしい。法子は自分に注目が集まる事を嬉しく思う反面、危険な戦いなのに楽しむ観客を忌々しく思った。

法子が苛々としていると、頭の中にタマの小言が響いた。

「あのな、幾ら相手の力量が下だからって、攻撃してこない訳でも攻撃をくらわない訳でも無いんだ」

「分かつてるよ、そんな事」

苛々とする法子はタマの換言に不機嫌な調子で答える。

「分かつていいなら良いんだけどね。それでどうするんだい？」

「どうすれば良いの？」

法子が更に不機嫌な調子になつて尋ね返した。

「は？」

流石にタマも畠然とする。

「私は戦いの事なんて分からぬいもん。タマちゃんの方が詳しいでしょ？ どうすれば良いの？」

「いや、もつと自分で考えてくれよ」

「分かんないよ。良いから教えてよ。どうすれば良いの？」

タマは一度溜息を吐いて、

「甘やかしすぎたかな」「つるせー」

沈んだ調子で答えた。

「良いかい？ 今度だけだよ

「はいはい」

「まあ、見た所、相手は接近戦が得意みたいだ」

タマがそう言つた途端、ウォークキャットが腕を振り上げた。嫌な予感がして、タマの思考が止まる。

続いて、ウォークキャットは腕を振り下ろした。タマの中の嫌な予感が加速する。

「とにかくこの場から離れる！」

タマの叫び声が法子の頭に届いた後、一拍遅れて法子はその場から飛びのいた。法子が一瞬前に居た場所がひずんだ。何も無い空間に爪痕状のひびが入り、まるでガラスでも割れるみたいにはじけ割れた。

「何？ 今？」

「おそらくあの魔物の能力、というか技だろうね。離れた空間に自分の爪を届かせるんだ」

ウォークキャットがまた腕を振り上げた。法子は狙いを定めさせない様に動き回しながら反撃の機会を窺う。

「それで？ 向こうは接近戦だけじゃなかつたみたいだけど

「ああ、そうみたいだね」

「どうすれば良いの？」

「はあ、ホントちょっとは自分で考えてくれないかな」

「良いから」

「君さ、昨日覚えた事も忘れたの？」

「昨日？」

昨日教わった遠距離まで届く剣撃。確かにあれを使えば近寄る事無く相手を切り裂ける。

「でも相手も同じ様な事やつて来るけど勝てるかな」

「実力は君の方が上なんだ。同じ事をすれば勝てる」

「そつか」

法子は笑つて刀身に魔力を込め始めた。昨日覚えたての新しい技。新技のお披露目だ。出来れば派手に、カッコ良く決めたい。そう、漫画で良くある様に見開きの大ゴマを使う位のど派手さで。

「良いかい？ 狹いは正確に。辺りには人が居る。絶対に当てちや

いけない」

「分かってる。昨日たくさん練習したもん。はずさないよ」「法子は尚も笑って魔力を込め続ける。だがほんの僅かに緊張がよぎった。当てる自信はある。はずすとは思えない。けれど失敗してはいけないとと思うと、何だか薄ら寒い気持ちになつた。

法子は走り回り、飛び回りながら機を窺う。しばらくして狙いをつけ損ねたウォークキャットの腕が止まつた。好機とばかりに法子が込めた魔力を斬撃に換えて、ウォークキャットへと打ち放つた。

「馬鹿！」

斬撃は過たずウォークキャットを切り裂いて、法子はほつと安堵する。ウォークキャットは完全に切り裂かれ、胸と腹が分かたれ、体の右端が辛うじて繋がつているだけとなつた。

安堵した法子の視線の先で、ウォークキャットが傷を押さえてゆっくりと倒れていく。

「やつた！」

「良い訳あるか！」

「な、何で？」

困惑する法子の視線の先で、ウォークキャットはゆっくりと倒伏す。倒れた瞬間に土埃が舞い。すぐに風に運ばれていく。土埃が消えた向こう、血を噴き出して倒れるウォークキャットの向こうに、観客が居る。

「強く打ち過ぎだ、馬鹿者」

観客の中に子供が居る。血を流して倒れている子供が居る。

「あ」

倒れた子供の血だまりはどんどんと広がっていく。泣き声が聞こえる。母親らしき人物が泣きながら子供の傍らに座つて何かを叫んでいる。周りの人々が子供の元へ集まっていく。

法子は立つていられなくなつて、崩れ落ち、跪いた。だが誰もそんな法子の事など気にも留めない。胴体を切り裂かれた魔物にもものは興味は向けられていない。魔物を取り囲んでいた観客達の注目

は一心に傷ついた子供へと向けられている。

やがて子供は担架に乗せられた。緊張した空氣の中、群衆が割れて、子供は輪の外へと運ばれていく。まだ救急車は来ていない。どこかで応急処置をするのだろう。生死の境は時間に依つて区切られている。

運ばれしていく子供の傍を母親が泣きながらついていく。そのまま子供と共に群衆の向こうに消えるのかと思いきや、ふと母親が顔を上げて法子の事を見た。燃える様な目付きだった。怒りと悲しみと悔しさと恨みの籠った母親の痛々しい視線に晒されて法子は思わず目を逸らした。

逸らした先の観客達もじつと法子の事を見つめていた。  
視線を逸らす、その先にもまた目が。目が。目が。目が。沢山の  
目が法子の事をじつと見つめていた。

## そして誰もいなくなる

人通りの無い道に法子は着地した。そこで力尽き変身を解く。闇夜に溶ける様な衣装は、私服となる。法子は汚れる事も構わずに道の上で跪き無念そうに頃垂れた。

結局あの後、子供を斬った法子は再び戦う気力を湧かせる事が出来ず、魔物の方もまた深手に動く事が出来ず、膠着したまま、ただ周囲だけがざわついていた。そこにあの法子を負かした魔法少女がやつて来て、魔物を送還して喝采を浴びながら帰つていった。

法子は、魔物と魔法少女が消えてからしばらくの間動けずに呆然と何処でもない何処かを見つめ続けていたが、タマの言葉に促されて立ち上がり、取り囲む群衆の頭を越えてその場を離れた。

離れる際に、悪罵の声が響いたが、心あらずの法子にはその言葉は聞こえず、されど悪罵は法子の耳に届いて確かに心を抉つた。

そうして帰る途中、精神と魔力をすり減らし切つた法子は遂に力尽きて変身を解いた。誰も居ない闇夜の中で、街灯の頼りない硬質な光に照らされて、法子は呆けた調子から立ち直れずにぼんやりと呟いた。

「何でこうなっちゃうんだろ?」

誰にともなく吐き出した呟きは風に紛れて消えていつたが、タマだけは聞いていた。けれどタマは答えない。法子が何に対しても悲観しているのか掴み兼ねた上に、何を悲しんでいようと今は傍観に徹し、法子に成長してもらおうと考えていたからだ。自分で答えを見つけて自分で先に進む。法子はまずその当たり前の事が出来る様にならなければいけない。タマはそう考えていた。

今迄タマが変身させてきた者達は皆耐え難い情動を変身の核に据えていた。ある者は復讐の為に、ある者は友を助ける為に、ある者は一族を再興する為に。だからこそその目的の為に皆必死になつて変身し目的に邁進した。一方法子の情動はと言えば、きつい言い方

をすれば子供の気まぐれの延長である。その理由が悪い訳ではないが、必死になれるのであれば、やはり問題がある。

「」のままいけば、法子はタマが支えていなければ歩けない人形になってしまいます。

「結構さ、頑張ったんだよ。私にしてはかもしれないけどさ。魔法少女になれて嬉しかった。だから一所懸命頑張つてさ、でも全然上手くいかないんだもん。なんでだろうね」

法子が引きついた笑いを浮かべる。タマはそれに何も答えない。

「今日なんてあの子を」

一瞬言葉が途切れた。法子の目から涙が零れ落ちる。

「どうしよう、人斬っちゃったよ」

法子が必死に目を擦る。泣きじゃくる。

「死んじゃつたらどうしよう」

法子は自分の手を見つめた。直接斬つた訳ではない。それでも何故だかその手には斬つた時の感触が残っていた。生温い柔らかい物を斬る感触。それは単に料理の際に包丁で鶏肉を斬つた感触を思い出したものでしかなかったが、今だけは確かに子供を斬つた感触で、それを感じ続けている内に、自分の頭が狂っていく様な気がした。法子は思わず頭を振つて、手の感触を払いのけようとする。

タマは何も言わない。法子が人を殺したとしてもどうこう思わない。今迄の契約者の中にも人殺しは幾人か居た。法子がどんな事をして、どんな法律を破り、どんな倫理観を蹴り飛ばしても、タマは何も思わない。

「ねえ、タマちゃん、私どうすれば良い?」

ただこれだけはやめろと思う。法子はどうしてこんなにも自分を頼ろうとするのだろう。今迄一人ぼっちだったから、それを埋めた自分に殊更依存するのだろうか。それなら下手に励まそうとしてきた事は失敗だったのか。

悶々としつつ、タマは答えた。

「さあね。それは君の問題だろ?」

「冷たい」

法子の沈んだ言葉に苛々してタマは怒鳴った。

「勝手にしろよ。」

法子の呼吸が止まる。

「何でそなんでもかんでも私を頼るつとするんだー。」

言い切つてからタマは言つちやつたなあと思つた。多分法子は傷ついただろ。それでも自分の欠点に気が付いてくれれば。そう期待してタマが法子の言葉を待つてると、やがて法子が言つた。

「……ごめん」

そう謝つた。まだ何か言つたそにしてる。タマはもうしばり待つ。これから頼りつきりにならない。もつと自分の頭で考える。そつ言つてくれるだけで良い。そんな言葉を待つてい。

けれど法子の言葉はタマが期待したものとまるつきり違つものだつた。

「……私、魔法少女辞める

「は?」

「だつて、私、何やつても上手くいかないし、これ以上続けて良くなるなんて思えないし、自分で考えてなんて出来ないし、それに……それに入……斬っちゃつて、何だかやになつちやつた

タマは絶句した。本氣か? 一瞬、何か魔術に齟齬があつて、意志の伝達に不具合でもあるんじゃないかと疑う位に、信じられなかつた。

「だから魔法少女辞めたい。……あ、勿論、ずっとて説じないと思うけど、多分またやりたくなるだろつじ。でも……しばりへの間は魔法少女……辞めたい

法子が遠慮がちに伝えてくる。その思念を受けて、タマは駄目だと思つた。

「……こいつは駄目だ。」

「ね? だからじま、ひべの間だけ」

「分かつた」

「ホントに?」

「ああ。君との契約は打ち切らつ」

「うん! ありがと!」

嬉しそうに言つた法子へ、タマは溜息を吐く。

「やっぱり甘やかしすぎた」

申し訳なさに身を縮こまらせる法子へ、タマは尚も吐く。

「あんまり甘やかすのは良くないみたいだね。次の参考にさせてもらひよ」

「うーうん。さつとまたすぐに元気になると思つから、その時に、」

タマが不思議そつに尋ねた。

「その時?」

「え?」

「どうして君は次があると思つているんだい?」

「だつて……タマちゃんが次の参考について」

「私の次つて言つのは次の契約者つて意味だと思わないのかい?」

法子の思考が止まる。

「何か勘違いしてないかな?」

「勘違いつ……」

「私は人を変身させる使命を持つていてるんだ。変身しない人間の傍に居続けるなんてあると思う?..」

法子が手に握るタマを驚愕の顔で見つめた。

「で、でもタマちゃん」

「君が私の事を友達だらつと何だらつと思つのは勝手だ。私だつてそういう関係になる事にやぶとかではないよ。けれどね、いの一番はまず契約なんだ。一緒に居る者は契約者じやなきや意味が無いんだよ」

「タマちゃん待つて」

「それで君が私との契約を止めると誰のなら」

「違うよ。ほんの少しの間だけで」

「同じ事だよ。君は契約者じゃなくなるんだから」「タマちゃん、分かった。私が間違つてた。魔法少女辞めないから、だから」

必死に縋る法子をタマは冷徹に振り払う。

「君はヒーローになる事を望んでいたね。けれど今の君の姿はヒーローから掛け離れすぎている」

「「ごめん、タマちゃん、「ごめん」

「君の言葉にも一理あるよ」

皮肉気な笑いを伝えながら、止めの言葉を放つ。

「これ以上続けても良くなるなんて思えない。全くその通りだ」

タマと法子の繫がりが途切れた。意志伝達の魔術が途絶え、今迄伝わつて来ていた相手の精神が伝わらなくなつて、法子は狂わんばかりに剣の形をしたアクセサリーに縋る。

「「ごめん。ごめんタマちゃん。待つてよ。嫌だよ」

その時、忍び笑いが聞こえてきた。

振り返ると、一人の女性が法子を横切る所だつた。いつのまにか現れた通行人は法子の奇態を見て不気味さ半分おかしさ半分で、気味の悪い物を見る様な目をして笑つていた。目だ。また目が法子の事を見つめている。

法子は恐ろしさに駆られて、その場を逃げ出した。

しばらく走つて公園に着いた。あの四方を取り囲まれた誰も来ないはずの公園だ。まさしく、今その公園には誰も居なかつた。

ブランコに座つて、法子はまた剣の形をしたアクセサリーに目を落とす。

許して欲しい。また話して欲しい。けれど幾ら謝つても答えてくれない。タマちゃんは完全に怒つてしまつた。ならどうすれば良い？

タマとの最後のやり取りを思い出す。タマちゃんが望んでいたのは、私がヒーローになる事だ。私がヒーローになればきっとタマちゃんは許してくれる。

一瞬湧きかけた希望は、すぐさま、けれど、と沈められた。けれ

ど私はヒーローになれなかつた。強くなろうと頑張った。人を助けようと頑張った。けれどそれをした結果が、今なんだ。ヒーローにならうとしてもなれなかつたんだ。ならどうすれば良い？ どうすればヒーローになれる？

「分かんないよー」

法子が情けない言葉を吐きだして、ブランコをこぎ始めた。出来れば誰かに教えて欲しい。けれどいつも教えてくれたタマちゃんはもう居ない。相談出来そうな友達だつていない。

ふと最近話しかけてくれた人の事を思い出した。そうしてどうして自分がこの公園に来たのか何となく悟つた。いつもこの公園にやつて来る転校生。けれどその転校生も来る気配は無い。

思い出してみれば、あの将刀という転校生はいつも憎まれ口ばかり叩いてくる。今日だつて私の事を軽蔑していた。そう考えると話しかけてくれては来たけれど、きっと本当の所は私の事を嫌いなんだろう。当たり前だ。私に好意を持つ人なんている訳が無い。

後は家族。けれど家族だつて、もし家族じゃなければきっと私の事を相手にはしないだろう。特に弟なんて私の事を特に嫌いそうだ。私と家族は、家族という繋がりでしか繋がっていない。いや、もしかしたら、辛うじて繋がつてはいるものの、いつも私の事を邪魔だと思っているのかもしれない。

そう考えていくと、誰も居なくなつた。法子が相談できる相手は居なくなつた。

法子はブランコを強く漕いで、流れる涙を風で堰き止めようとした。勿論、そんな事で涙が止まる訳が無く、後から後から流れてくる。

一人ぼっちのはずつとだつた。だからいつもの日常に戻つただけなのだ。今迄だつて一人ぼっちを寂しいとは思いながらも、嫌だと思いながらも、それでも何処か慣れた自分が居て、一人ぼっちでも平氣だと思う自分が居た。

だからおかしかつたんだ。私に話し相手がいるなんて。タマと出

会つたこの数日間だけが異常だつたんだ。また元に戻るだけなんだ。  
昔と同じになるだけなんだ。けれど、それでも、その異常な数日間  
が、この上の無い幸福感を感じた数日間が、確かに法子を変えて  
た。いて、一人ぼっちな自分を思うと死にたくなるくらいに、嫌になつ

## 誰も見えない孤独な日常

朝起きて、いつもの通り用意をして、剣の形をしたアクセサリーを手に取つて、アクセサリーから流れて来るはずの精神が感じ取れなくて、そこでようやくはつきりと覚醒した。昨日の事を思い出して、朝の清々しい気持ちから急転直下、鬱々しくなる。

アクセサリーに幾ら話しかけても答えてくれない。何度謝つてもうんともすんとも言つてくれない。悲しくなつて目に涙が浮かんだ。昨日、あの公園からどう帰ったのかあまり覚えていない。泣きながらブランコを漕いでいたところまでは憶えているのだが、それ以降は曖昧だ。多分放心しそぎて、無意識の内に帰ってきたに違ない。

結局、タマは法子と繋がつてくれなかつた。タマはただのアクセサリーになつた。

憂鬱な気分を強くして外を見ると、晴れ晴れとした青空が広がつていた。外はあんなにも明るいのに、自分の心はなぜこれほどに暗いのか。

溜息を吐いて、昨日の事に思いを巡らせて、子供を斬つた事を思い出して、吐き気がした。近くのビニール袋を急いでとつて、その中に大きく開いた口を突き出す。幸いにも涎が少し垂れただけで、吐瀉する事は無かつたが、何だか酸っぱい味が口の中に広がつて、気持ち悪くなつた。

斬つた。人を斬つてしまつた。大きく広がつた血だまりが思い出される。慌ただしく運ばれしていく子供が思い出される。自分に向かれた恨みがましい目が思い出される。

殺してしまつた。人を殺してしまつた。そう思うと更に気持ち悪くなつた。涙は出ない。ただ吐き気が酷い。頭が痛い。壁にぶつかりたくなつた。体を傷つけたくてしょうがなくなつた。我慢できなくなつて、思いつき頭を後ろに引いて壁にぶつける。ぶつけると

後頭部に最初は生暖かい張り締める様な感覚。それがやがて鈍い痛みに変わつていった。けれどそれで何が変わる訳でもない。心も全く晴れない。

虚しいだけだつた。

部屋を出て一階に下りる。この期に及んで日常生活を送ろうとする自分が浅ましく感じられた。制服を着た自分が何だか許せない。けれど日常生活を捨てる勇気は、法子に無かつた。

リビングに入ると、弟は既に朝ごはんを食べ終わつていた。

「おはよう、姉ちゃん。昨日はどうだつた？」

弟の質問は姉が将刀と上手くやれたか気になつての言葉だつたが、法子には人を斬つた記憶が喚起された。顔を俯かせる。答える気力は無い。

弟はそんな姉を見て、どうやら将刀と上手くいかなかつたらしくと早とちつして、話頭を転じる事にした。笑顔に向けて、楽しそうに語る。

「そういうや、あの魔物騒ぎ大変だつたみたいだよ」

だが法子の反応は無い。その事に焦つて、弟は更に朗らかに言った。

「何だか、怪我人も出たらしくてさ。幸い生きてるみたいだけど、やっぱ姉ちゃんの言った通り、危ないんだな。姉ちゃんが止めてくれて助かつたぜ」

そこでようやく法子はのろのろと顔を上げた。

「生きてるんだ」

「え？ うん、危ない状態だつたけど生きてるつて、さつき一コースで言つてたよ。意識も取り戻したとか何とか。もしかしてその場面、姉ちゃん見てたの」

「うん、ちょっとね」

法子が元氣無さそうに答えるので、弟はそれ以上話題にするのを止めた。きっと姉はその誰かが怪我をしたところを見てショックを受けているのだろうと思い、無神経な話題を反省した。

「じゃ、俺もう行くから

弟は気まずくなつて、法子の脇を通り抜け、出て行つた。  
残された法子はほつと安堵した。どうやら一命は取り留めていた  
ようだ。人殺しにならなくて済んだ。応急処置を施した人や病院の  
人達に感謝する。

だがすぐに自分を戒めた。斬つた事には変わりない。命が助かつ  
たとはいえ、傷付けたのは確かなのだ。罪が軽減される事は全く無  
い。一步間違えば死んでしまつていた以上、人殺しの称号が晴れ  
る事は無い。

法子はともすれば嬉しくなる心を押さえつけながら、朝ごはんを  
食べて学校へと向かつた。

「いやー昨日は怖かつたな

「ねー」

「そういうや、あの斬られた子、どうなつたんだ」「うー

「命は助かつたみたいですよ」

「そつなんだ。良かつたな」

「おつす」

「お、武志、おはよー、残念だつたね。試合中止になつて

「別に大した大会じやなかつたから。楽勝過ぎてつまんなかった。

それよりお前等は大丈夫だつたのか?」

「ああ、あたし達はね。近付かなかつたし。摩子なんて真つ先にど  
つか行つちゃうし」

「だつて怖かつたんだもん」

「友達のあたし達を置いていくなんてねえ

「薄情ですねー」

「だからさつきから謝つてるでしょ。もう」

「分かつてるよ。あたしもむっちゃ怖かつたしね」

「私も腰が抜けてなかつたら逃げてたよ」

「そつかお前等が無事だつたなら。良かつたよ」

「武ちゃん、もしかして心配してくれてたの?」

「当たり前だる……特にお前は一応幼馴染だしな」

「愛だねー」

「愛だねー」

「愛ですねー」

「うつせえ」

「ありがとね、武ちゃん」

「え、いや、別に。じゃあ、俺行くから」

「愛だねー」

「愛だねー」

「だからお前等うつせえ」

「行つちやつた」

「ホント可愛い奴だな、あいつは

「あ、そういうえば」

「どうした?」

「昨日法子さんも居たけど、大丈夫だったかな?」

「らなあ」

「でも、重傷を負った子以外、特に怪我人は居ないみたいですし、

大丈夫だったんじゃないですか?」

「うん。でもまだ学校来てないし」

「いやに気にするね」

「思い出してみれば、法子さんでいつも一人だったでしょ?」

「それが?」

「何だか寂しそうにしてるし」

「まあね」

「きっとグループが固まっちゃってるから溶け込みづらいんじゃないかな。ほら、女の子って一度グループ作ると入れ変わり辛いでしょ?」

「そうかもしませんけど。それがどうしたんですか？」「うん、だからさ、私達の中に入れてあげられたらなって」

「お節介な気がするけど」

「入れてあげるっていうのも、何だか上からですし」

「そうかもしれないけど、でも」

「まあ、良いんじゃない？ とりあえず話しかけてみたら？ 嫌そ  
うなら、それつきりにすれば良いし、嬉しそうにしてくれたら、そ  
の時は仲良くなれば良いんじゃない？」

「そうですね。友達になれたらそれは良い事です。いつも本を読ん  
でいるし、何だか私と話が合つ気がします」

「だよね、だよね！」

「まあ、摩子がしたいなら、したいようにすれば良いんじゃない。  
あたしは別にどっちでも良いし」

「うん、じゃあ、早速話しかけてみるよー。」

「お、噂をすれば」

「とりあえず無事だつたみたいですね」

「ほら行つてきな」

「うんじゃあ、行つて……」

「あ、待つて。何だかすげえ落ち込んでるな」

「そうですね」

「もしかして昨日怪我したのって法子さんの知り合いなんじや  
」

「そうなのかも」

「あれは話しかけちゃまずいよね」

「知らないけど、少なくともあたしなら話しかけない

「だよね。今は止めとくか」

法子が酷く沈んだ様子で入つて来た時、その様子にクラス中のみ  
んなが注目した。法子が落ち込んでいる。あれはきっと一昨日の悪  
口を本当は聞いていたからに違いない。悪口を実際に言つていた者  
達は何も感じず無遠慮な視線を投げかけたが、それ以外の者達は何

だか申し訳なく思つて、すぐに田を逸らした。

法子はそんな形で注目を浴びている事なんて全く気が付かず、ひたすら下を向きながら自分の席についた。すぐに教師がやって来て、学校が始まる。

法子はいつもの様に俯きながら学校生活をやり過ごす。だがかつての諦念と羞恥の入り混じった無心に近い心ではいられなかつた。タマという話し相手が居たといつ事實は決して心から離れる事は無く、本を読んでも頭に入らず、寝ようとして周りの音が大きく聞こえる。孤独が酷く浮き上がって、法子は涙が出そうな位に悲しくなつた。

話したい。話し相手が欲しい。タマちゃんに戻つて来て欲しい。そう考え続けているのだけれど、そんな切なる願いももまた自分が一人ぼっちだと実感する為の材料にしかならず、法子はひたすらタマが戻つてくる事と今日という日が過ぎる事を祈りながら、俯いて学校生活を送り続けた。

その願いは半分だけ通じて、時は進み帰りの時間にさしかかり、最後の関門ホームルームが始まった。それも教師のちょっとした話が終われば解放される。そう考えて、法子は早く帰りたいと思い続けたが、事はそう上手くいかなかつた。

「あ、そうだ、学園祭もう一週間前だ。お前等そろそろ準備しつけよ」

教師がぶつきらぼうな調子で語りかけてくる。

法子は嫌なイベントが迫つて来たなどやさぐれた気持ちになつた。今の最低に沈んだ気持ちで孤独な学園祭を迎えたたら死んでしまうのではないか。

「出し物は前に決めたよな。えーっと……何だつたかな?」

教師の恍けた発言に、周囲が一斉にカフェだと突つ込む。法子にはその予定調和なやり取りがうつとうしくてたまらない。

やさぐれている法子を余所に、学園祭の話がどんどんと纏まっていく。中にはめんどくさそうな人も居るけれど、その人も含めてク

ラス全体は楽しそうに、学園祭に向けてはしゃいでいる。

ただ一人自分だけが何も喋らずに一人ぼっちで俯いている。本当は周りと同じ様に楽しくやりたいのに。本当は周りの人達と親しくしたいのに。

いつもクラス一丸となる様なこういったイベントは嫌で嫌で仕方が無かつたが、今日は何だかいつもより色々と考えてしまう。どんどん嫌になる。その原因であるタマの失踪を思うと、更に嫌になった。

法子は文化祭に向けたやり取りを聞きながら胸の奥に何か重い者が詰まつていく様な心地がしていた。

きっと私がこんな風にみんなで楽しくする事なんて一生ないんだらうつな。

## 英雄になりたくて

時は早いもので、ついこの間、一週間前に迫ったと謳われていた文化祭がもう明日に控えていた。法子のクラスの準備は着々と進み、既にほとんど出来上がっている。先程最後の看板を作り終えて、後は片づけをしつつ、残りの「ま」まとしたところを飾り付けているところだ。

この一週間前、法子の心境も様々に変化した。法子の様子は以下の通りとなる。

初めの一日はひたすら落ち込むだけだった。初日はあのホームルームが終わってから、ずっと暗澹とした想像をしながら、自分の駄目さ加減を呪つて、家に帰り、何もする気が起きずにそのまま寝た。二日目、ほぼ初日と一緒に、ホームルームが終わって後に学園祭の準備があつた。ほとんどクラスとの繋がりが無い法子はまともに立ち動く事も出来ず、ほとんど役に立つ事が出来ず、その辺りをうろつりしながら、手持無沙汰に仕事をしているふりをしていた。クラスの意見は、この前の陰口で傷ついたから仕方が無い、やつぱりあいつは役に立たないクラスのゴミといつ一つに分かれた。それらの評価を法子はほとんど聞かなかつたが、最後の最後、丁度帰ろうとした時に、あいつ本当に使えないな、そんな言葉が聞こえて法子は思わず振り返つてしまつた。意地の悪そうな顔達が法子を見て笑っていた。法子は逃げる様に走つて帰つた。何もする気が起きずそのまま寝た。

三日目、タマを失つて沈む気持ちに加えて、更に学校に行きたくないという憂鬱までが混じつて、朝からどん底に陥つていつた。だがそんな強い気持ちを持ち続ける事は出来ず、底まで来たのなら後は上るだけで、登校している内に法子の心境に明確な変化が表れる。前日まではタマの事を考えても、ひたすらタマが居ない事に沈むだけだったが、その日はどうすればタマは戻つて来てくれるだろうと

考える様になつた。必死に頭を働かせてタマとの会話を思い出しながら、タマが戻つて来てくれる為の方法を考え、学校に着く頃になつてとりあえず自分の欠点を直していくこうと結論付けた。欠点とは何か。それこそ数えきれない位にあるのだが、法子はその中で一番氣にしている事、非社交性を治そうと考えた。そうだ、クラスの人と話してみよう。私が他の人と喋れる様な位にまともになつたらタマちゃんは戻つて来てくれるかも知れない。そんな風に心を弾ませて法子は教室へと向かつた。まずは挨拶を。心に久しぶりの火を灯らせて、教室のドアを開き、そして大きく息を吸つて、大きな声で朝の挨拶を言い放とうとして、結局声を出せずに自分の席へと座つた。駄目だつた。話そう話そうと強く思うのだが、実際に行動に起こす事がまるで出来ない。結局、何度も話そうとしては諦めて、放課後まで誰とも話せなかつた。学園祭の準備では相も変わらず積極的な参加は出来ないが、せめて少し位は役に立とうと、前日よりは大分働いた。だが頑張つたところで、端から見れば結局少し役に立つた位であり、ついでに手伝いの中で相手から話しかけられても法子は喋る事が出来ずに黙つていた為に、クラスの評価は前日よりも更に明確に分かれた。辛い事があつたのに頑張つてくれている。今更何やる気出してんだよ。同情と嫌悪の割合は全く変わらないが、前日よりも法子に注目する人数が増えて、票かは両極端になつた。教室から向けられる一種類の視線。法子がもしその視線に気付いたらいつもの如く後ろ向きに捉えて落ち込んでいたであろう。だが幸いにも法子はその視線には気が付かず、ついでに心にはほんの僅かながらも達成感が湧いた。今日は頑張つた。これならもしかしたらタマちゃんも。そんな期待をして家に帰るのだが、結局タマは反応をみせてくれず、がつかりしてまた沈んだ気持ちになり、そうして前日と同じで何もする気が起きずそのまま寝た。

四日目、ヒーローが気になつた。別れる際にタマは法子がヒーローになれないと失望していなくなつた。ならヒーローになればまた戻つて来てくれるんじゃないだろうか。そう考えると、それが答え

の様な気がした。どうしてこんな簡単な事に気が付かなかつたんだろ？。答えを見つけたつもりの法子は何処か嬉しい気持ちで学校へと向かつた。学校での様子は前日と変わらない。文化祭の準備もほぼ同じ。今日は加えてヒーローについて考えた。ヒーローにはどうすればなれるのだろう。帰り道の途中、ヒーローの条件とは強さと優しさではないだろうかと思いついた。誰にも負けない強さと人を助ける優しさ。そうだ、そうに違いないと勇んで、法子は人助けをしようと辺りを見回しながら家に帰る。だが特に困っている人は見つからず、最終的に家の前に落ちているポイ捨ての空き缶を拾つただけで終わつた。優しさが駄目なら強くなろうと、腕立て伏せを開始し、三回目で力尽きて、疲れ切つた法子はそのまま寝た。

そうして今日、五日目、クラスの人々はほとんど帰り始めて、残りは有志達だけが残つてゐる。法子もこそそとした様子で家路についた。帰り際に、ホントキモいよな、あいつ、という声が聞こえたが、今日は振り返らなかつた。顔が熱るのを感じながら、急いで教室から離れた。結局この一週間、タマは反応してくれなかつた。もしかしたら今持つてゐるのは既に何でもないブレスレットに過ぎずタマはもう別の所に行つてしまつたのではないか。そんな不安が心をよぎる。だがそれを考へても仕方が無い。今はとにかく自分が出来る事をするだけだ。

どうすればタマは戻つて来る？ 再び頭を巡らせて、ふと思いつく。アトランという巨大なショッピングセンターがある。最近出来たその商業施設には国内最大の魔術専門店がある。そこにタマは行きたがっていたのではなかつたか。もしかしたらそこへ行けばタマが興味を持つて戻つて来てくれるかもしだれない。

はつきり言つて、人通りの多い所に行きたくは無かつたが、タマが戻つて来る為になら仕方が無い。法子は意を決して道を変えた。しばらく歩いただけで、法子は死にそうになりながらそちらの石壙に手を掛けた。まだ着かない。一体何処にあるのだろう。情報に疎い法子はショッピングセンターがどの位離れているのか知らなか

つた。近いとだけ聞いていたが、それは専用のバスや車で行く場合の話であって徒歩で行く距離ではない事を知らなかつた。荒い息を吐きながら、そもそも道順すら知らない事を思い出して絶望的な気持ちになつた。

ふと近くから人ごみ特有のざわつきが聞こえてきた。その賑やかさに思わず踵を返したくなつたが、踏みどどまる。ショッピングセンターに行けないまでも人通りの多い所に近付いてみよう。そんな決意が心に湧いた。そうすれば何かが変わる気がした。

一步踏み出そうとした時、

「あ、お前」

傍から聞こえてきた呼びかけの所為で足が止まつた。聞き覚えのある声だ。見れば、そこに転校生の野上将刀が居た。

将刀を見た瞬間、法子は苦手だなと思つた。思った瞬間、その思いは爆発的に広がつて、法子の中で将刀に対する明確な苦手意識が育ち上がつた。

「……野上君」

辛うじて法子は言葉を発する。法子が名前を呼んだのは決して話し合いの為の緩衝剤ではない。それは相手に主導権を持たせまいとする、拙い隔意だ。相手に一方的に喋らせればどんどんと相手の会話は調子上がり、それに比例して自分の苦痛が増えていく事を法子は知つていた。けれど法子の隔意は何の効力も無く、将刀は気安い応答と受け取つて、朗らかに笑つた。

「どうしてこんな所に？」

友達が居なくなつて寂しくて、だなんて言える訳がない。しかし咄嗟の嘘も思いつかずに、法子は顔を伏せた。

「そっちこそ、どうして？」

「俺、は……まあ、何となく」

将刀が歯切れ悪く答える。

「じゃあ、私も何となく」

法子も不愛想に答えた。

沈黙が下りる。

思いのほかに弾まない会話に困惑いつつ、将刀は気まずくなつた雰囲気を変える為に話頭を転じた。

「そういえば、文化祭は明日だな」

将刀は無難な話題をだしたつもりだったが、法子が文化祭に感じる印象は苦痛と無関心しかない。法子は笑顔で文化祭の話題を出した将刀に怒りすら感じて、押し黙つた。

将刀は法子が話題に食いついてこない事を訝しみつつも、まさか怒っているとは思わず、何とか法子の琴線に触れる話題を手繕り寄せようとする。やはり笑顔のまま将刀は言った。

「そういうや、文化祭の準備頑張ってたな」

将刀は法子の振る舞いを頑張りと見ていた方で、単純な励ましのつもりだったのだが、後ろ向きな法子には将刀の言葉が皮肉にしか聞こえない。瞬間、沸騰した感情のまま叫ぶ。

「分かつてるよ！ あたしが役に立つてないってのは！ みんなに嫌われてるのも分かつてるから！ いちいち言わなくても分かつてるよ！」

「な！ そんな事言つてないだろ！」

「うつさい！ 自分でも分かつてるよ、こんなんじや駄目だつて！ でもしあうがないでしょ！ どんなに頑張つたつて人並みに出来ないんだから！」

急な剣幕に圧されて何も言えずにいる将刀へ、法子は尚も言い募る。

「良いよね、野上君はさー、楽しいんでしょ？ 生きてて！ 明日の文化祭だつて楽しみなんだよね？ でもね、世の中にはあんた等みたいな恵まれた人間ばかりじゃないの！ 何をしたつて、皆に嫌われる人が居るの！ 明日の文化祭だつて、生きてる事だつて辛くて仕方が無い人が居るんだつて分かつてよ！」

ぶちまけられた一方的な物言いに今度は将刀が逆上する。

「お前な！」

そこで感情が高ぶり過ぎて一瞬将刀の声が詰まる。突然の将刀の大声とほんの一時の悲しげな間に法子は虚を突かれた。そこに将刀の言葉が突き刺さる。

「そんだけ後ろ向きに考えてれば、誰だってうつとうしいと思つて決まつてんだろ！ こつちが楽しくしようとしてるのに、そつちがそれをぶち壊して、しかもそれを他人の所為にして不満に思つて！ 何で嫌だと思うなら自分を変えようとしないんだよ！ 頑張つてるつて言つなら、どうして物事を前向きに捉える努力をしないんだよ！」

それはまさしく法子が口頃から自分に対して感じている評価その物だった。法子は何も言い返せずに、目に涙を浮かべて顔を俯けた。法子の頭の中に言葉の衝撃が鳴り響いている。視界がゆっくりと揺れて安定しない。首筋から悪寒と熱が奇妙に綺い交ぜになりながら這い上がって、息が荒くなる。法子はよろめいて、後ずさつた。もう将刀の声は聞こえていない。

「あんたはみんなに嫌われているつて言つていいけれど、そんな事は　あ、おい！」

法子はその場に居られなくなつて、背を向けて人通りの多い道へ走り出た。将刀の言葉など聞いていられる余裕は無く、法子は涙をこぼしながら、後ろ向きな自分を責め、それを指摘した将刀を責め、自分の周囲を責め続けて、人通りの多い道を駆け抜けた。先程の将刀の言葉に、自分という存在と今迄の生き方との一週間の頑張りを否定された気になつて、法子は心を瓦解させながらひたすら頭の中で呟き続ける。

嫌だ、もう全部嫌だ。

直ぐに息が切れて走れなくなり、丁度良く在った時計台を囲むベンチに腰かけて、ふさぎ込んだ。

嫌だ、嫌だ。

段々と思考は曖昧になり、もう何が嫌なのか明確に思い浮かべぬまま、むしろ明確な思考に結びつかぬ様に頭の中を塗り潰すそうと、

嫌だ嫌だと思い続けた。

そこに声がかけられた。

「ねえ、一人？」

見上げるとスーツを着た中年男性がにやにやと笑いながら法子の事を見下ろしていた。脂ぎった毛深い手が法子の肩を掴む。

「ちょっと見ててよ」

そう言って、中年男性はもう片方の手で懐から銃を取り出して、己のこめかみに当て、引き金を引いた。音も無く中年男性の頭が破裂して消えた。

狂っている。

狂っていた。

頭の破裂した男は手を鳥の様に羽ばたかせ、往来にぶつかりながら何処かへと消えていった。ぶつかられた一人の女性は、猿の様な声を上げながら、近くで店の呼び込みをしている男性に掴みかかる。それをはし立てる男達が手に手に簾を掲げて踊っている。別の場所では電柱に掴まつてけたましく笑う女が居る。それをしきりに眺めながら何やら画用紙に絵を書きなぐつている男が居る。他を見れば、裸になつて抱き合つ姿も見えた。嘔吐しながら転げまわっている者も居る。

狂っていた。

狂っている。

恐ろしくなつて逃げようとした時に、横合いから腕を掴まれた。さつき頭を破裂させた男だつた。男は無くなつた頭に満面の笑みを浮かべて、優しげに語りかけてきた。頭が無いはずなのに、何故かそこに笑顔が見える。

「さあ、君も一緒に」

法子は悲鳴を上げて掴む手を振り剥がそうとするが、力が強く引き剥がせない。男は蛆の湧いた瑞々しい首の断面を法子に近付けてくる。

法子がもがく。男は放さない。

助けて。思わず法子は祈つていた。具体的な姿にではない。イメージは湧いたが、そのイメージに明確な姿は無かつた。浮かんだのは、自分に語りかけてくれた刀の優しい声。助けてともう一度繰り返す。だがタマは反応しない。男の傷口が迫つて来る。

その時、乾燥した木の枝を複数まとめて押しつぶしたような、そんなひしゃげた音が響いた。目の前の頭の無い男の頭があるはずの

場所に、一本の矢が突き立つていた。

次の瞬間に、世界がひび割れ、崩れ落ちる。気が付くと何ら変わりの無いネオンの灯った繁華街。ただ通行人は居ない。その代わりに、騒がしく行き交う人々で溢れているはずの道路には、今沢山の人が倒れている。そして法子の目の前にピエロが立っていた。頭には矢が突き立つている。

「ひひ、僕の邪魔をするのはだあれ？」

ピエロが奇妙にねじくれた動きで横手を見上げた。法子の視線もそれに釣られる。

ビルの上に誰かが立っていた。良く見えないが、人の様だ。黒い姿が闇夜に滲んで、おぼろげにしかその姿を把握できない。

その人影が消えた。法子がビルの上の人影を見失った瞬間、法子の体に衝撃が走った。続いて宙に浮く心地がして、気が付くと元居た場所から遠く離れていた。遠くにピエロが見える。訳が分からない。足がつかずに混乱した。

「大丈夫か？」

法子へ優しい声がかけられる。その声の出所は法子のすぐ前にあって、法子に技を教えた漆黒の騎士が西洋兜の合間から見える口元を微笑させていた。

「大丈夫……です」

熱に浮かされた様にはつきりしない頭で、法子はそれだけ答えた。騎士は頷くと、法子を地面に下ろして呟いた。

「危ないからそこから動くな」

剣を構えてピエロへと向ぐ。ピエロが腹を抱えて笑いながら、近くに転がる人間を蹴り上げた。その瞬間、騎士が消えた。

ピエロが宙に浮かぶ。一拍遅れて、ピエロが居た場所に、剣を払つた状態の騎士が現れ、大きな破裂音がした。

それが、剣で切ろうとした騎士と回避したピエロの一瞬の攻防だったと法子が気付いた時には、ピエロは近くのビルの中へと逃げ込み、騎士もそれを追つて消えた。

ビルの奥から笑い声と金属音と爆発音が断続的に聞こえてくる。しばらくして、ビルの窓という窓から何かが流れ出てきた。それは血の様に見えた。鉄鎧の匂いが外にまで充満する。

やがてビルの内部が光り輝き、しばらくしてから騎士が飛び出してきた。そうして法子の前に着地する。

「とりあえずあの魔物は帰した」

騎士がそう言つた。法子は安堵して騎士を見上げた。人と面と向かえない法子だが、兜に隠れて目が見えないから、平氣でその顔を見る事が出来た。

「で、何で君はここに居るんだ？」

突然、騎士がそんな事を言つた。法子はその意図が読み取れずに何とも答えられない。

「中……いや、君はまだ学生だろ？ 夜にこんな所に来たら危ない。早く帰……りなさい」

心配してくれてるんだ。厳めしい鎧を着たまるで物語に出てきそうな騎士が、そんな素敵な存在が自分なんていう惨めな存在を心配してくれていると思うと、法子はそのちぐはぐさがおかしくて、そして嬉しかった。

「はい、どうせ用事なんかなかつたから」

「ならどうして」

「それはアウトレットに行こうとしたけど、どう行けば良いか分からなかつたから、とりあえずここに」

高揚した気分の所為でそこまで言つてしまつてから、自分がとても恥ずかしい事を言つていてる事に気が付いて法子は口を噤んだ。笑われるかなと思つた。けれど騎士は微笑を崩さず、そつかどだけ言つて法子に背を向けた。

「とにかく早く帰つた方が良い。じきに喧起きて混乱するだろ？ か

ら

その言葉を残して、騎士が闇夜に消えた。

法子が空を見上げていると、辺りからうめき声が聞こえてきた。

確かに騎士が言つた通りの様だ。混乱する前にと、法子は急いでその場を離れた。

家への帰り道、法子はぼんやりと空を見上げながら、騎士に助けられた事を思い出していた。カッコ良かつた。悪党から人々を守るヒーロー、まさにそんな感じだった。まさしく法子がなりたい理想の姿だ。

あんな風になれたら良いな。その為にどうすれば良いのかは分からぬ。けれど何となく具体的な目標が見つかって、法子は満足していた。いつそあの騎士に弟子入りしようかと考える。勿論。そう簡単に会う事は出来ないだろうし、会えたとしても師事を申し込むなんて、内気な法子には夢のまた夢だろうけれど。

人を守るヒーロー。誰かが危険な目に遭つていたら、真っ先に駆けつけて守つてあげる。数あるヒーロー像の内の最も単純で最も普遍的な姿だ。けれどその見飽きたヒーロー像が今の法子にはとても新鮮に感じられた。心の底に確かに灯る英雄の形が出来た。

朝、昨日の事がニュースでやつていた。怪我や意識の混濁等々の軽症者が多数に、重傷者が幾らか。最近の魔物の事件ではかなり大規模な被害だったと告げている。魔物の出現は増え始めると加速度的に増加するので一帯に住む人々は注意するよう呼びかけている。

そんな大事件だったのかと今更ながらに恐ろしくなった。だが法子の顔はにやついてしまう。騎士に助けられた事と明確なヒーロー像が浮かんだ事を思い出して。今日と明日は憂鬱な文化祭だけれど、その一つの思い出だけで頑張れる気がした。

準備をして外に出ると、寒さが昨日よりも一段と強まっていた。寒さに体を縮こまらせながら、さつきの嬉しさは何処へやら法子は今日の事を思つて憂鬱な気持ちになる。

クラスの出し物における法子の役割は裏方だ。料理を作つたり配膳したり。外に出て接客をするウェイターやウェイトレスに比べれば随分マシだが、それでも自分に務まるとは思えなかつた。何なら

良かつたのかと言われても、出来ると思える事は何も無く、結局の所、文化祭に参加する事 자체が嫌なのだ。

更に出し物への参加は交代制で、3時間置きの三交代。つまり6時間の暇がある事になる。出し物が嫌な原因は結局自分のミスが恐ろしいだけで万が一にでも仕事をこなせればやり過ごす事が出来るのだが、暇な時間となると周囲からの重圧が原因となるので逃れる事が出来ない。その暇な時間をどう過ごして良いものか、法子には大変厳しい問題であった。

友達が居ないので文化祭を楽しむという選択は難しい。文化祭の賑やかな雰囲気の中、たった一人で6時間もうるつくというのは、自分の孤独な惨めさが際立つて、想像するだけで吐き気がした。ましてその様子をクラスの誰かに見られる可能性が非常に高い。その事を種々笑われるを考えると地獄以外の何物でもない。何処かに隠れて時間をつぶすと言うのも6時間というのはネックだし、学校では机に突っ伏して動かない法子には隠れられる場所が分からぬ。

後は学外に逃げるという手もある。人の出入りは多いだろうし、買い出し等で生徒の出入りもあるだろうから、それに紛れて外に出て、そのまま時間を潰してしまえば良い。思いついた案の中ではこれが一番気楽に思えたが、ただ一点、本来であれば学内で過ごしていなければいけない時間を学外で過ごすという抵抗感がどうしても拭えなかつた。他人との関わりを避ける法子にとって、衝突とは最も忌避すべき事柄であり、その為にもルールはやり過ぎな位に守る方なので、さぼるのはどうにも後ろめたい。

どうすれば良いか。法子の今日の当番は正午から三時まで。つまり文化祭開始と同時に暇という災厄が降つてかかる事になる。時間は無い。どうにか身の振りを考えなくちゃと法子は無闇に気合を入れた。

「駄目だった」

「やっぱりねえ。代わってもらおうなんて無茶だよ

「今日になつて時間変更するのはきつこでしょ。みんな色々約束があるだろ?」

「分かつてゐよ。でも、もしかしたらうて思つてさ」

「ま、諦めなよ。わざわざ法子さんと一緒に時間にしなくたつて、三交代の内の一つが自由時間なんだから、結局三時間は自由時間が被るでしょ? だからその時にさ」

「駄目。きっと法子さん、もう片方の二時間がきつとす」  
「寂しいと思うもん」

「法子さんでいつも一人ですし、あまりそういうの感じないんじやないですか?」

「そんな事無いよ。いつも寂しそうだし。昨日だつて文化祭嫌そうだったたし。やっぱり文化祭は誰かと一緒に回らないと乐しくないもん」

「幾らなんでも余計なおせつかいだと思つけどなあ」

「それでも良いよ。私は私が嫌だから、法子さんを一人にしたくなんだもん。自分勝手に法子さんと一緒にになりたいの」

「別に良いけど、何かその言い方にやらしいな」

「こつちは真剣なの!」

「分かつた分かつた。何でそんなに入れ込んでるのか分からぬけど、摩子の為にお姉さんが一肌抜いて」  
「やんしじう」「どうするの?」

「代わつてやるよ。朝からだから」

「代わるも何も私と同じ時間でしょ?」

「そうじゃなくて、私と法子さんが代われば、法子さんがお前と一緒に時間になるだろ」

「あ、そっか」

「法子さんは多分他の人と約束とか無いだろうし、時間が変わつても大丈夫だろうから」

「分かんないけど、法子さんに伝えてみる」

「頑張りな、お節介な摩子さん。それから後で何か奢れよ?」

「任せて！」

法子が装飾された教室のドアを開けると、駆け寄つてくる人影があつた。法子が身を引いて道を譲ろうとするが、あらう事が目の前に立ち止まり満面の笑みを浮かべてきた。

「おはよー！」

法子は突然の事に訳が分からず何も考えられなくなる。クラスの人が自分に話しかけてくるなんてありえない。あまりの事に法子は挨拶すらも返せない、

「あのや、ちょっと法子さんにお願いがあるんだけど良い」

法子が首を傾げる。その首を傾げるという行為が相手の言葉に対する反応なのか、緊張した体が痙攣した結果なのか、法子自身にも分からぬ。

「法子さん、12時から3時までキッチンだったでしょ？　でも変更して欲しいの。9時から12時までホールに。良い？」

法子が頷く。

法子にとって相手のお願いを断る事は相手にいざれ復讐されるという事であり、そんな事は御免なので、法子に相手のお願いを承諾しないという選択肢は無い。だから無意識の内に頷いていた。

「良かつた！　じゃあ、私も同じ時間だからよろしくね」

そう言って、駆け寄つて来た生徒は忙しそうに何処かへ行つてしまつ。法子はしばらく呆然とそこに立ち尽くして、ようやく頭が働き始めた頃に、相手の名前が分からぬ事に気が付く。それに気が付いた途端に脳髄が目まぐるしく働き始め、今のやり取りが非常に重たいものだと気が付いた。

つまり自分に接客をやれという訳だ。でも、自分が接客なんか出来る訳が無い。不可能だ。まともに人と喋れないのに、どうして接客なんて出来るだろう。

でもそれは良い。良くないけれど、一先ず脇に置いておく。

それよりも気になるのが、どうして今の子は急に時間変更を告げ

て来たのかだ。自分に対する嫌がらせでは？ そんな嫌な想像が浮かんだ。

全員の時間が変更になつてゐる事を願いながら、法子は布で仕切られたキッチン側へ行く。そこには全員のシフト表が張られている。それには法子ともう一人だけに時間の修正が行われていた。お互いの時間と役割を交換した形になる。

それはどういう事か。

間違いなく、交代は法子を標的にしたものだ。もう一人が交代を望んだ場合でも、その交代相手に法子が選ばれた理由は、こいつだったら替えてしまつても良いという、ある種の無関心な恶意に基づいた結果となる。でもそれはまだマシだ。そういつた無関心な恶意に晒されているだろう事は、常日頃から想像していた事で、準備が出来ているだけに衝撃は少ない。

最悪なのが、法子を交代させる事が目的だった場合だ。それはつまり、積極的な恶意である。日頃の行いが原因なのか、文化祭の準備での使えなさが原因なのかは分からないが、法子に恶意を持つ者が、きっと務まらないであろう接客役にわざと据えたに違いない。しかも一番早い時間にして、心の準備も何もさせない様に。

一瞬視界が暗く陰つた。倒れそうになつた体を踏ん張つて支えながら、法子は泣き出したいのを堪えて、キッチンから出る。カーテンを潜ると教室の中は机と椅子が整然と並べられている。客はまだやつて来ていない。代わりに生徒達が思い思いの場所に座り、立ち、だらけた調子や高揚した様子で文化祭の始まりを待つてゐる。

法子はその間を通り、教室の外へと向かう。目的は無い。一人になりたかった。この教室に居たくなかった。だが外に出る為の引き戸に生徒が数人、まるで塞ぐ様にして立ち話をしていた。行きづらかつた。塞ぐ者達は以前法子の事を大声で批判してゐた者達だつた。益々通り抜ける事が出来ない。法子は途方に暮れて、立ち止まる。

その時、教室の戸が開かれた。

登校時間で出入りの多い今、誰もそんな事気にしない。目もくれ

ない。戸の前に立っていた者達と戸を見ていた法子だけがそれを見た。

ピエロが立っていた。それはまさしくピエロ。何処からどう見てもピエロ。そして、昨日大量の負傷者を出したピエロの魔物と同じ姿をしていた。

昨日の事を思い出して法子はすぐみあがる。魔物だ。どうしてここに？ そんな疑問が湧く。だがそれだけだった。逃げる事も、周囲に避難を促す事も、魔物に立ち向かう事も出来ずに、法子はただその場ですくみ上つて動けなかつた。

一方で扉の前に立っていた生徒達は入つて来たピエロを見て、文化祭の出し物だと思った様で、おかしそうに笑いながらピエロの事を取り巻いた。

「笑うな」

甲高い声が響く。ピエロの言葉だった。その言葉を聞いたピエロの周りの生徒達は更に大きな笑いを響かせた。

次の瞬間、ピエロの前に立っていた一人が吹き飛んだ。血を吹き散らしながら教室の中を飛び、ガラス窓に激突して突き破り、ベランダに飛び出した。ピエロが一瞬前に生徒が立つていた場所、吹き飛んだ生徒の背から見積もつて腹の辺りの高さに、拳を突き出していた。

唐突な非日常に、教室中のざわめきが止まる。ピエロの周りに集つていた生徒達が後ずさりをし始めた。客席側に居る生徒達がピエロに視線を送り始めた。キッチン側の生徒達が物音を聞き付け、客席側を覗き始めた。

そして悲鳴があがつた。まず初めに、客席側の生徒達がキッチン側から覗き込む生徒を突き飛ばしてカーテンの奥へと逃げ込み始めた。続いてピエロの周りを取り巻いていた生徒達がその後に続いた。最後にキッチン側から覗いていた生徒達が慌ててキッチン側に引っこみだ。最後の最後に法子が呆然としたまま、客席とキッチンを区切るカーテンをぐぐる。

カーテンをぐぐる瞬間、背後を振り返ると、ピエロは法子の事など気にせずに、ランダに倒れた生徒へ近付いていくところだつた。きっと酷い事をしようとしている。きっと酷い事になる。

怖かつた。これから行われるだろう事も、自分が標的になつてそれと同じ目に遭わされる事も。食い止めたいという思いも微かにあつた。だがそれ以上に怖かつた。見ていられなかつた。

法子は振り切る様にしてカーテンを閉めて、キッチン側を走る。廊下に通じる扉を目指す。キッチンにはもう誰も居ない。みんな逃げてしまつてゐる。廊下の方から悲鳴が聞こえ、それが次々と連鎖した。きっと逃げた人達の混乱が伝播したのだ。そう思つた法子は急がなければと焦つた。このままではきっと、学校の外に逃げるまでの道程は大混乱になる。その混乱に阻まれてゐる間にピエロが次の標的を探しに来るかもしない。もしそうなれば混乱で逃げられない中で、襲われる事になる。その前に何とか逃げなくてはいけない。

法子が急いで戸に向かおうとした時、甲高い金属音が響いた。音の出所は足元で、見れば剣型のブレスレットが下に落ちていた。手首のブレスレットが落ちたのだ。だがそんな事に構つていられない。今は何よりも逃げる事が優先だ。ブレスレットは後で取りに来ればいい。

ふと頭の中に英雄という事が閃いた。けれどそれはすぐに霧散して、しかし確かに法子の心に明確な重さを残していった。ここで逃げては取り返しのつかなくなる予感があつた。

法子の足が止まる。法子の頭は呆然としていて、今自分が何をしているのかもわからない。ただ逃げなくちゃと頭の中で繰り返しながら、体だけは無意識の内に立ち止まつっていた。

しばらく法子はその場に止まる。その背後、カーテンの向こうから何かを引きずる音がする。きっとピエロが生徒を引きずつてゐる。それが分かつて、法子の中に言ひようのない焦りが湧く。英雄という言葉が再び頭の中に閃いた。

法子の足が動いた。

教室の外へ向けて、法子は再び走り出した。今の自分に何が出来る？ 何も出来ない。助けに行つても返り討ちに遭うだけだ。二人共死んでしまう位なら、一人だけでも生き残った方が良い。誰だって同じ様にするはずだ。だから、だから逃げても悪くない。法子はそう心の中で念じながら、背後の物音を聞かない様に必要以上に足音を立てて、教室の外へと逃げ出した。

背後から獣の唸り声の様な悲鳴が響いた。

## 人々は歓喜で以つて英雄を称える

凄絶な悲鳴に法子の足が止まる。教室の中からだ。さつきの生徒の悲鳴だ。何をされているのか分からぬ。あるいは殺されてしまつたのかもしない。分からない。分からないから恐ろしい。

恐ろしさで足が震え誰も居ない廊下で立ち止まり、その瞬間法子は何もかもが嫌になる。

何もかもが嫌だ。教室の中で行われる惨劇も魔物が次々と現れる異常事態も、ピエロの様な恰好をした魔物も自分の事を非難した生徒も、誰も居ないこの廊下も沢山の人間に溢れるこの学校も、学校で行われる学園祭もそれに参加する事を憂鬱に感じる自分も、誰とも喋れない自分も誰とも関われない自分も、タマに愛想を尽かされた自分も人を傷つけてしまった自分も、いつまでも落ち込んでいる自分もきっと立ち直れないと諦めている自分も、そしてここで逃げようとしている自分も、全部が全部嫌だつた。

逃げる事も嫌だ。立ち向かう事も嫌だ。知らぬふりも嫌だ。見捨てる事も嫌だ。戻るのは嫌だ。やられるのは嫌だ。迷う事も嫌だ。悩む事も嫌だ。苦しむ事も嫌だ。何もかも、全部が全部嫌だつた。嫌になつて嫌になつて、この世界に居る事すら嫌になつた。消えてしまいたい。そう思つた。もう全てを放り出したい一心で、法子は再び教室に駆け込んだ。こうなつたらあのピエロに挑んで死んでやる。死ねば全てから逃げられる。でもただでは死はない。せめて一矢報いて死ぬ。せめて襲われている生徒を逃がして死ぬ。

自暴自棄な心で、法子は駆ける。武器は無いか。あのピエロに突き立てる武器は。

数歩先に剣型のアクセサリーが落ちている。目にでも刺せばきっと痛い。理性は出来る訳ないと断じるが、そんな事に頓着する暇はない。法子は駆けながら身を低くして刀をとる。態勢を崩して倒れそうになるが、自分の背丈よりも長い刀を杖にして自分の体を支え、

勢いを殺さずにそのまま駆ける。ああ、もう何でもいい。とにかく襲われている生徒を助けよう。それでこそ我が主。どうせこの先、私なんかが生きていっても碌な事にならない。それならばきっと未来の広がつている別の誰かに人生を預けた方がきっと良い。いや、それはどうかと思うけど。

黒を基調とした丈の短いドレスを身に纏つて法子は駆ける。目の前のカーテンを刀で切り裂き、その向こうへと飛びだす。

生徒が襲われていた。口から血を流した生徒はピエロに顔面を掴まれ、無理矢理目を見開かされていた。けれどまだ生きている。何をされているのか、法子には分からぬ。分からないが、襲われている、そしてまだ取り返しのつかない事にはなっていない、それだけ十分だ。

法子は敵意を持つてピエロを見据える。

#### 『道化二弄バレル模造

ある日鏡を覗いた弟が鏡像に向かつて言いました。お前はたった今生まれたばかりだから俺の弟だ。弟なら俺の言う事を聞け。

ユニーク・デモ魔力ハ低イ

コミカル・デモ力持チ

バフーン・デモ意志ハ無イ

東『

ピエロの魔力は微弱。雑魚だ。少なくとも田曜田に闘つたキャットウォークと比べれば威圧感は遙かに低い。そう見て取った法子はそのまま駆けて、刀を抜いて一閃し、ピエロを切り裂いた。ピエロの体が切り裂かれると、何故かピエロの首も手足も体から離れ、バラバラになつたピエロは溶ける様にして消えた。

あまりにも呆氣無い。もしかしたら油断させる為の罠だらうかと警戒するも、気配はまるで感じられない。まさか本当に終わったのだろうかと法子が気を抜いた時、頭の中に声が響いた。

「いや、まだだ」

タマの声だった。

「た、たま、たつ、たた、たま、た」

「落ち着いて。乱れすぎていて心が読み取れない」

「ふおふほほうふへ」

「だから落ち着けて」

「落ち着いてなんかいられる訳がない。

「タマちゃん?」

「どうした?」

「本当にタマちゃんなの?」

「勿論。だからどうした」

「どうして? 戻って来たの?」

法子が自分の体を見ると、魔法少女の衣装を着ていた。いつの間

「」。

タマが笑う。

「戻ってくるも何も私はずっと君の手首に垂れ下がって居ただろう?

? 私が居なくなつた事は無いよ」

「でも話してくれなくて」

「それは黙つていただけ。君があんまりにも私に頼りつきりだからお灸を据えようとね」

法子が刀をゆっくりと自分の目の前に掲げた。

「どうした? そんなに懐かしいのか? まだ一週間も経つてないだろう?」「」

そしてそれを膝の上へと叩きつけた。折れない。だからもう一度膝へ。膝へ。何度か試みるも刀は折れそうにない。

「待て! 待て! 何をしているんだ?」

「タマちゃんを折ろ?」

法子が静かに答える。

「怖いよー。君、本氣で言つていいだろ」

「うん」

「うんつて」

ふいに法子の目から涙がこぼれた。

「本当に寂しかったんだから」

一転した湿り気のある法子の思念に、タマは流石にたじろいだ。

「ああ、悪かったよ」

「本当に寂しかったんだから…」

また法子が膝に刀を叩きつけた。

「ああ、もう！ 分かった！ 分かったから落ち着けって。今はそれよりも魔物の方に集中しよう。文句は後で聞いてあげるから」

「そうだ！ 忘れてた」

忘れんなよとタマは思ったが、伝えなかつた。今は事態に対応する事が先決だ。法子は襲われていた生徒に駆け寄つて容体を確認する。

目立つた外傷は無い。だが口から血を流し、意識も落ちている。息はある。どうなのだろう。素人の法子には危険なのか大丈夫なのがも分からなかつた。タマが答える。

「氣絶しているだけだね」

「本当？」

「ああ。臓器が潰れているかもしないけど、致命傷じゃなさそうだ」

「それって問題なんじゃ」

「大丈夫。とりあえずこの人間は置いておこう」

タマはあつさりと怪我人を置いていく事を主張した。法子がそれに対して非難の意志を送るがタマは飄々としている。

「とりあえず死にはしないよ。それよりも魔導師が先だ。あいつは厄介だから」

「もう倒したよ？」

「いや、さつきのは偽物だ。君の解析でもそう出ていただろ？ あいつは自分の偽物を作りだすんだ」

「じゃあ、まだ終わっていないんだ」

「ああ。だから早く行こう。被害が広がる前に」

「でも」

法子は尙も怪我人を気にしてその場から離れようとしている。それをタマは諫める。

「田の前の事に溺れちゃいけない。あの魔導師を逃す事がよっぽど不味い。本当に死人が出る」

「でも」

でも目の前には血を流して倒れている怪我人が居る。法子にはそれを放つておく事がどうしても出来なかつた。

その時、突然、教室の壁が爆発した。吹き飛んだ壁の向こう、白煙の立ち昇る先に、人影が立つてゐる。

まさか魔物かと法子は剣を構えるが、現れたのは魔物ではなく、以前闘つた魔法少女だった。

「魔法少女見参！この世界で好き勝手はさせないよー！」

何だかポーズを決めてゐる。

「おい、変なのが来たぞ」

タマが呆れて法子に話しかけるが、法子は何だか楽しそうだ。

「カッコ良い」

そう呴いて、魔法少女に見惚れている。

「ああいうのが良いのかい？」

「タマちゃん、私達も決めポーズと決め台詞考えておこうか」「やめてくれよ。それより魔導師だよ、魔導師。そつちに集中」現れた魔法少女はポーズを解いて、教室の中へと入つて來た。

「あれ？ あなたは前に会つた」

法子の体が緊張で震えた。前に会つた時は、こてんぱんにやられた時だ。嫌な思い出に法子の体は固くなつた。

「ここに居た魔物は？」

「……さつき、私が倒しました」

思わず敬語になる。

「ホントに？ なんだ、変身する必要なかつたな」

「ち、違います。あいつ一人だけじゃなくて、いえ、確かに一人なんですけど、沢山居て」

「どういう事?」

「そのつまり、さつきのは偽物で、本物は別の所に」  
その時、外から悲鳴が聞こえてきた。法子ともう一人の魔法少女が窓に駆け寄つて外を見ると、沢山のピエロが校庭の生徒達を囮んでいる。

「まづいな。後手に回るぞ、このままだと」

タマの切羽詰まつた思念が法子の心を焦らせる。焦るだけで何も出来ず、おろおろと辺りを眺めまわし、それだけ。具体的にどう行動すれば良いのか法子には分からぬ。

「ねえ、あなた」

魔法少女が法子に語りかけてきた。

「何ですか?」

「あの魔物に詳しいの? 本物の居場所は分かる?」

分からぬと答えようとした時、タマが分かるよ君ならと囁きかけてきた。それにつけられて思わず答える。

「分かります」

「そつか。じゃあ本物は任せた。私はみんなを守るから

「え? あ、はい」

法子が賛同したのを見て、魔法少女はにこりと笑つと、その場に居るもう一人、怪我をして倒れている生徒に近付いて、その体に手を翳した。

「この人の事も任せて。あなたは行つて

「はい」

何だか急な事態に法子は焦る。とりあえずどうすれば良いだらうと考えながらおひおひとしている法子を、魔法少女が怒鳴りつけた。

「早く!」

「は、はい!」

法子は慌てて壁の穴を通り、廊下へと飛び出した。

「どうしよう、タマちゃん。ああ言つたけど、私本物の居場所分からぬよ」

「分かるだろ。解析に出ていた

「そう……だつけ？」

「東つてあつただろ。あれが本物の居場所を示しているんだよ。本物が居る方角か、本物から見た偽物の方角なのかは分からないけど」「じゃあ、どつちに」

「まあ、とりあえず廊下を真っ直ぐ行こう。廊下は東西に伸びているから」

法子が廊下を見渡す。東と西、どちらに行けば良いだろ？。

「ねえ、タマちゃん」

「自分で考えな

「うぐ」

そう言われては聞く事が出来ない。法子は必死で考えて東に行く事に決めた。東に行けば学校の中心がある。何となくバスは真ん中に居る気がした。

「まあ、間違つていない

タマが補強してくれる。法子は勇んで東に向かう。

途中にピエロが見えた。法子が速度を上げてピエロに斬りかかる。

『東。あともうちょっと』

そんな解析結果が出た。どうやら合っていたようだ。

「しかし君の解析は本当に便利だね」

褒められて何だか嬉しい。久しぶりに誰かと話した気がする。もう何年も誰とも話していなかつた気がする。だから嬉しくて、法子は勢いよく刀を振った。ピエロはあっさりとバラバラになって消えた。

一顧だにせず更に駆ける。風の様に廊下を走り抜ける。

「止まれ！」

タマの急な制止に法子が立ち止まろうとして、つんのめって転んだ。そのまま擦れながら廊下を転げまわって、しばらくして止まる。「痛い

「さっきの部屋からおかしな魔力を感じた。多分そこだ」

法子が顔を上げて、今駆け抜けてきた廊下を眺める。それぞれの入り口を順繰りに眺めて、タマに問いかけた。

「何処？」

「あの、音楽室つて書かれた所」

「分かつた」

法子が立ち上がり一息に飛び抜け、音楽室の前に着地する。「居るんだよね？」

「十中八九」

法子が気合を入れて、刀を握る手に力を込め、扉を蹴り破った。ピエロが鍵盤の上で踊っていた。さつき倒したピエロと寸分違わぬピエロだった。

「あれ？ また偽物？」

「何で？ 本物だとと思うけど」

「だつて偽物と全く一緒でしょ？」

「一緒にしないと意味が無いだろ」「自分と見分けがつかない様にしないと意味が無いだろ」

「それは、確かにそうだけど。何ていうか、折角のボスなんだし、他のと比べたら派手な感じのが」

「アホな事言つていないで、解析

「はーい」

『グランギニヨールに巢食う双子 ミラーマン

能力：鏡喜の世界

どうしたんだい、ボブ？ そんなに慌てて。

大変だ、ジヨニー。家に帰つたら玄関にお化けが出たんだ。どんなお化けだったんだい。

色白で太つて豚の様な顔でしかめつ面でとにかく醜い奴なんだ。それは君のワифだよ。

成程、その通りだ！

H A H A H A !

H A H A H A ! いや、ちょっと待ってくれ。僕のワифは先月

死んだばかりだよ！

なら鏡で君を見たんだろう！

成程、その通りだ！

H A H A H A !

H A H A H A ! いや、ちょっと待つてくれ。なら誰が玄関に鏡なんて置いたんだい？ 鍵もかかっていたのに』

ピエロがとても楽しそうに悲しそうに鍵盤の上で踊っている。その間の抜けた様子に馬鹿にされた様な気がして、法子は腹が立つてタマに問いかけた。

「もー！ 何これ！ 解析、全然分かんない！」

「また妨害されたね」

「じゃあ、あいつの方が強いつて事？」

そう考えると、急に不気味になる。狂った様に踊るピエロ。滑稽で、とても滑稽で。何故今、踊りなんて踊っているのか。敵対者が目の前に居るというのに。法子には分からぬ。まるで人間とはかけ離れた精神を持っている様な。不気味。負ければ、捕まれば、どうなるかは分からぬ。

「安心してよ。魔力の量で言つたら君よりもずっと少ない。真正直に戦えば、君の方が強いよ」

「じゃあ、何で解析出来なかつたの？」

「何というか、あの道化師は人を翻弄する事に命を賭けているんだよ。相手に自分を晒すなんて絶対にしない奴だから」

ピエロはまだ踊っている。法子はそれを見て、一筋縄ではいかなうだと氣を引き締めた。恐ろしさは減じたが、その分警戒心が強くなつた。

「実を言つと、前の主があいつと鬭つた事がある。だからあいつの事は分かつてゐる

「ホントに？ ジャあ、教えて！ つて駄目？ あんまり頼つちゃいけない？」

「いや、そんな事言つていられないよ。あいつは厄介だから」

「厄介？」

「そう、魔力こそ少ないけど、能力が厄介。偽物を作りだす能力ともう一つ鏡の中に入り込む能力。ついでに何を考えているか分からないから次に何をしてくるのか想像がつかないし」

急にピエロの動きが止まつた。かと思うと、鍵盤に乗つたピエロが三人に増えた。背後からも気配を感じる。振り返ると、更に多くのピエロが居た。

「早速取り囮まれたね」

「でもダミー達なら余裕」

法子が振り向きざまに一步踏み込んで、刀を振るつた。法子の背後をとつていたピエロ達がまとめて消し飛んだ。踏み込んだ足で跳ね上がり、天井に手を突いて無理矢理方向を変え、ピアノの上のピエロに斬りかかる。刀を振るうとピエロが一人消し飛ぶ。本体には一瞬前に避けられた。

「外した」

「まあ、本体は偽物より強いから」

ピエロが音楽室を飛び跳ねながら、偽物を次々と増やしていく。偽物達も飛び回つてどれが本物のピエロなのか、眩惑する様な動きを繰り返して本物と偽物は入り混じつていいく。

「さて、どれが本物の僕が分かるかな」

沢山のピエロが一斉にそう言つた。

法子がピエロ達を見据える。タマの声が頭に響く。

「ああ、そうか」

法子が鞘に納めた刀に手をかけてピエロ達へと躍り込んだ。そして跳ねているピエロ達を無視して、一番奥で笑つているピエロへと斬りかかつた。

「君は本物を見分けられる訳か」

ピエロが刀を避けようと横に跳ぶが避けきれず、脛に半ばまで切れ込みが入つた。

「痛い、痛い！」

運が良いよ、一発で正解を当てるなんて。でも次

は当たられるかな？

そうしてまたピエロが増えていく。今度はさつきよりも多い。皆、脛に傷がついている。部屋を埋め尽くすピエロの大群。法子は一步も動かず、近づくピエロだけを斬り裂きながら、待った。待つていると、ダミーの合間に一瞬だけ本物が見えた。

その時を見逃さず、法子はダミー達を押し飛ばしながら本物へと瞬く間に近付き、思いつきり刀を薙ぎ払った。今度はピエロの腹が真一文字に切り裂かれる。ピエロの腹から玩具が「ロロロロ」と飛び出していく。

「良くやった、法子。このままいけば帰る事が」

タマの言葉が途切れた。ピエロは大きく後方に跳躍して、ピアノの上に立つ。また最初と同じ構図。辺りに犇めいていたピエロ達は皆消えて、今はピアノの上の一人だけになっていた。何だか薄気味悪い。何かしてくる。そんな気がして法子はうかつに飛び込めない。相手の出方を待つのが賢明だ。

「何しているんだ！ 早く！ あいつを鏡に入れさせるな！」

タマの叫びに法子が動き出す。刀を構え、踏み出し、ピエロの元へ、だがそれよりも遙かに先に、ピエロは後ろに倒れ、そうして窓に触れ、そのまま鏡面を通り抜けた。

「イッシャショーターイム！」

窓の中に入つたピエロは楽しそうに飛び跳ね、側転し、隣の窓へと移る。楽しそうに楽しそうに、窓の中を飛び跳ねている。

「入られたか。まずいな」

タマがぼやく。法子は楽しそうなピエロをほんやりと眺めている。

「あれ、窓の向こうに居る訳じゃないんだよね？」

確かにピエロは一見窓の向こうで飛び跳ねている様に見える。だが良く見れば、それはあまりにも平面過ぎた。

「あなる前に、仕留めたかつたけれど

「どうしよう」

「どうしようもない」

音楽室にまたピエロが増え始めた。今度の増殖は緩やかで、一人また一人、少しづつだけれど確実に、ピエロの数が増していく。

「鏡に入っている間、分身は精度が落ちる。けど、こちらの攻撃が届かない所から延々と攻撃されるのは面倒だぞ」

「あれさ、窓を壊しても駄目なんだよね？」

「ああ、近くに他の鏡がある限り。この学校もそれに町も鏡ばかりだろ？ 無駄って言つて差し支えないよ」

偽物のピエロが襲い掛かってくる。法子はそれを一步退いてから、上から下へ切り裂いた。更にもう一人、横合いから飛び掛かって来る。下に振り下ろした刀を逆手に持ち替えて、下から上へ切り裂いた。続けて、二人、左右から襲い掛かってくる。法子は刀を順手に持ち替えて、綺麗に一回転して一人斬る。キリが無い。

今度は頭上から。身を低くして切り上げる。四方から同時に。回転して切り裂く。時間差で前後、上から。後ろを突き、頭上の攻撃を避け、着地したのと前からのを一息に突き刺す。キリが無い。

今度は上から。斬る。右から、左にも、斬る斬る。右、左、上、斬る斬る斬る。上、前、左、前、右、斜め、前一人、後ろ、右、斜め、五人、六人、キリが無い。

一人一人はとても弱い。攻撃は単調で遅く、一度斬ればそれだけで消える。けれど数が多い。幾ら斬つても幾ら斬つても、新しいピエロが増えしていく。そしてその大本は安全な窓の中で寝転がり、意地の悪い笑いを浮かべながら泣いている。

斬る。斬る。斬る。だが増える。更に多く、増殖する。キリが無い。

法子の手元が狂い、斬り損なったピエロが目の前へと迫る。危うい所で、かわして、斬り飛ばす。自分の魔力が少しづつ減っていく感覚が法子の中についた。あの魔法少女と闘つた時よりも更に早く魔力を消耗していく。それでもあの魔法少女戦より長く闘えていた。成長したという事だ。けれどそれでも、限界は見え始めていた。

「どうすれば良いの、タマちゃん。疲れてきた」

「正直、どうにも」

「どうにもって！ 前に闘つた時はどうやって勝つたの？」

「前は主も大分成長していたし、魔力の量も扱いも君よりずっと長けていた。だから三日三晩闘つて、あの道化師の魔力が尽きるまで待つた。今は相手も怪我を負つてるからあの時よりは早いだろ？ けれど、それでも一日は見ないと」

「そんなの無理だよ」

「分かってるさ。だからどうしようも無いんだよ。現状を開するには、あの本体を叩くのが一番だけど」

法子が窓に入ったピエロに視線をやつた。ピエロが大きくあぐびをして、笑っている。

「でも鏡の中を攻撃するなんて無理だろ？ だから、とりあえず撤退して、同業者に代わつてもらつてのはどうだい？ あの魔女に。あつちはもしかしたら鏡の中に攻撃する手立てを持つているかも」「絶対に嫌」

それは嫌だ。それでは悔しい。折角タマちゃんが戻つて来てくれたんだから、これ以上失望させたくない。今回位は良い所を見せたい。

「そうは言つてもね。鏡の中を攻撃するなんて

法子は必死で考える。鏡の中を攻撃する方法を。誰にも頼ららず、必死で考える。

その思考を覗き見て、タマが嬉しそうにほくそ笑んでいるが、法子は気付かない。ひたすら襲い掛かってくる偽物のピエロを切り裂きながら、思考に没頭する。

鏡の中の敵を攻撃する方法は？ 法子は今まで読んだ漫画や小説、見たアニメや映画を思い出しながら、考える。大抵鏡の中に入った敵は攻撃しようとして鏡から出た時に倒される。結局鏡の外に干渉するには鏡の外に出るしかないから、相手が攻撃してくる時を狙い澄まして反撃すれば良い。

しかし田の前のピエロは違う。確かに鏡の中の本体が鏡の外に直

接攻撃する事は出来ないみたいだが、鏡の外に偽物を生み出す事で攻撃を行えている。

では他に対抗策は無いだろうか。例えば鏡を割るという方法。鏡を割れば鏡の中に居る事は出来ない。鏡を割つて外に出て来たところを叩く。だがその作戦は先程否定されたばかりだ。

例えば鏡の中に入るという方法もある。相手が鏡の中に入れたのなら、こちらだって何らかの方法で中に入れるという道理だ。鏡の中は相手の舞台で厳しい戦いになるかもしれないが、それでも相手に干渉する事が出来るだけマシだ。

「それだ！」

「え、ちょっと、法子、流石にそれは」

法子が駆け出した。偽物ピエロ達を避け、飛び越え、ピアノの上に着地して、そしてピエロの居る窓へ飛び込む。法子は窓に触れて、そのままガラスを突き破つた。甲高い破裂音がけたましく響く。飛び出した法子はそのままベランダを越えて、中空へと飛び出し、危うい所でベランダの手すりを掴んで、下に落ちる事だけは避けた。手摺を力強く引いて、体を浮かせ、軽やかに手摺の上に着地する。音楽室の中の沢山のピエロが法子の事を笑っている。窓の中のピエロも法子の事を笑っている。腹が立つた。

ふと外の様子が気になつて振り返つて下の校庭を見ると、あの魔法少女とそれから昨日助けてくれた黒い騎士が校庭に集う生徒達を守る為に奮戦していた。ピエロの数は多いが、それを全く近寄らせない。けれどやはりキリが無い様で、危なげは無いものの、打開出来る様子も見えない。

私が何とかしないと。改めて気合を込めた法子は、飛び掛かつて来たピエロの首を跳ね飛ばして、くるりと回り、音楽室を見据えた。鏡の中のピエロをどうすれば倒せるか。

襲い掛けつて来た二人の腹を斬り、もう一人の腕を斬り、ベランダの下へと落ちて行くピエロには目もくれずと考える。

最も単純な方法は純粹に魔力をぶつける事だ。窓に入るには作品

世界でのエネルギーを使っている場合が多い。そしてその鏡の中に入れるエネルギーを遙かに超えたエネルギーをぶつける事で、相手を鏡の中から無理矢理追い出すと言う方法だ。

これは良いんじゃないかと、飛び掛かつて来たピエロの腕を跳ね飛ばしながら、内心で得意になる。あのピエロは自分よりも魔力の量が下らしい。ならばこちらが相手の持つ魔力よりも大きな魔力をぶつければ外に追い出せるのではないだろうか。

「無理だよ」

タマの否定が入った。

「駄目？」

「ああ、無理。魔力だけで追い出すには膨大な量が必要だからね。万全でも無理なのに、今君はあるのピエロよりも遙かに消耗している」

「じゃあ、八方塞り？」

「だからさつときやう言つただろ」

「そんな」

法子がし�ょげ返つて、思考が途絶える。簡単に落ち込む法子に苛立つて、タマがしまいとしていた助言を思わずしてしまった。

「あのさ、魔力って何だか分かっているの？ 魔術って何か分かれている？」

「え？」

「学校で習わなかつた？」

「習つて……ない」

「あのね、魔術っていうのは概念の力を別の力に変える方法な訳。で、魔力って言うのはその概念の力の事」

「概念の力？」

「だから、因果の、いや、原因と結果つて言つた方が分かり易いか？ もつと平易に言えば、ああすればこうなるつていう繋がりが概念。その繋がりの結びつきが概念の力」

「良く分からないんだけど」

「まあ何となくで良いよ。で、逆に言えば魔術を使えば概念を無理

矢理付け加える事が出来る訳だ。例えば、そうだな、初步的なので言つと、羽が勝手に宙に浮いたりとか

「それは授業でやつた！」

「物凄く簡単に言つと、何かに新しい機能を付けられるんだよ。例えば君がいつも使つているドライヤーから熱風じゃなくて水を流したりね」

「うん」

「勿論もつと複雑な事も出来る。例えば、飲んだら人の感情を変える水だと、斬つたら物が消える包丁だと、絵の中の人を撃てる銃だとか」

「うんうん。で？」

「だから」

タマの言葉が止まつた。これ以上言えば、ヒントビシリカ答えてになつてしまつ。今ので充分、『え過ぎな位ヒントを』『えたのだ。これ以上は、少し位は自分で考えてくれなくては困る。

「いや、それだけ」

「え？　どういう事

「ああ、もう良いから！　そんな事より、せつひとあの道化師を倒す方法を考えな」

法子は混乱しながらも、偽物のピエロ口を切り捨てながら鏡の中の本体を攻撃する方法を考える。

そして突然大きな声を上げた。

「分かった！　分かったよ、タマちゃん！」

「良く気付いた」

思わず口に出していたので、ピエロがそれを聞きつけて、首を傾げて尋ねてきた。

「分かつたつてなーに？」

「うつさい！　覚悟しなさい、あんた達！」

法子がタマを握りしめる。

「それでどうすれば良いの？　何か呪文が居る？」

「何か呪文が居る？」

「いや、今の君じゃまだ無理だよ。本当に高度な概念だから。魔術の式はこちらで組み上げる。魔力も私が今まで蓄えてきたものを使う。君はとにかく私との間の流れを保ち続けて。どれだけ流れが乱れようと」

「分かった！」

と気合を入れて応じたが、法子には流れというのが良く分からない。何となく感じるタマとの繋がりだろうかと思うのだけれど、その繋がりはいまいち掴みようの無い感覚で、乱れというのも保つといつのも良く分からない。

まあ、なる様になるさと、法子が気楽に構えて、襲い掛かってくるピエロを斬ろうとする、

「待て。概念を付与すると魔力の消費が激しくなる。概念を付与した刀で斬れば更に。だから魔術が完成するまで、いや完成してからも本体を斬るまで他のは斬るな」

法子が慌てて手首を無理矢理動かして切つ先を逸らし、迫つて来るピエロの胸倉を掴んで後ろに放り投げた。

「そういう事は早く言つてよ！」

「悪い。じゃあ、始めるぞ」

その瞬間、法子の中に何か仄明るい違和感が灯った。何だろうと思つているとそれはどんどんと大きくなつて、胸を圧迫してきた。何だ何だと思つている間に、それはどんどんと広がつて、胸の奥が削られる様な錯覚が起こつた。削られていく。痛みは無いが、やるせない気持ちの悪さが胸から喉へせり上がつてくる。削られる振動で視界が揺れる。

怖い。何だか自分が壊され、作り変えられてしまつ様な怖さを感じた。だが法子はそれに耐えて必死にタマとの繋がりを確認しながら、襲い掛かるピエロを避け、蹴り飛ばし、投げ飛ばした。

頭の中で何か音が鳴つている。それは手の先から流れて来る音で、ひたすらに不快で、意識が遠のきそうな程、抑揚が強くかつ単調な、長く聞いていれば発狂しそうな音だった。それにも耐える。不安は

あつた。だが同時に信頼があつた。タマが自分に変な事をする訳がないという信頼、タマが失敗するはずが無いという信頼。だから耐えた。耐えられた。反響する不快感が法子を苛んでいく。それに抗つて、法子は必死にピエロと闘つた。

そして、

「良し、出来た。法子！ 後は本体を斬るだけだ」

不快感が消えた。代わりに刀へ力を吸い取られていく感覚があつた。

「分かつた。でも」

だがいつの間にか本体のピエロは居なくなつっていた。法子達がかしながら動きをしていると気付いて既に逃げ出したのだ。

「早く追いかける」

「うん、でも」

目の前にはダミー達が奔めいている。刀を使えない今、そこに道を作るのは困難だ。かと言つて、分析から導き出されるピエロの迷走経路はダミー達を越えた先で、ダミー達を迂回すれば大幅な遠回りが必要になる。刻一刻と力が減つている法子にはその時間の浪費さえ惜しい。

「私がもう一人いたらな。こいつ等ばかり増えてずるいよ

「アホな事言つてないで」

法子とタマの意識が同時に法子の手の先に注がれた。手の先には刀がある。法子が魔法少女になつてから使い続けてきた刀だ。だが反対の手にも刀が握られていた。それも全く同じ刀が。

「私がもう一本？」

タマが突然と呟く。全く同じ刀が一本。だが法子にしてみればその一つは明確に違う。一本がタマで、もう一本はタマでない。

「まさか君の一いつの能力？」

「分かんないよ」

「まさか友達欲しさに私を増やしたんじや

タマが気味悪そうに言つた。

「だから知らないって！ それにタマちゃんみたいに意識は宿っていないよ。それより今は武器が増えた事を喜ぼうよ！」

「そうだね。そっちの刀には概念を付与していないから、斬つても消耗はないだろ」

「よし！ ジャあ行くよ」

法子がベランダの手すりを蹴つて音楽室に踊り込み、刀を一閃する。それだけで周囲のピエロは消え去った。法子が進む。刀を振るう。ダミー達が消えていく。音楽室を飛び出し、右を見ると廊下にも同じ顔をしたピエロが犇めいている。法子が刀を振るいながら突破していく。左に曲がると遠くに本体が見える。足と腹を怪我して思う様に動けていない様だ。追いつける。そう確信して、法子は横に飛び、壁に足を着け、壁を蹴つて一気に前へと跳んだ。ダミー達の頭上を飛び越え、落ちそうになるとダミーの頭や肩を蹴つて、ダミーの上を走つていく。法子が本体に追いついたのと、本体が傍の教室に逃げ込もうとするのが同時だった。

「もう逃がさない！」

法子が逃げ込もうとする道化師の背中を斬る。だが傷は浅く、ピエロはそのまま教室の中に駆け込み、そして窓の中に入った。

「ひひ、残念！」

ピエロが高らかに得意げに宣言する。だが法子は駆け寄つて窓ガラスに思いつきり刀を振り下ろした。窓の中に宿る存在を斬るという概念を付与した刀を。窓の中のピエロは袈裟に斬られ、理解出来ないといった表情で法子を見た。法子が更に斬ろうと刀を構えたのと同時に、背後から追いついてきた大量のダミーが法子目掛けて襲い掛かる。

法子は構えた刀を戻して、舌打ちしつつ、反対の刀でそれを切り払う。ダミーは消えたが同時に刀も折れた。

「え？」

折れた刀の先を眺めて法子が呆然とした。

「壊れやすいみたいだな」

使える武器は無い。そこへダミー達が再び襲い掛かってくる。かと思うと、法子は折れた刀を床に刺して、新たな刀を生んだ。法子自身も驚く程、まるでいつもそつしてきたかの様な流麗とした動きだった。

「けれど簡単に作りだせる。便利な能力だな、それ」

ダミー達を切り払う。消えたダミーの向こうからまたダミーがやつて来る。一体いつまで切れば良い?

「法子! やつたぞ、あいつの魔力が尽きた」

本体が窓から抜け出していた。魔力が尽きて鏡の中に呑られなくなつたのだ。

法子がそれを追う。ダミー達が壁を作ろうとしたので、それを切る。すると再び刀が折れた。折れた刀を床に突き刺して、再び新たな刀を。

教室の外に逃げ出そうとしている本体に先回りして、その前を塞ぐ。本体が反転して逃げようとする。ダミー達が本体を守ろうとする。立ちはだかるダミーを切る。刀が折れる。それを突き刺して新たな刀を。そして逃げる本体に先回る。

そんな事を繰り返している内に、ついにダミーが居なくなつた。魔力切れでもうダミーを生む事も鏡に逃げ込む事も出来ない。

「チェックメイト」

法子が恰好を付けて言い放つた。

ピエロが笑う。

「残念無念」

諦めた様に腕をだらりとしたに垂れ下げて項垂れる。

かと思うと、飛び掛かって来た。

不意を打とうとしての事だったが、法子は薄く笑つて剣を真つ直ぐにピエロへ向けた。

タマの声が頭に響く。

「そのまま、帰したいと願うんだ」

法子は一つ頷くと、ピエロに向かつて意地悪そうに笑つた。

「イツ・シア・ショーター・イム」

ピエロの口調を真似て、そう皮肉気に宣言する。

すると教室の中に突き立つ折れた刀達が光りで結ばれて、巨大な魔法円を描いた。その光が爆発して、光が満ちる。そして光が消えた時には、ピエロが居なくなっていた。

もう気配は感じない。法子が間違いなく帰した。魔物の恐怖は去つたのだ。

法子が後ろに倒れる。頭を打ち付けたが満面の笑みだ。

「勝つた！」

「ああ」

「初勝利！」

「良くやつた」

法子はしばらく天井を見上げて荒い息を吐き、それから息を整えてタマに尋ねた。

「見直した？」

「何度も危ないと思った場面もあつたけど、そうだね、素晴らしいしかつた。見直したよ」

「私、英雄になれた？」

「ふふ、外に行つてみんなの前に出て見なよ。きっとみんな君を英雄視してくれるだろ」

法子が危なつかしくふらつきながら、窓辺に寄つた。外には沢山の生徒が居る。ピエロのダミーはもう居ない。生徒達の視線は魔法少女と黒い騎士に集まつて居る。どうやら生徒達は一人を褒め称えているらしい。

「ほら、校内の戦いを知らない彼等は、魔導師を倒したのがある二人だと思つて居るよ。ここは君が出て行つて、私が倒したつてびしつと言わないと」

「やだよ。そんな浅ましい真似」

「英雄になれないよ？」

法子が微笑む。同時に魔力が尽きて、変身が解けた。

「良いの。人前に出るなんて恥ずかしいし。それにね、私はみんなに称えられる英雄じゃなくて、みんなを守る英雄になりたい。孤独でも何でも良い。誰よりも強くなつて、みんなを守れるようになりたい」

「そうかい。なら何も言わないよ。君が人知れず世界を守る英雄になると言つのならそれも良いだろ？ ただね、一つ気に食わない」「何？」

「孤独という点さ。まさか今回勝てたのは全部自分一人の力だなんて思つていらないだろうね？ 誰が君を見捨てようと、私が居るだろう。君は孤独なんかじゃないさ」

「そうだね。うん。私、一人じゃない」

法子が素直に頷いた。頭の中に満足そうなタマの思念が流れくる。それに釣られて法子もまた満足そうに笑った。

## 支えが無ければ物は倒れる

「斬った人間への見舞い？ 止めておいた方が良いと思つけれどね  
「でも、このままじゃ後味ばかり悪いし」

「変身した状態で行くのかい？ 言つとくけど、今の君の評価は子供を斬ったやり過ぎヒーローだよ？ 未だにテレビでやつてるじゃないか。変身ヒーローの在り方についてとかそんな題名が付いて。それで病院なんか行つてみなよ。死神が迎えに来たつて騒ぎになるよ」

その言葉に法子は傷ついたという顔をして、沈み込んでしまう。  
「いや、一応最後のは冗談だから笑つてほしいんだけど」

タマの言葉に法子は首を振る。

「ううん、タマちゃんの言う通りだよ。私は今、悪役だし、それで人前に出たらまずいつていうのも分かってる」

「だから、昨日みんなの前に出て高らかに宣言すべきだったんだよ。今からでも遅くないんじゃない？」

魔物を倒した後、法子は本当に何も言わずに皆の元に戻った。校内に隠れていた生徒達に混じって、さも怖くて隠れていたという風を裝つて。

法子を中心としていた生徒は居なかつたので、その演技は無駄ではあつたけれど、それでもタマは歯がゆかつた。法子の選択に対して何も言わないと宣言したタマだが我慢できずに、今なら間に合うから自分が倒したと言え、と強要したのだが、それでも法子は言わなかつた。その後、校庭で点呼が取られ、人数が足らずに大騒ぎとなり、生徒達を校内に留めたまま、教師や町の人々で校外に逃げた生徒の捜索が行われ、その混乱の中連絡を受けた保護者達と警察と救急隊が校庭にやって来て更なる大混乱が起こり、その收拾に追われるようになった夜までの間、タマはあの手この手で、あの魔物は

変身して自分が倒したと言え、と説得し続けたのだが、遂に法子は拒み通した。

タマには何とも歯がゆかつた。法子が選んだのであれば仕方が無い。延々と拒み続けられたので、流石に諦めるつもりではいたものの、やつぱりどうしても、文句の一つでも言いたくなってしまう。また説得をしたくなってしまう。どうしたって解決した事を知らしめておいた方が、法子にとつて良いはずだから。

でも法子はやつぱり拒む。

「私は、陰ながら人を助ける事に決めたの。人前に出るなんて性に合っていないもん」

「まあ、君がそう言つなら良いけど」

法子だって分かっている。確かにタマの言つ通りで、昨日みんなの前に出て自分が倒したと言つて、子供を斬ったといつ汚名を僅かなりとも払拭すべきだったのだろう。そうしなかったのは、結局法子の我が儘だ。違うと思ったからだ。華々しく人前に出て賞賛を浴びる偶像と身命を賭して人々を守る英雄は全く違うもので、相容れない。何となくの漠然とした思いではあるけれど、法子はそう思つていた。そう、どちらかと言えば、助けたほんの一握りの人だけは分かつて貰えて、残りの大部分には忌み嫌われる、そんな英雄になりたいと思つた。人を助けるより自分の見栄えを気にする、そんな思いは不純なかも知れない。けれども苦しむ人々を守る存在なのに、自分だけが幸せの絶頂を目指す事は、何となく嫌だった。自分が苦しむからこそ、苦しい人を分かつてあげられる助けてあげられる。魔法少女になつて一週間、浮き沈む苦楽の感情を味わい続けてきた結果、法子はそう思い始めていた。

「変身した私が出て行つて混乱するなら、変身しないでお見舞いに行つて、傷付けちゃつたあの子にだけ正体を明かせば良いでしょ?」

「あのね、ああもう、本当に分かつているのかな? その子にどうして君は、自分を切つた憎い奴なんだよ?」

「分かつてるよ。だから謝りに行くんでしょ?」

「だから、そんな奴が来たつて嫌なだけで、そもそも謝られたつてそんな簡単に許せる問題じゃ無いし」「でも謝らないと始まらないから」

「斬られた方にとっては嫌な気分にしかならないと思つよ。心が軽くなるのは君だけだ」

法子が何かを思う前に、タマが重ねて伝える。

「私の主の中にも居たよ。人を切つた者が。村の人を何人も切つた。貴、親を死なされた恨みでね。復讐の為だから、身分が違つたから、彼はそれを罪だと思っていなかつた。自分は何をやっても良いんだと思つていたよ。その後、色々あつてね、情勢が変化して彼と村の人達との間に違いが無くなつて、彼の心境も変化して、それで彼は村の人には償おうとした。殺される事も覚悟して、何でもするし、何をしてくれても構わないって言つて、村人達に自分を委ねた。結果として、彼とその一族はみんな惨たらしく殺されて、彼の痕跡は全部消されて、その上で彼には醜い過去が付け加えられた。正しい英雄に殺される化け物になつた」

部屋の外から声が聞こえる。朝ごはんが出来たみたいだ。

法子がそれに生返事をする。心をタマの話から逸らせない。

「それでも村の人達の恨みは収まつていらないみたいだつた。むしろそれまで以上に恨んでいるみたいだつた。死んでしまつた後なのにね。この話を聞いてどう思おうと君の勝手さ。あの時の主と君では、状況も心情も何もかも違うから。そのままの事が起きるなんて事はない。それでもちょっとは感じるものが在つて欲しいね」

法子は静かにベッドから立ち上がりつて、部屋の外に出た。

タマの話は衝撃であつたけれど、それでも自分の決めた正しいと思う行動を曲げたくはなかつた。

「それでも行くよ。タマちゃんの話は良く分かつたけど、今ままじゃ、私、英雄なんかじやなくて、切り裂き魔だもん。助ける人と倒す敵を区別しないと。だからあの子供とそれからあの魔法少女、二人にちゃんと謝らないと私は英雄になんか絶対なれない」

「分かつてない気がするんだよね、自分自身が考えた事の意味が。私は結構君の事を気に入っているんだ。だから下手な所で立ち止まらないでよ。この前みたいにさ」

「んふふ、ありがとう。でも大丈夫、もう魔法少女を辞めるなんて言わないよ」

法子が笑顔を浮かべて受け答える。その気安い返事が、タマには不安でならなかつた。

病院への道を法子は辛そうに歩いている。

「筋肉痛が……痛い」

それにタマが笑う。

「あれだけ大立ち回りをやつて今日動けているなら、とても成長しているよ。魔力だつてほとんど回復しているし」

その言葉で法子も嬉しそうに笑う。

「本当？ 成長してる？」

「ああ、してるしてる」

「そつか、良かつた」

幸せそうにしながら痛みに顔を顰めている法子を感じながら、タマもまた嬉しくなつた。そこで更に明るい話題にしようと、先程ニュースで見た話題に切り替える。

「そういえば、良かつたな。君の同級生が助かつて」

「え？ ああ、そうだね。そういえば、さつきニュースでやつてたね」

結局、昨日の魔物の被害は重傷者が一名のみ。一人は法子の同級生で全治一週間、もう一人が生徒を守ろうとして殴り飛ばされた教師、こちらは全治三ヶ月。ニュースの中で一人のヒーローが助けに来なかつたら殺されていただろうと評されていた。

その他に、逃げる際の混乱で、転んで皆に踏みつけにされた重傷者が一名とその他軽症者が多い。

少なくとも死者が出なかつたのは幸いだ。

法子がほつと安堵の心を持つたが、タマがそれをぶち壊す。

「あの時は、助かるなんて言つたけど、本当の所どうなるか分からなかつたからなあ」

「は？」

訳が分からず、法子は手元のタマを見つめた。

「物凄い吹つ飛ばされ方をしていたし、内臓が潰れているんじゃないかと思つたし、急がないと危険だと思つていたんだけど。いや、あの魔女の魔術は凄かつたね」

その瞬間、法子が壁にタマをぶつけた。勢い余つて、法子の腕も傷付くが気にしない。

「タマちゃん、何言つてるの？」

法子が感情を押し殺した声で尋ねる。タマが慌てて答えた。

「勘違いしないでくれよ。あの時、もし君が目の前の悲劇に拘泥すれば、あの学校どころか、町全体が滅ぶ可能性があった。冷静に考えればどちらを選ぶかなんて分かるはずだ。けどそんな事言つたって、あの時の君の天秤に、いや沸騰した人間の天秤に目の前で死にかけている人間の命を乗せたら、反対に何を持ってこようと、目の前の人間の命に傾くだろ？だから、あの時は方便を使わせてちらつたんだよ」

法子の体が震える。それが怒りによるものなのか、悲しみによるものなのかは分からない。

「そんな事言つたって！ それじゃあ、タマちゃんは見殺しにしようとしたって事？」

「まあ、そうなるね。でも今言つた様に勘違いはしないで欲しいな」「でもその為に嘘を吐いたんでしょ？」

「本当の事を言つたって君は納得しなかつただろう？ まあ、嘘を言つても納得しなかつたのは誤算だつたけど」

「でも……でもタマちゃんは嘘を吐いてまで見殺しにしよう」と

「じゃあ聞くがね、君はある時ある人間を助けられたかい？ 君はあの重体に陥つた人間を安静かつ迅速に運びだし、しかるべき処置

が受けられる場所まで連れて行く事が出来たかい？あの時はあの魔女が居たから助かつたが、そうで無ければ何処かの病院に運ぶ必要があつただろう。あれだけの重傷者を治癒する魔術を覚えている人間なんてそうそう居ないからね。あの容態だと早ければ三十分もしないで死んでいたかもしだれない。それが君に出来たかい？君はあの人間を救えたかな？」

タマの怒濤の言葉に法子は俯く。

「それは出来なかつたかもしれない……けど」

「かもじやない。出来なかつたんだ。冷静にならなくちゃいけない。あの時、君が出来た最善の行動は、一刻も早くあの事態を納めて、医療従事者があの場にやつて来れる状況にする事だつた」

法子はまだ納得がいかない様子で俯いている。

「忠告しておこづ。君はいづれ、救う対象を天秤にかける事になる。その時に中途半端な態度をとれば君の心が潰れるよ」

法子が問う。

「それは私には救いきれないって事？」

タマが答える。

「君だけじやない、誰にも救いきれないよ。世界の不幸を全部掬い上げようなんて、無茶な話さ」

法子が自嘲する。

「私はみんなを救おうとは思つてないよ。私はそこまで人が好きじゃないし。私はただ自分の為に英雄に」

タマが遮る。

「それでも、英雄を目指せばいざれぶつかるさ。救いたくても救えない、そんな大きな壁に」

「分かったよ！」

そう言って、法子は再びタマを壁にぶつけた。また勢いをつけすぎて自分の手を傷つける。

「全然納得してないじやないか」

「タマちゃんの言つ事は分かつたし、もうその事では責めてない」

「じゃあ、何で」

「タマちゃんが私に嘔吐いたから」「

法子の目から急に涙が溢れ始めた。

「何となくだけど分かるよ。お話でも良く在るから。誰かを救えない葛藤つていうのは。だからそれは良いよ。確かに昨日の私は中途半端で、決めきれなくて、それをタマちゃんが決めてくれたのかもしれない。むしろ感謝する事かも知れない。だから昨日の事についてはもう責めない。でもタマちゃん私に嘔吐いたでしょ。それが嫌なの。折角の友達なのに、ようやく昨日仲直りできたのに、それなのに嘔吐なんて」

堰を切った様に泣き始めた法子にタマが狼狽える。

「それは……すまなかつた。でもそんなに泣く程かい？」

「え？ あれ？」

ようやく法子は自分の涙に気が付いた様子で、袖で拭い始めた。「なんで泣いてるんだろう。そんな悲しい訳じゃないのに。違うんだよ、これは違うの。自分でも何だか分からない」

「ああ、いや、私も悪かった。そうだな、君はまだ若いし、人を救う道程もまだ歩き始めたばかり。それなのにいつきいつき言っこ過ぎた。老婆心が働き過ぎたよ」

「違うよ、それはもう分かつたもん。納得したし

「そうかい？」

タマが尋ねる。法子が頷く。

そして法子ははっと顔を上げた。

「分かつた。多分、私、今迄友達居た事無かつたから、それできつと必要以上に裏切られたと思って悲しいんだ。タマちゃんが居なかつた一週間も嫌で嫌でしようがなかつたし」

タマは咄嗟にそうじゃないと思つた。が、よくよく考えてみれば、その通りかもしれないと思い直した。何にせよ、法子に心労を『え過ぎた。

法子と出会つて一週間。タマに言わせれば、法子は敏感すぎる。

何にしても大げさに捉えすぎて、それに心を浮き沈みさせてしまう。それは法子だけが特別なのじゃなくて、この年代の子供はそういうものなのかもしない。

一週間、喋る刀と出会い、友達になり、変身して、魔物と闘い、同業者に負けて、人を傷つけ、魔物を倒し、人々を救つた。きっとあまりにも密度が濃すぎたのだ。普段から周囲と関わりの無い法子にとつては、この一週間それこそ今までの人生に匹敵する位の波に晒されたのかもしれない。

支えてくれる人が居ればまた違うだろうとタマは思う。その相手として自分はどうだろうとタマは考え、横には並べないと否定する。法子はタマを友達と呼ぶし、タマもそれで良いと思うが、友達とは少し立場が違うとタマ自身は思つている。体が無いから困った時に手を差し伸べる事は出来ない。悩みを聞いたつて結局タマは数百年前から生きている刀なのだ。十数年生きた人間とはかけ離れている。だから法子が悩んだ時に、正しいと思う助言は出来ても、悩みに共感する事は出来ない。

せめて自分が人型だったらなあとタマは思う。自分が人型で、法子の精神に寄生するのでなければ、きっとなれただろう。悩みを分かち合い、手を差し伸べられる友達に。

法子の家族は支えとなる存在だろうかとタマは考え、ならないと断定する。法子にとって家族は安息の場所である。外とは完全に分かれた聖域だ。だから、法子は外の悩みを決して持ちこもうしない。学校で孤独な生活を送っている事を法子は家族に黙っている。自分の中に溜め込んでいる。家族はどうやら分かつてている様だが、法子から相談していくまで待つつもりなのか、積極的に突っ込もうとはしない。

弟はそんな姉を助けようとしている様だが、法子はそれを拒否している。姉と弟という立場の違いや、弟の方は姉である法子と違つて学校で上手くやれている事などで、むしろ劣等感を感じてしまつていて。だから弟が手を差し伸べようとするが、法子の悩

みが深くなる。

結局立場が違うのだ。だから同じ立場の人間が法子の傍に居てくれればとタマは願う。特にこれから変身ヒーローを続けていくのであれば、更に悩みは増えるはずだ。そんな時に支え合える仲間が居れば。そう例えれば、

「ねえ、タマちゃん」

「なんだい？」

「さつきから思考駄々漏れだから」

「……何で？ 前はちやんと隠せていたのに」

「タマちゃんばかり私の心を覗くからずることと思つて、タマちゃんの心を読んでみた」

「そんな事が」

「出来た」

「これはやはり辛くなつたんだ」

「何を？」

色々。

「変な事企んでるんじゃないでしょうか？」

「本当に読めているんだ。全く。成長するのも良いけど、変なところで成長しないで欲しいな」

「こっちの勝手でしょ」

法子が不機嫌に受け答える。

「あのね、タマちゃん。私の傍に悩みを言える人が居ないって言つたけど、タマちゃんが居るでしょ？」

「だから私は」

「タマちゃんに体が無くなつて、種族が違つたって、タマちゃんはいつも私を支えてくれる大事な友達だもん」

「そりやどつも」

「そうじやない。私じや駄目なんだ」

「だから向考えているか分かるから」

「もう、本当にやり辛くなつたな」

タマは道の先を見る。病院が見えた。

今のやり取りで、不安が薄れてしまった。けれど、これはいずれ解決しなくてはいけない問題だ。けれどこれは法子が解決しなければならない問題で。何か自分に出来れば良いけれど。

「余計なおせつかいだよ」

その前にまず心が読まれない様にしないと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3687x/>

---

孤独な魔法少女は英雄になれるか？

2011年11月27日23時00分発行